

寝屋川市

# 寝屋東遺跡Ⅰ

一般国道1号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財調査報告書

財団法人 大阪府文化財センター

# 序 文

寝屋東遺跡は生駒山地から派生する高位～中位段丘上に位置します。これを含めて北河内北半に大きな位置を占める段丘上には各時代の指標となる資料を伴う、遺跡の点在することが知られています。これらの遺跡では、旧石器ないし縄文時代というきわめて古い時代の遺物が検出される傾向がみられ、この地域が農耕社会の成立以前には良好な狩り場にめぐまれた、生活条件の整った場所であったことがわせます。

時期がくぐり古墳時代になると、丘陵縁辺部には群集墳が点在する状況がみられます。寝屋東遺跡より南西に2 km弱の段丘上に位置する太秦古墳群はその代表的なものですが、その分布状況は、これまでも必ずしも明確に把握されているわけではありませんでした。しかし近年の第二京阪道路に先立つ発掘調査により、古墳は5世紀後半の小形方墳を中心としたグループを形成し、古式群集墳といわれるような密集した群を構成していることがわかりました。またその太秦古墳群の南側で調査された大尾遺跡では、弥生時代の方形周溝墓群や古代の掘立柱建物群などが多数検出されています。古代の掘立柱建物群は出土遺物からみて、その西側に隣接する国指定史蹟「高宮廃寺跡」の最盛期である、7世紀後半～奈良時代前半にかけての時期のものであることが明らかとなりました。

高宮廃寺とその周辺の景観に関しては、これまでの高宮遺跡の調査成果により、古墳時代後期から飛鳥時代にかけての集落が検出されており、高宮廃寺を創建した古代氏族の居住域と推定されています。平成13年度以降、第二京阪道路建設に伴って行われている発掘調査では、高宮廃寺が位置する丘陵の南側斜面が調査対象となっており、丘陵斜面沿いに分布する旧石器、頂部に位置する弥生時代方形周溝墓、斜面から頂部にかけて密集する古墳時代中期の竪穴住居群、高宮廃寺との関連が注目される飛鳥から平安時代前期の掘立柱建物群、丘陵麓から斜面にかけて並び立つ中世館跡などが検出されています。

このように、寝屋東遺跡周辺の段丘上の歴史的変遷が、当時の社会構成も含めて重層的に検討できる状況が、近年できてきました。

そのような中で、寝屋東遺跡で検出された古代の集落が、どのような機能・役割を有していたかを考えることは、当地域における古代史を考える上でも重要な意味を持つと考えます。

最後に、調査にあたってご助力、ご支援をいただいた関係諸機関、地元関係各位に深く謝意を表したいと思います。あわせて今後とも当センターの事業につきましてのご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成16年12月

財団法人 大阪府文化財センター  
理事長 水野 正好



# 例 言

1. 本書は大阪府寝屋川市寝屋に所在する寝屋東遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は第二京阪道路（大阪北道路）の建設に伴うもので、国土交通省近畿地方整備局浪速国道工事事務所（現浪速国道事務所）・日本道路公団関西支社から委託を受け、大阪府教育委員会の指導のもと、財団法人 大阪府文化財センターが実施した。事業名・委託者・受託期間・現地調査期間は次の通りである。

## 寝屋東遺跡（その1）〔寝屋東遺跡02-1〕

事業名：第二京阪道路（大阪北道路）寝屋東遺跡発掘調査

委託者：国土交通省近畿地方整備局浪速国道工事事務所

受託期間：平成14年6月1日～平成15年3月31日

現地調査期間：平成14年10月16日～平成15年3月20日

## 寝屋東遺跡（その2）〔寝屋東遺跡02-2〕

事業名：第二京阪道路（大阪北道路）寝屋東遺跡発掘調査

委託者：国土交通省近畿地方整備局浪速国道工事事務所

受託期間：平成14年6月1日～平成15年3月31日

現地調査期間：平成14年10月16日～平成15年3月20日

## 寝屋東遺跡（その3）〔寝屋東遺跡02-3〕

事業名：第二京阪道路（大阪北道路）寝屋東遺跡発掘調査（その2）

委託者：国土交通省近畿地方整備局浪速国道事務所・日本道路公団関西支社

受託期間：平成14年11月26日～平成15年2月28日

現地調査期間：平成14年12月3日～平成15年2月20日

3. 調査体制は以下の通りである。

## 寝屋東遺跡（その1）

調査部長 玉井 功、中部調査事務所所長 藤田憲司、調査第二係長 秋山浩三、主任技師 井藤暁子、技師 若林幸子

調整課長 赤木克視、同係長 森屋直樹、技師 山元 建

## 寝屋東遺跡（その2）

調査部長 玉井 功、中部調査事務所所長 藤田憲司、調査第二係長 秋山浩三、技師 中尾智行、専門調査員 松尾洋次郎

調整課長 赤木克視、同係長 森屋直樹、技師 山元 建

## 寝屋東遺跡（その3）

調査部長 玉井 功、中部調査事務所所長 藤田憲司、調査第二係長 秋山浩三、技師 河端智、専門調査員 河村恵理

調整課長 赤木克視、同係長 森屋直樹、技師 山元 建

4. 報告書掲載の遺構写真については各調査担当者が、遺物写真については京阪調査事務所 主査 上野貞子が撮影した。
  
5. 現地の発掘調査において、国土交通省近畿地方整備局浪速国道工事事務所、地元自治会、地元水利組合、地元園芸組合の協力を得ると共に、関係各機関ならびに下記の方々の御指導、御教示を賜った。記して感謝の意を表する。(敬称略、順不同)  
宇治田和生・西田敏秀(財団法人 枚方市文化財研究調査会)、塩山則之・濱田延充・浜田幸司・尾崎安啓(寝屋川市教育委員会)、野島 稔(四條畷市教育委員会)、一瀬和夫(大阪府教育委員会)
  
6. 本書の作成にあたっては、各担当者がそれぞれ寄稿した。執筆分担は下記に記す通りである。  
第1章・第3章・第4章 第1節 第1項、第2項・第5章 若林、第2章・第4章 第2節 第2項 松尾、第4章 第1節 第3項・第4章 第2節 第3項 井藤、第4章 第2節 第1項 中尾、第4章 第3節 河端
  
7. 発掘調査にあたっては、以下の方々の参加・協力を得た(五十音順・敬称略)。  
井上教子・久木真美・佐野 円・田中英子・田村 崇・中谷直貴・文谷由紀恵・松田直子・松本直美・山田久美
  
8. 本書の編集は主に若林が行った。
  
9. 本調査で出土した遺物、および本調査に関わる写真・実測図などの記録類は、財団法人大阪府文化財センターにおいて保管している。広く利用されることを希望する。

## 凡 例

1. 遺構や土層断面の測量・実測における基準高は、東京湾平均海水面（T. P.）を用いている。
2. 遺構検出面の測量・実測は世界測地系（測地成果2000）に基づく平面直角座標第Ⅵ系（平成14年度国土交通省告示第9号）をもとに行っている。
3. 遺構平面図に付す方位針の方向は、座標北を指す。
4. 現地調査や遺物整理は「遺跡調査基本マニュアル〔暫定版〕」2003. 8 （財）大阪府文化財センターに準拠して行った。地区割りの第Ⅰ区画はJ 7、第Ⅱ区画は5である。
5. 土層断面図の土色は小山正忠・竹原秀雄編『新版 標準土色帖』第24版 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人 日本色彩研究所色票監修を使用した。なお、その記載順序は記号・色名・土質名とする。
6. 遺構番号は基本的に、調査時に付したものを使用している。遺構の種類（建物、溝など）の後に遺構番号（アラビア数字）が続く。調査区ごとに、遺構の種類に応じて1から付けている。ただし（その1）調査区のピット番号のみは、（その2）調査区のピット番号と混同しないため、001からの通し番号を使用している。なお、遺構番号のない遺構（たとえば粘土採り穴）はその限りではない。
7. 土層断面図、遺構平・断面図は対象により適宜縮尺を変えて掲載している。各図面の縮尺はスケールを付して表示している。
8. 遺物実測図面の縮尺は基本的に3分の1であるが、必要に応じて異なる縮尺を用いた。各図面の縮尺はスケールを付して表示している。
9. 遺物実測図面において須恵器および須恵質土器は、土師器との区別が可能なように、断面を墨で塗りつぶした。

# 目次

序文  
例言  
凡例  
目次

第1章 調査に至る経緯と経過	(若林幸子)	1
第2章 位置と環境	(松尾洋次郎)	1
第3章 調査の方法	(若林)	10
第4章 調査成果		11
第1節 (その1)の調査成果		11
第1項 基本層序	(若林)	11
第2項 遺構	(若林)	17
第3項 遺物	(井藤暁子)	25
第2節 (その2)の調査成果		31
第1項 基本層序	(中尾智行)	31
第2項 遺構	(松尾)	31
第3項 遺物	(井藤)	47
第3節 (その3)の調査成果	(河端智)	51
第1項 基本層序		51
第2項 遺構		51
第3項 遺物		55
第5章 まとめ	(若林)	56

# 挿図目次

第1図 北河内の遺跡立地	2
第2図 遺跡分布図	3
第3図 調査区分図	10
第4図 1A区・1B区 層序模式図	11
第5図 1B区 北西壁土層断面図	12
第6図 1A区 南東壁土層断面図	14
第7図 1A区・1B区 平面図	16
第8図 1A区 建物9 平・断面図	18
第9図 1A区 建物11 平・断面図	18
第10図 1A区 建物10 平・断面図	19
第11図 1A区 建物12・13 平・断面図	20
第12図 1A区・1B区 土坑2・5、ピット054 平・断面図	21
第13図 1B区 粘土採り穴 平・断面図	23

第14図	1 A区 谷における遺物出土状況図	24
第15図	1 A区・1 B区 遺構・その他出土土器	25
第16図	1 A区・1 B区 谷出土土器	27
第17図	2 A区・2 B区 層序模式図	32
第18図	2 A区 上段：北西壁断面図 下段：南西壁断面図	33
第19図	2 B区 南西壁土層断面図①	34
第20図	2 B区 南西壁土層断面図②	35
第21図	2 A区・2 B区 平面図	36
第22図	2 A区 建物8 平・断面図	37
第23図	2 A区 建物1・柵1 平・断面図	38
第24図	2 A区 建物16 平・断面図	39
第25図	2 A区 建物3 平・断面図	40
第26図	2 A区 建物4・5 平・断面図	41
第27図	2 A区 建物2 平・断面図	42
第28図	2 A区 建物6・7 平・断面図	43
第29図	2 A区・2 B区 土坑50、ピット51・53・57・64・84 平・断面図	45
第30図	2 A区・2 B区 溝117、落込み27 平・断面図	46
第31図	2 B区 谷断面図	48
第32図	2 A区・2 B区 遺構・その他出土土器・石器	49
第33図	寢屋東遺跡（その3） 北壁・東壁土層断面図	52
第34図	寢屋東遺跡（その3） 第1・2面 平面図	53
第35図	寢屋東遺跡（その3） 検出遺構断面図	54
第36図	寢屋東遺跡（その3） 包含層出土土器	55
第37図	寢屋東遺跡建物配置図	58

## 表 目 次

第1表	北河内の飛鳥～室町時代主要遺跡（1）	6
第2表	北河内の飛鳥～室町時代主要遺跡（2）	7
第3表	北河内の飛鳥～室町時代主要遺跡（3）	8
第4表	北河内の飛鳥～室町時代主要遺跡（4）	9
第5表	1 A区・1 B区 遺構・その他出土土器観察表	25
第6表	1 A区・1 B区 谷出土土器観察表	28
第7表	2 A区・2 B区 遺構・その他出土土器・石器観察表	50
第8表	寢屋東遺跡検出掘立柱建物一覧表	57

## 写真図版目次

写真図版1	1	寢屋東遺跡（その1）1 A区 全景（北西から）
	2	寢屋東遺跡（その1）1 A区 全景（東から）
写真図版2	1	寢屋東遺跡（その1）1 B区 全景（南東から）
	2	寢屋東遺跡（その1）1 B区 全景（北東から）
写真図版3	1	寢屋東遺跡（その1）谷（南東から）
	2	寢屋東遺跡（その1）谷（南東から）
写真図版4	1	寢屋東遺跡（その1）1 B区 北西壁断面（南から）
	2	寢屋東遺跡（その1）1 B区 周辺地形との比較（南東から）
	3	寢屋東遺跡（その1）1 A区 建物9（南から）
	4	寢屋東遺跡（その1）1 A区 建物10（西から）

写真図版 5	1	寢屋東遺跡 (その1)	1 A区	建物12 (南から)
	2	寢屋東遺跡 (その1)	1 A区	建物13 (南から)
	3	寢屋東遺跡 (その1)	1 A区	建物11 (南から)
	4	寢屋東遺跡 (その1)	1 A区	建物 9、ピット011 (西から)
写真図版 6	1	寢屋東遺跡 (その1)	1 A区	土坑 2 (西から)
	2	寢屋東遺跡 (その1)	1 B区	粘土採り穴横断面 (南東から)
	3	寢屋東遺跡 (その1)	1 B区	谷横断面 (南から)
	4	寢屋東遺跡 (その1)	1 B区	谷横断面④～⑤層 (南東から)
	5	寢屋東遺跡 (その1)	1 B区	谷遺物検出状況 (南から)
	6	寢屋東遺跡 (その1)	1 A区	谷遺物検出状況 (南から)
写真図版 7	1	寢屋東遺跡 (その2)	2 A区	全景 (北西から)
	2	寢屋東遺跡 (その2)	2 A区	全景 (北から)
写真図版 8	1	寢屋東遺跡 (その2)	2 B区	全景 (南西から)
	2	寢屋東遺跡 (その2)	2 B区	谷 (南から)
写真図版 9	1	寢屋東遺跡 (その2)	2 A区	建物 1 (西から)
	2	寢屋東遺跡 (その2)	2 A区	建物 2 (北から)
	3	寢屋東遺跡 (その2)	2 A区	建物 3 (北から)
写真図版10	1	寢屋東遺跡 (その2)	2 A区	建物 4 (北から)
	2	寢屋東遺跡 (その2)	2 A区	建物 5 (北東から)
	3	寢屋東遺跡 (その2)	2 A区	建物 6 (北西から)
写真図版11	1	寢屋東遺跡 (その2)	2 A区	建物 7 (北から)
	2	寢屋東遺跡 (その2)	2 A区	建物 8 (北から)
	3	寢屋東遺跡 (その2)	2 B区	建物16 (南から)
写真図版12	1	寢屋東遺跡 (その2)	2 A区	建物 1・柵 1 (北から)
	2	寢屋東遺跡 (その2)	2 A区	ピット51遺物出土状況 (北西から)
	3	寢屋東遺跡 (その2)	2 A区	ピット64遺物出土状況 (北西から)
	4	寢屋東遺跡 (その2)	2 A区	ピット57遺物出土状況 (南西から)
	5	寢屋東遺跡 (その2)	2 A区	ピット84遺物出土状況 (南西から)
写真図版13	1	寢屋東遺跡 (その2)	2 A区	ピット98遺物出土状況 (北から)
	2	寢屋東遺跡 (その2)	2 A区	土坑50遺物出土状況 (南西から)
	3	寢屋東遺跡 (その2)	2 B区	溝117 (西から)
	4	寢屋東遺跡 (その2)	2 A区	落込み27 (東から)
	5	寢屋東遺跡 (その2)	2 B区	谷堆積状況 (北西から)
	6	寢屋東遺跡 (その2)	2 A区	土採り穴 (南から)
写真図版14	1	寢屋東遺跡 (その3)	1・2面西半部	全景 (南西から)
	2	寢屋東遺跡 (その3)	1・2面東半部	全景 (西から)
写真図版15	1	(その2) 遺物包含層出土	2～4 (その1) 谷出土	
	5	(その1) 遺物包含層出土		
	6	(その2) 谷出土	7 (その1) 遺物包含層出土	8 (その1) 谷出土
	9	(その1) 谷出土	10 (その3) 第1層出土	11 (その2) 谷出土



## 第1章 調査に至る経緯と経過

寝屋東遺跡は縄文時代～江戸時代にわたる遺物の散布地として周知されるにいたった遺跡である。当調査区が第二京阪道路（大阪北道路）の予定地にあっていたことから、国土交通省近畿地方整備局浪速国道工事事務所と大阪府教育委員会の協議の結果、遺物の包蔵の有無や、遺跡の詳細を確認するための調査が行われることになった。平成13年度に大阪府教育委員会の指導のもと、(財)大阪府文化財調査研究センターが確認調査を行った。2 m幅の細長いトレンチを40数カ所設けて遺構・遺物の分布状況を検討した結果、掘立柱建物跡からなる古代集落の存在することが推定されたため（参考文献34）、平成14年度に寝屋東遺跡（その1）・（その2）・（その3）の、平成15年度に寝屋東遺跡（その4）の発掘調査が行われることとなった。本書では寝屋東遺跡（その1）～（その3）の発掘調査成果を報告する。

## 第2章 位置と環境 - 調査地周辺の地形・地質概要と飛鳥～室町時代の主な遺跡 -

寝屋東遺跡が所在する北河内北半は、枚方丘陵や交野台地と呼ばれる丘陵ないし台地状地形が広範囲に発達する地帯である。地質的にみるとMa7～Ma8に相当する大阪層群やその大阪層群を覆う段丘堆積物から成っている。加えて船橋川・穂谷川・天野川といった河川による侵食作用を受けて、高～低位に区分される段丘面が形成されているが、その中で寝屋東遺跡はたち川右岸の高位段丘面上に立地する。このような地形・地質環境にある調査地とその周辺域では、旧石器時代から人間活動がうかがえる。

本章では今回の調査成果との関わりを考える上で参考となる、飛鳥～室町時代の建物跡を検出した主な遺跡を紹介したい。

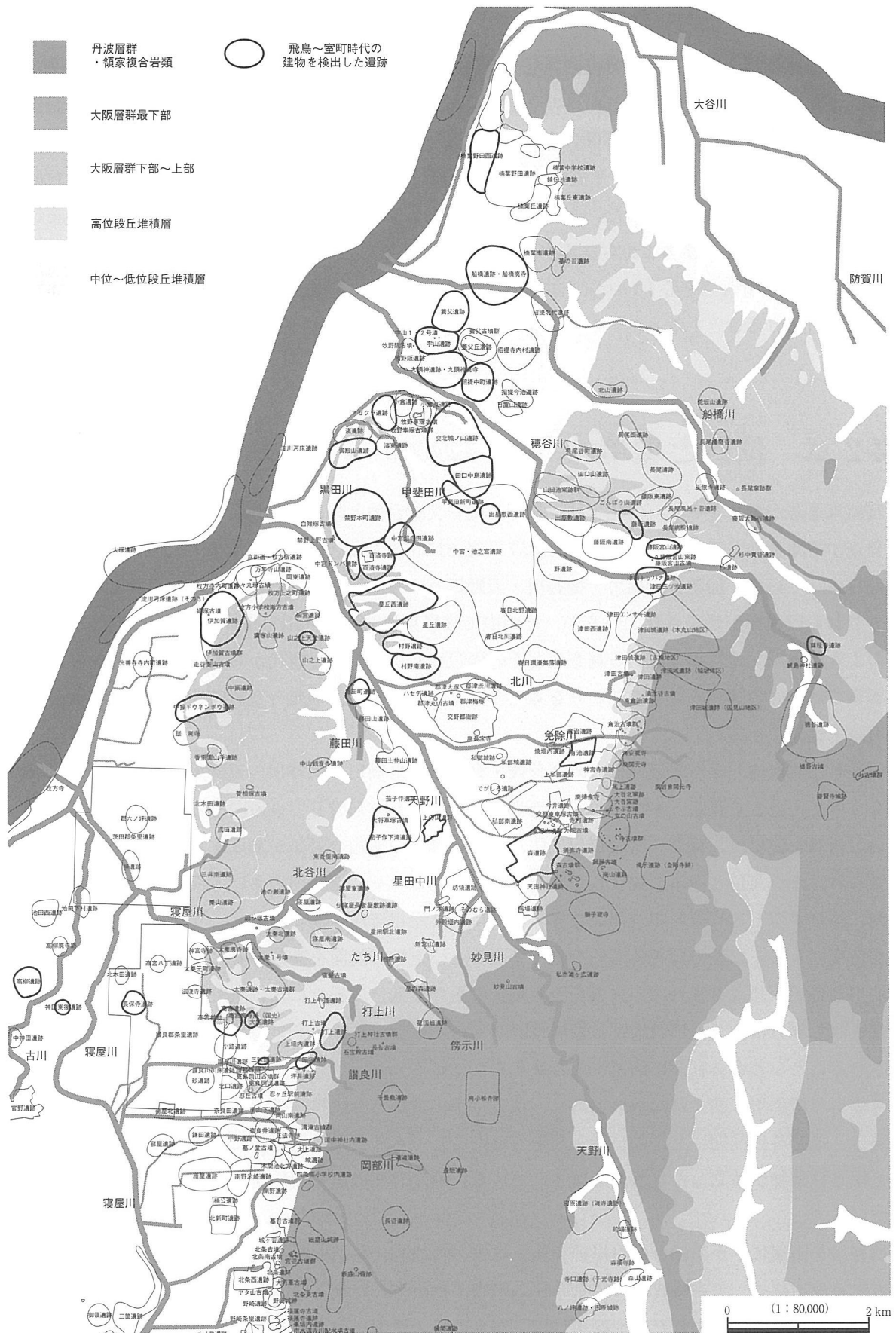
前述した北河内北半を広範囲に占める丘陵・台地は、舟橋川・保谷川・天野川・寝屋川等の河川の貫入をうけて、大きく見ると4ないし5の地形的なまとまりを形成している。それぞれのまとまりは、北ないし西側を淀川で、東側を断層が形成する丹波層群・領家複合岩類が形成する山地にむけての崖面に区切られ、かつ河川と河川に挟まれた空間を呈している。その空間内における飛鳥～室町時代の遺跡の展開に注目するとそれぞれの空間的なまとまりは、寝屋川流域を別にすると、丘陵部分に集約される傾向が指摘できる。以下では各地形的なまとまりごとに遺跡の展開を概観する。

淀川と舟橋川にはさまれた、枚方丘陵北端部にあたる低位段丘上には、室町時代まで断続的に建物が造営された枚方市楠葉野田西遺跡と船橋遺跡がある。船橋遺跡は、奈良時代前半の建物が南北に整然と配されることなどから官衙に関連すると考えられている。

舟橋川と穂谷川に挟まれた台地上には、枚方市宇山遺跡と九頭神遺跡・招提中町遺跡がある。九頭神遺跡は、飛鳥時代後期に九頭神廃寺が創建されたことで有名だが、創建前にも古墳時代末から竪穴式住居と掘立柱建物が並立した集落が形成されている。飛鳥時代の竪穴式住居は、招提中町遺跡でも検出されている。

穂谷川を南東にさかのぼった右岸の丘陵上には、古墳時代後期から奈良時代の建物が多く検出された枚方市藤阪遺跡や、平安時代から鎌倉時代の建物が検出された枚方市津田トッパナ遺跡がある。

穂谷川と天野川に挟まれた台地縁辺には、奈良時代の建物を中心として検出された枚方市アゼクラ遺跡と御殿山遺跡・甲斐田新町遺跡・禁野本町遺跡・中宮ドンパ遺跡・百済寺遺跡・中宮尼寺田遺跡・村



第1図 北河内の遺跡立地





野南遺跡や、平安時代から鎌倉時代の建物を中心とする枚方市交北城ノ山遺跡・田口中島遺跡・星丘西遺跡・村野遺跡と多くの遺跡がある。この中でも百済寺遺跡は、奈良時代後期から平安時代初めに百済王氏の氏寺が創建されたことで有名である。隣接する禁野本町遺跡などは、この遺跡に何らかの関係がある遺跡として注目されている。

天野川左岸に沿った丘陵上には、古墳時代後期から飛鳥時代初頭の建物が検出された枚方市藤田町遺跡や奈良時代の上の山遺跡、鎌倉時代から室町時代の枚方市茄子作下浦遺跡・山之上天堂遺跡がある。山之上天堂遺跡は、検出された柱穴の存在から融通念仏宗との関係が想起されている。

生駒山系の西麓部には、鎌倉時代を中心とした交野市有池遺跡と森遺跡がある。

淀川左岸の低地や丘陵南西裾には、奈良時代と鎌倉時代から室町時代の建物が検出された枚方市伊加賀遺跡と中振ドウネンボウ遺跡がある。

打上川と讃良川にはさまれた丘陵上には、飛鳥時代から奈良時代にかけての建物が検出された寝屋川市高宮遺跡・大尾遺跡・三味頭遺跡や、奈良時代の建物が検出された寝屋川市打上遺跡、鎌倉時代から室町時代の柱穴が検出された寝屋川市国守遺跡がある。高宮遺跡の大型掘立柱建物は、飛鳥時代後期に創建される高宮廃寺と関係する豪族の居館と推測されている。

一方、淀川や古川、寝屋川の氾濫原に当たる低地では、飛鳥時代から室町時代まで継続的に建物が検出された寝屋川市長保寺遺跡や、平安時代の建物が検出された寝屋川市神田東後遺跡と高柳遺跡がある。

以上の状況から北河内北半では、遺跡の多くが穂谷川と天野川流域の台地・丘陵縁辺部にあることがわかる。この内の数遺跡は、飛鳥時代から室町時代まで継続または断続的に集落が形成されている。一方で、淀川左岸の低地や寝屋川の氾濫原にも遺跡のまとまりが看取でき、同じく長期にわたって集落が形成される遺跡があることは興味深い。以上のことから、遺跡の建物数や配置を見ていくことで、各まとまりでの遺跡の関係や、まとまり同士の関係が具体化するのではないだろうか。

#### <参考文献>

- (1) 大阪府教育委員会 2001 『大阪府文化財分布図』
- (2) 大阪府教育委員会 2002 『招提中町遺跡－府営枚方牧野東住宅建て替えに伴う弥生時代墓域の調査－』大阪府埋蔵文化財調査報告 2001-1
- (3) 交野市教育委員会 1997 『森遺跡Ⅵ』交野市埋蔵文化財調査報告 1996-Ⅲ
- (4) 交野市教育委員会 2001 『森遺跡Ⅷ』交野市埋蔵文化財調査報告 2000-Ⅱ
- (5) 寝屋川市史編纂委員会 1998 『寝屋川市史』 第1巻
- (6) 枚方市教育委員会 1991 『枚方市埋蔵文化財発掘調査概要1990』枚方市文化財調査報告 第24集
- (7) 枚方市教育委員会 1992 『枚方市埋蔵文化財発掘調査概要1991』枚方市文化財調査報告 第26集
- (8) 枚方市教育委員会 1993 『枚方市埋蔵文化財発掘調査概要1992』枚方市文化財調査報告 第27集
- (9) 枚方市教育委員会 1997 『枚方市埋蔵文化財発掘調査概要1996』枚方市文化財調査報告 第31集
- (10) 枚方市教育委員会 1999 『枚方市埋蔵文化財発掘調査概要1998』枚方市文化財調査報告 第34集
- (11) 枚方市教育委員会 1997 『九頭神遺跡－九頭神廃寺－』枚方市文化財調査報告 第32集
- (12) 枚方市史編纂委員会 1986 『枚方市史』 第12巻
- (13) 枚方市文化財研究調査会 1978 『大阪府枚方市山之上天堂遺跡調査概要報告』枚方市文化財調査報告 第13集
- (14) (財)大阪府文化財センター 2002 『讃良郡条里遺跡、小路遺跡、打上遺跡、茄子作遺跡、藤阪大亀谷遺跡・長尾窯跡群 長尾東地区』(財)大阪府文化財センター調査報告書 第77集
- (15) (財)枚方市文化財研究調査会 1980 『枚方市文化財年報Ⅰ 1980』
- (16) 枚方市教育委員会 1981 『枚方市文化財年報Ⅱ 1981』
- (17) 枚方市教育委員会 1982 『枚方市文化財年報Ⅲ 1982』
- (18) 枚方市教育委員会 1984 『枚方市文化財年報Ⅴ 1984』

- (20) 枚方市教育委員会 1987 『枚方市文化財年報Ⅶ 1986』
- (21) 枚方市教育委員会 1988 『枚方市文化財年報Ⅷ 1987』
- (22) 枚方市教育委員会 1989 『枚方市文化財年報Ⅸ 1988』
- (23) 枚方市教育委員会 1990 『枚方市文化財年報Ⅹ 1989』
- (24) 枚方市教育委員会 1992 『枚方市文化財年報11 1989年度』
- (25) 枚方市教育委員会 1994 『枚方市文化財年報13 1991年度』
- (26) 枚方市教育委員会 1995 『枚方市文化財年報14 1992年度』
- (27) 枚方市教育委員会 1995 『枚方市文化財年報15 1993年度』
- (28) 枚方市教育委員会 1995 『枚方市文化財年報16 1994年度』
- (29) 枚方市教育委員会 1996 『枚方市文化財年報17 1995年度』
- (30) 枚方市教育委員会 1997 『枚方市文化財年報18 1996年度』
- (31) 枚方市教育委員会 1999 『枚方市文化財年報20 1998年度』
- (32) (財)大阪府文化財センター 2003 『大尾遺跡 一般国道1号バイパス(大阪北道路)建設に伴う小路遺跡発掘調査報告書』(財)大阪府文化財センター調査報告書 第92集
- (33) (財)大阪府文化財センター 2004 『高宮遺跡 一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-遺構編-』(財)大阪府文化財センター調査報告書 第115集
- (34) (財)大阪府文化財センター 2003 『門真西地区、讃良郡条里遺跡西地区、讃良郡条里遺跡、大尾遺跡・太秦遺跡・太秦古墳群、打上遺跡、寝屋南遺跡、寝屋東遺跡、私部南遺跡、東倉治遺跡、津田城遺跡東地区 一般国道1号バイパス(大阪北道路)建設に伴う埋蔵文化財確認調査報告書』(財)大阪府文化財センター調査報告書 第93集

第1表 北河内の飛鳥～室町時代主要遺跡（1）

遺跡名	所在地	調査次 or 地区：建物 No	規 模		軸方向	時 期	文 献	
			東西間×南北間	m				
楠葉野田西遺跡	枚方市楠葉町、楠葉中町、北楠葉町	53次	? × 3 ≦	-	-	室町	30	
		53次	2 × 1	約12	-	-		
		52次：掘立柱建物	-	-	-	-	平安：前	31
		71：竪穴	-	-	-	-	飛鳥	
		71：掘立柱建物跡①	3 × 2	-	N19°E	奈良：前		
		71：掘立柱建物跡②	3 × 4	-	N20°E	-		
		71：掘立柱建物跡③	2 × 2	-	N9°E	-		
71：掘立柱建物跡④	3 ≦ × 3	-	N27°E	-				
船橋遺跡	枚方市船橋本町、北船橋町、西船橋町	5棟≦	-	-	-	奈良：前	26	
		6棟≦	-	-	-	平安末～鎌倉		
		8棟	-	-	-	時期不明		
養父遺跡	枚方市養父元町、養父東町	?	-	-	-	?	1	
宇山遺跡	枚方市宇山町、宇山東町		2 × 2	-	-	時期不明	20	
		15：SB-2	2 × 2	約13	N11°E	鎌倉末～室町前	25	
		15：SB-5	3 ? × 5	42	N16°E	時期不明		
		15：SB-6	2 × 2	約14	N20°W	-		
		15：SB-7	2 × 2	約12	N15°W	-		
九頭神遺跡	枚方市牧野本町、宇山東町	4：柱穴列	1 × 8 ≦	-	N12°E	平安：前	20	
		35：SB 01	1 × 1	約2	N8°E	時期不明		6
		37：SB 01	2 × 3	約17	N12°W	飛鳥：前	-	
		37：SB 02	2 ≦ × 2	-	N11°5' E	-	-	
		37：SB 03	5 ≦ × 1	-	W 8°5' N	-	-	
		37：SB 04	3 × 2 ≦	-	N7°E	-	-	
		37：SB 05	3 × ?	-	N7°E	-	-	
		37：SB 06	?	-	N7°E	-	-	
		45：SB 01a	?	-	N14°W	-	古墳末～飛鳥前	
		45：SB 01b	?	-	N8°W	-	-	
		45：SB 02	?	-	N33°W	-	-	
		45：SB 03	?	-	N25°W	-	-	
		45：SB 04	2 × 2 ≦	-	N6°E	-	-	
		56：SB 01	2 ≦ × 1	-	N	-	古墳末～飛鳥前?	7
		56：SB 02	?	-	N5°W	-	-	
		56：SB 03	1 ≦ × 2 ≦	-	N31°W	-	-	-
		56：SB 04	3 ≦ × 1 ≦	-	N27°W	-	-	-
		56：SB 05	3 ≦ × 4 ≦	-	N43°W	-	-	-
		53：SB-03	? × 2 ?	-	N20°W	-	時期不明	25
		53：SB-04	3 ≦ × 2 ?	-	E 18°S	-	-	
		53：SB-05	? × 2 ?	-	N13°W	-	-	
		53：SB-06	2 × 1	約10	E 13°S	-	鎌倉	
		53：SB-07	1 ≦ × 5	-	N8°W	-	時期不明	
		53：SB-08	? × 2	-	N3°W	-	鎌倉	
		53：SB-09	2 ≦ × 2 ?	-	E 13°S	-	奈良	
		53：SB-11	1 ≦ × 3	-	N	-	鎌倉	
		58：SB-1	2 × 1	-	N	-	-	
		58：SB-2	1 × 5	-	N24°W	-	奈良	
		58：SB-3	1 × 1	-	N	-	鎌倉	
		58：SB-4 a	2 × 2	-	N13°E	-	奈良	
		58：SB-4 b	2 × 2	-	N13°E	-	-	
		58：SB-5	2 × 2 ?	-	N18°E	-	鎌倉	
		58：SB-6	2 ? × 2	-	N12°E	-	-	
		58：SB-7	2 × ?	-	N20°E	-	-	
		58：SB-8	2 ≦ × 2	-	N20°E	-	-	
		58：SB-9	2 × 2	-	N20°E	-	-	
		58：SB-10	2 ≦ × 2	-	N13°E	-	-	
		58：SB-11	2 × 2	-	N	-	奈良	
		58：SB-12	2 × 1	-	N14°E	-	鎌倉	
		58：SB-13	? × 2	-	N6°W	-	-	
		82：SB 9001	2 × 2	-	N5°W	-	時期不明	
		82：SB 02	? × 2 ≦	-	N3°W	-	-	
		84：SB 8401	5 × 2	約73	N	-	平安	
		84：SA 8401	1 ≦	-	E 2°S	-	時期不明	
		SB 7701	基壇	-	N2°W	-	飛鳥：後	
		SB 9801	1 ≦ × 2 ≦	-	N12°15' E	-	飛鳥：前～中	
		SB 10901	1 × 2	約11	N15°E	-	-	
SA 7701	1 ≦	-	N2°W	-	-			
SA 9801	4 ≦	-	N1°30' E	-	-			
SA 9802	2 ≦	-	-	-	-			
SC 401	4 ≦ × 7 ≦	-	-	-	-			
招提中町遺跡	枚方市招提中町、招提平野町、東牧野町		2 × 2	-	-	平安：前	17	
			2 × 4	-	-	-		
			2 × 5	-	-	-		
			3 × 4	-	-	-		
			3 × 5	-	-	-		
		33：竪穴	2棟≦	-	-	-		飛鳥
		33：掘立柱建物	10棟≦	-	-	-		奈良～平安
		47：SB-1	2 ≦ × 2	-	N8°W	-	奈良後～平安前	
		47：SB-2	2 ≦ × 2 ≦	-	N15°5' W	-	-	
		47：SB-3	? × 3	-	N	-	-	
		47：SB-4	2 ≦ × 2	-	N12°W	-	-	
		47：SB-5	2 ≦ × 2	-	N5°W	-	-	
		47：SB-6	2 ≦ × 2	-	N12°W	-	-	
		47：SB-7	2 ≦ × 2	-	N17°W	-	-	
1号掘立柱建物跡	3 × 2	約20	N85°E	-	平安：前	2		



第2図 北河内の飛鳥～室町時代主要遺跡（2）

遺跡名	所在地	調査次 or 地区：建物 No	規 模		軸方向	時 期	文献
			東西間×南北間	m			
招提中町遺跡	枚方市招提中町、招提平野町、東牧野町	2号掘立柱建物跡	2×3	約17	N8°W	時期不明	31
		3号掘立柱建物跡	4×1	約19	N84°E	平安：初	
		4号掘立柱建物跡	2×1	約7	N81°E	時期不明	
		6号掘立柱建物跡	2×1	約6.5	N51°W		
		5号掘立柱建物跡	3×1	約21	N86°E	鎌倉	
		7号掘立柱建物跡	1×2	—	—	時期不明	
		24号掘立柱建物跡	2×2	約11	N12°W	平安	
		19号掘立柱建物跡	2×3	約26.5	N12°W	平安：前	
		20号掘立柱建物跡	3×2	約18	N84°E		
		10号掘立柱建物跡	2×3	約24	N10°W	時期不明	
		8号掘立柱建物跡	2×2	約20	N92°E		
		9号掘立柱建物跡	3×2？	約23	N74°E		
		21号掘立柱建物跡	2×3	約19	N11°E		
		22号掘立柱建物跡	3×2	約20	N20°E		
		11号掘立柱建物跡	3×3	約23	N7°W		
		17号掘立柱建物跡	2×2	約18	N57°W		
		12号掘立柱建物跡	3×2	約18	N53°W		
		13号掘立柱建物跡	3×3	約21	N54°W		
		15号掘立柱建物跡	2×2	約15	N31°W		
		16号掘立柱建物跡	2×1	約12	N56°E		
14号掘立柱建物跡	5×3	約38	N85°W				
23号掘立柱建物跡	2×2	約16	N22°W				
18号掘立柱建物跡	5≤×2≤	約32≤	N52°E				
藤阪宮山遺跡	枚方市藤阪天神町	？	—	—	—		1
藤阪遺跡	枚方市藤阪元町、藤阪西町	6：23棟	—	—	—	古墳後～奈良	26
		8：SB-01	2×2	約16	N20°E	奈良	
		8：SB-02	2×2	約16	N23°E		
		8：SA-01・02	4≤	—	—		
津田トツバナ遺跡	枚方市津田北町	A：SB-001	3×4	—	？	平安	20
		D：SB-001	2×2	—	N19°E		
		D：SB-003	2×3	—	N16°E		
		D：SB-004	2×3	—	N1°E	鎌倉	
		D：SB-005	5×1	—	N		
尊延寺遺跡	枚方市尊延寺	？	—	—	—	1	
アゼクラ遺跡	枚方市小倉町	11：SB-01	3×2	約22	N	奈良～平安	27
		32：SB-01	3×2	約24	—	時期不明	30
御殿山遺跡	枚方市御殿山町、上野	SB-02	3×1	約6	N12°E	古墳後～平安前	21
		SB-05	4×2≤	約36	N1°E		
		SB-06	5≤×1	約19	N8°E		
		SB-07	3≤×？	—	N3°W		
		SB-08	3≤×？	—	？		
		SB-09	3≤×2	約17	N7°W		
		2：4棟	—	—	—	平安：前	
		8：SB01	4≤×2	—	N9°W	古墳後～奈良	
		8：SB02	2≤×2≤	—	N11°E		
		8：SA05	3？	—	N9°W		
交北城ノ山遺跡	枚方市交北、片鉾本町、片鉾東町	東	7×？	—	—	平安中～鎌倉初	
		西	6×？	—	—		
田口中島遺跡	枚方市田口	柱穴	—	—	—	平安	
村野南遺跡	枚方市村野本町、村野東町	A：5棟	—	—	—	奈良	25
		B・C・E：2棟	—	—	—		
		D：？	—	—	—		
村野遺跡	枚方市印田町、村野本町	SB-4	2×2	—	N4°W	鎌倉	19
		SB-5	2×2≤	—	N4°W		
		SB-6	？	—	？		
星丘西遺跡	枚方市宮之阪、星丘	SB-01	2×3	約30	N8°E		24
百濟寺遺跡	枚方市中宮西之町、宮之阪	SB-01	2≤×2≤	—	N33°W	奈良：前～中	26
		SB-02	？	—	N24°5' W		
		SB9501	3×2	—	—	飛鳥：後	
		SB9502	？×2	—	—	飛鳥：後	
		SB9503	？	—	—	飛鳥：後	
		SB9504	？	—	—	飛鳥：後	
		44次	1×2	約5	N6°W	飛鳥～奈良	
中宮ドンバ遺跡	枚方市宮之阪、禁野本町	掘立柱建物	—	—	—	奈良	22
		掘立柱建物	—	—	—	奈良～室町	
禁野本町遺跡	枚方市禁野本町、中宮北町、中宮本町	SB-1	2≤×2≤	—	N	平安	21
		5：SB-001	3×3	約22	N1°E	奈良	
		5：SB-002	2×4	約33	N5°E		
		5：SB-003	？	約32	N5°E		
		5：SB-004	？×2	—	N		
		5：SB-005	2×3	約16	N6°E		
		6：SB-02	2×2	約11	N7°E	奈良後～平安前	
		6：SB-03	2×2	約14	N7°E		
		6：SB-04	4×1	約20	N7°E		
		6：SB-05	2×3	約29	N7°E		
		6：SB-06	2×4	約37	N8°E		
		69：9棟以上	—	—	—		
		71：SB-1	3≤×？	—	N13°W	平安：前	
		71：SB-2	？	—	N11°W		
		中宮尼寺田遺跡	枚方市中宮山戸町ほか	7：SB-01	2×3	約27	
7：SB-02	2×3			約25	N31°E		
7：SB-03	2×3			約17	N26°E		
7：SB-03	1×1			—	？		

第3表 北河内の飛鳥～室町時代主要遺跡（3）

遺跡名	所在地	調査次 or 地区：建物 No	規 模		軸方向	時 期	文献				
			東西間×南北間	m							
中宮尼寺田遺跡	枚方市中宮山戸町ほか	7：SB-04	1×3	-	N11°E	奈良～平安	25				
		7：SB-05	?	-	?						
甲斐田新町遺跡	枚方市甲斐田新町、甲斐田東町		2×2	約19	N	飛鳥：前～中 時期不明	24 7				
		10：SB01	2×2≦	-	N7°E						
		10：SB02	?	-	N6°30' W						
		10：SA01	2≦	-	W15°N						
出屋敷西遺跡	枚方市出屋敷西町ほか	?	-	-	-	-	1				
伊加賀遺跡	枚方市枚方公園町	A：柱穴	-	-	-	奈良	29				
		A：柱穴	-	-	-	鎌倉～室町					
		B：掘立柱建物	2≦×?	-	-	奈良					
		C：掘立柱建物	2×1	約8	-	奈良					
		E：SB-02	4×3	約35	-	-					
中振トウネンボウ遺跡	枚方市北中振	E：SB-03	3×2	約17	-	-	23				
		柱穴	-	-	-	鎌倉～室町					
山之上天堂遺跡	枚方市山之上北町	SB-1	3×5≦	-	N10°E	奈良：後	27				
藤田町遺跡	枚方市藤田町、山之上	柱穴	-	-	-	室町	13				
			2×2	-	-	古墳後～飛鳥初					
			2×3	-	-	-					
			3×4	-	-	平安後～室町中					
			2×2≦	-	-	-					
茄子作下浦遺跡	枚方市茄子作、高田	SB1	1×1	約3	N12°W	鎌倉～室町	19				
上の山遺跡	枚方市茄子作車町	SB01	?×2	-	N7°E	奈良～平安					
森遺跡	交野市森南ほか	96-4-3	2?×1≦	-	N28°W	鎌倉～室町	3				
		2000-1：柱穴群	柱穴群	-	-	-	4				
有池遺跡	交野市青山	掘立柱建物1	1×2≦	-	N1°E	鎌倉					
		掘立柱建物2	1×4	-	N1°E						
		柱穴列	3≦	-	N24°E						
寝屋東遺跡	寝屋川市寝屋		-	-	-	-	本報告書				
国守遺跡	寝屋川市国守町	柱穴	-	-	-	鎌倉～室町	5				
打上遺跡	寝屋川市打上	SB1	3a×3a	-	N30°～40°W	奈良	5				
		SB2	2×2	-	N30°～40°W						
		SB3	4×2	-	N10°～20°W						
		SB4	2×3	-	N10°～20°W						
		SB5	2×2	-	N10°～20°W						
		SB6	2×4	-	N10°～20°W						
		SB7	2×3	-	N						
		SB8	2×2	-	N						
		SB9	2×2	-	N						
		SB10	2×4	-	N						
		SB11	3×2	-	N						
		SB12	2×3	-	N						
		SB13	2×3	-	N						
		SB14	3×2	-	N						
		大尾遺跡	寝屋川市国守町	掘立柱建物1	2×3≦	-		N5°E	飛鳥～奈良	32	
掘立柱建物2	2×6			約43	N						
掘立柱建物3	3×3			約21	N5°w						
掘立柱建物4	2×4			約27	N10°E						
掘立柱建物5	2×3			約20	N10°E						
掘立柱建物6	2≦×2			-	N						
掘立柱建物7	3×2			約16	N10°E						
掘立柱建物8	3×2			約22	N10°E						
掘立柱建物9	4×2			約30	N5°E						
掘立柱建物10	5×2			約38	N5°E						
掘立柱建物11	2≦×2			-	N5°E						
掘立柱建物12	5×2			約43	N5°E						
掘立柱建物13	2×?			-	N10°E						
掘立柱建物14	2×3			約14	N5°E						
掘立柱建物15	2×4?			-	N10°E						
掘立柱建物16	?×3≦			-	N30°E						
掘立柱建物17	2×2			約14	N15°E						
掘立柱建物18	2×2			約11	N20°E						
掘立柱建物19	2×3			約11	N25°E						
塀1	6≦			-	N5°E						
塀2	2≦			-	N10°E						
塀3	6≦			-	N5°w						
高宮遺跡	寝屋川市高宮			掘立・欄列：11棟≦	-	-	-	飛鳥～奈良			5
				竪穴：6棟≦	-	-	-	-			
				A下：掘立柱建物1	1≦×2	-	-	奈良			
		A下：掘立柱建物2	2×2	-	-	-					
		A下：掘立柱建物3	2×2	-	-	-					
		A中：掘立柱建物1	2×3	-	-	-					
		A中：掘立柱建物2	5×2	-	-	-					
		A上：掘立柱建物1	2×2	-	-	-					
		A上：掘立柱建物2	2×2	-	-	-					
		大型掘立柱建物	2×2	-	-	飛鳥～奈良					
		大型掘立柱建物	3×3	-	-	-					
		大型掘立柱建物	3?×2	-	-	-					
		大型掘立柱建物	3×2	-	-	-					
		大型掘立柱建物	3×2	-	-	-					
		B3：掘立柱建物1	2×4	-	-	奈良					
B3：掘立柱建物2	4×2	-	-	-							
柱穴列1	4≦	-	-	-							

第4表 北河内の飛鳥～室町時代主要遺跡（4）

遺跡名	所在地	調査次 or 地区：建物 No	規模		軸方向	時期	文献
			東西間×南北間	m			
高宮遺跡	寝屋川市高宮	柱穴列2	2 ≦	-	-	奈良	33
		柱穴列1	2 × 3	-	-	奈良	
		B5：柱穴列1	2 × 3	-	-		
		B5：柱穴列2	2 ?	-	-		
		B10：ピット列	-	-	-	中世	
		C1：建物1（楼閣?）	1 × 1	-	-		
		C1掘：ピット群	-	-	-		
		C4, 5：柱穴列1	4 ≦	-	-	奈良	
三味頭遺跡	寝屋川市国守町	掘立柱建物1	3 × 2	約11	E5°N	飛鳥～奈良	5
		掘立柱建物2	3 × 2	-	E17°N		
神田東後遺跡	寝屋川市上神田	柱穴	-	-	-	平安：中	5
長保寺遺跡	寝屋川市昭栄町、出雲町	15棟	-	-	-	飛鳥～奈良	5
		11棟	-	-	-	平安	
		柱穴	-	-	-	鎌倉～室町	
高柳遺跡	寝屋川市高柳	掘立柱建物1	2 × 5	-	-	平安	5
		掘立柱建物2	3 × 2	-	-		
		掘立柱建物3	2 × 1	-	-		
		掘立柱建物4	? × 2	-	-		
		掘立柱建物5	4 × 2	-	-		
		掘立柱建物6	1 × 2	-	-		
		掘立柱建物7	3 × 2	-	-		

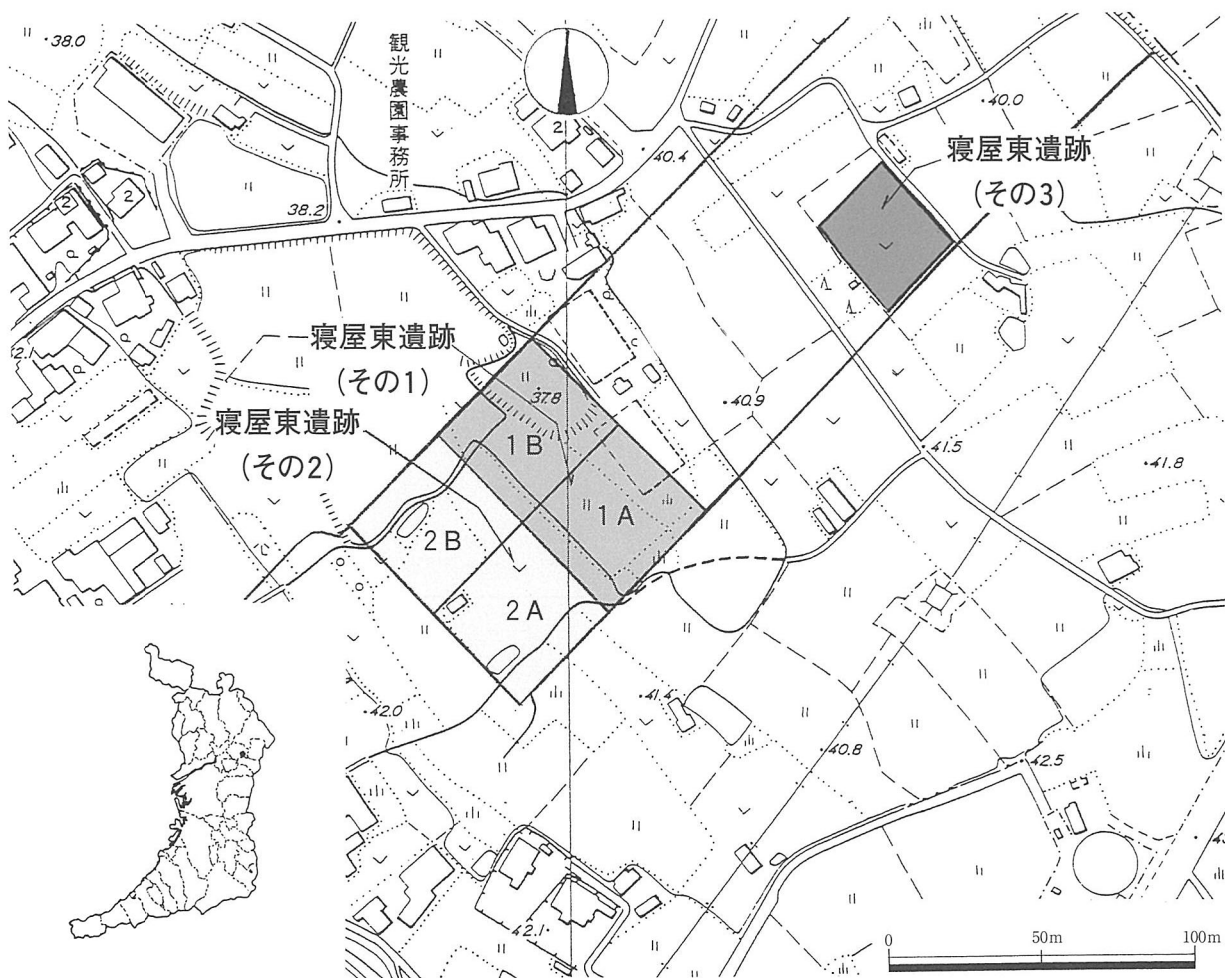
### 第3章 調査の方法

調査区は従来、生産緑地として利用されていたため、発掘調査開始以前は既設の水路がめぐらされている状況だった。加えて里道や農道も調査区内に位置していたため、発掘調査を行うにあたり、まずそれらの既存施設の切り替え工事を行った。さらに農道利用者等の安全確保のため、調査区の周囲を万能堀で囲った。

残土置き場の確保と農道の確保のために、調査区を南東半部と北西半部の2区に細分し、(その1)・(その2)調査区とも南東半部から調査を行った。各区の呼称は第3図の通りである。掘削にあたっては、近・現代の耕作土および部分的に認められた極めて新しい時期の盛り土を、重機を使用して除去した。それより遺構検出面までは人力で掘削を行い、遺構・遺物の検出につとめた。

遺構検出面の測量・実測は世界測地系にもとづく平面直角座標第VI系(平成14年度国土交通省告示第9号)を基に行った。なお測量はヘリコプター撮影による航空写真測量によっており、図化は50分の1の縮尺で行った。個別の遺構・遺物の検出状況や、土層観察用断面の実測に際しては、適宜縮尺を設定して手ばかりで実測を行った。

遺物は、10m間隔の区分線によって設けた方形区画ごとに取りあげ、出土地点および日付を明示して登録番号を付した。遺物は洗浄・注記後、可能なものは接合復元し、遺物実測を行った。



第3図 調査区分図

# 第4章 調査成果

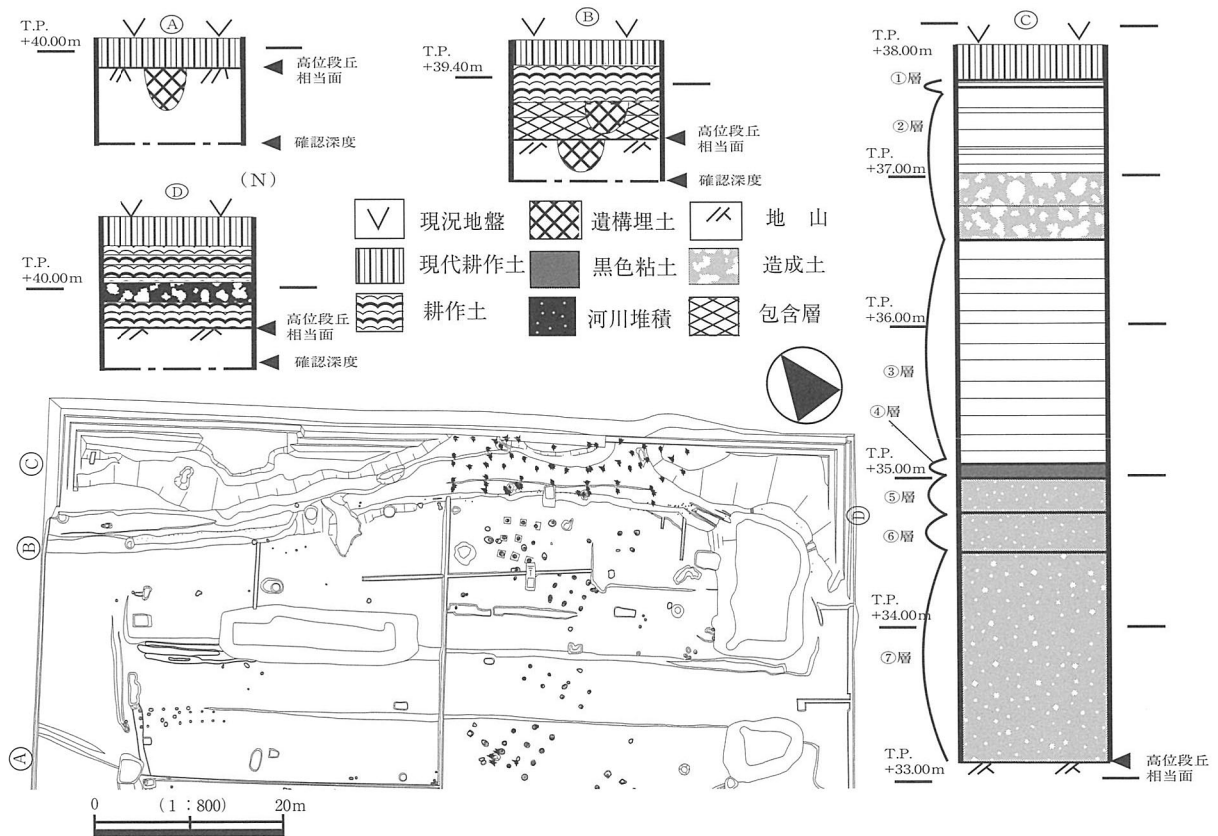
## 第1節 寝屋東遺跡（その1）の調査成果

### 第1項 基本層序（第4～6図）

土層の堆積状況は主に、調査区北西・南東側の壁面の観察を通じて行った。調査地を含む丘陵一帯は斜面を切り下げながら造成した棚田が広がり、その一角を現在、寝屋の集落が占めている。棚田は高低差が比較的小さく、現況では平坦に近い丘陵が連なる状況である。しかし調査の結果、丘陵の尾根筋に接するように河岸段丘状の谷や、たち川の旧流路が造り出したとみられる開析谷が位置することがわかった。このことから、もとは起伏のあった地形が谷水田の造成を契機として、結果的には丘陵頂部が削平され、谷部は埋め立てられて、現在のような景観を呈するにいたったとみられる。

丘陵部分にあたる棚田では、おおむね現代耕作土を除去した段階で地山面を検出した。ただ調査地内における最下段の棚田では、T.P. 39.0 mのコンターラインあたりから棚田の縁までの部分で、現代耕作土下において、旧耕作土層ないし遺物包含層の堆積を認めた。包含層は粗砂をあまり含まない粘質土層で、古代および中世の遺物を含んでいた。最下段の棚田の縁辺部で帯状に包含層が認められるのは、そこだけが後世の耕作地造成に際して削平を免れた事によると考えられる。

一方、調査区際を南東から北西方向にはしる谷の部分では厚さ4 m強の土層の堆積を認めた。谷埋土は大きく分けると、流水作用を受けて形成された自然堆積層と、水田造成に伴って形成された耕作土層とからなる。その堆積状況から、調査地とその周辺における耕作地開発の変遷を知ることができるが、詳細は次項で述べる。



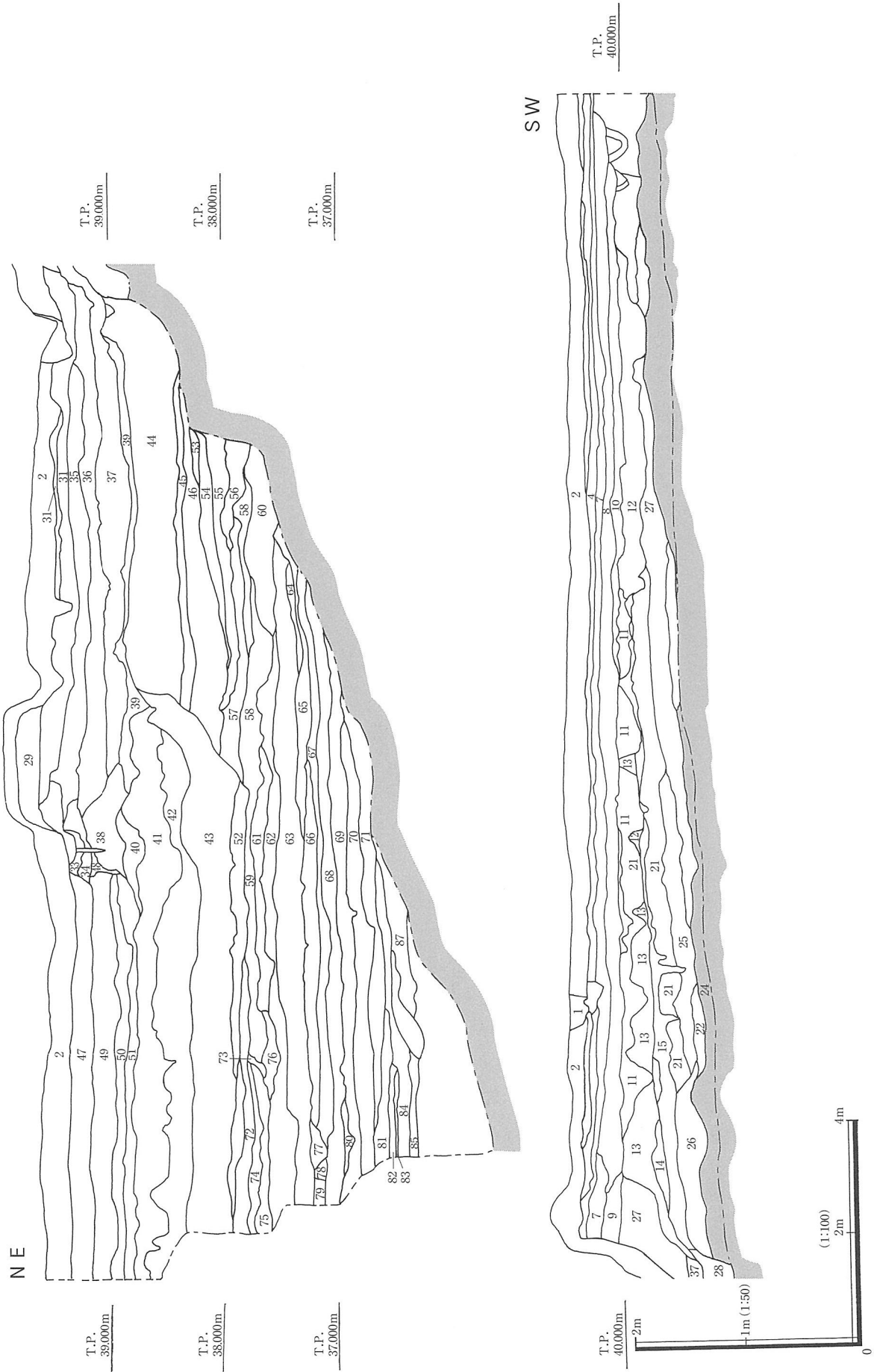
第4図 1A区・1B区の層序模式図



第5图 1B区 北西壁土层断面图

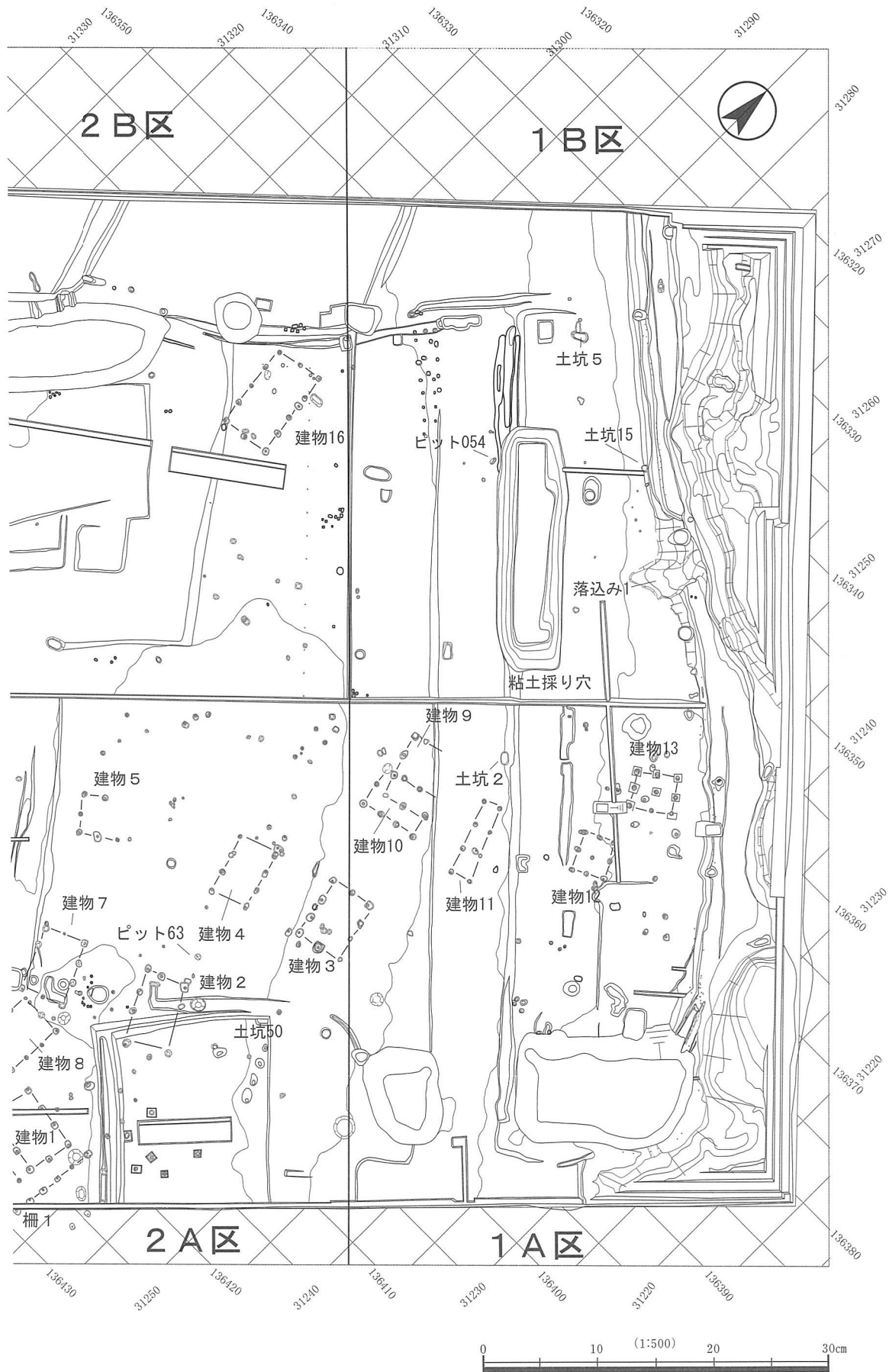


1.	暗褐	10 YR 3/3	中～粗砂	現代耕土	
2.	にぶい黄	2.5 Y 6/3	中～粗砂	地山粘質土ブロック入る。(床土)	
3.	浅黄	2.5 Y 7/3	粘質土	下層地山の細礫が多量に混ざる。	
4.	黄褐	2.5 Y 5/3	中～細砂	(整地層)	
5.	にぶい黄褐	10 YR 5/4	中～粗砂	少量の細礫混ざる。微量の炭化物入る。(整地層)	
6.	にぶい黄褐	10 YR 4/3	中～粗砂	10 YR 7/8 黄褐色中～粗砂が入る。微量の細礫混ざる。(整地層)	
7.	黄橙	10 YR 7/8	細～中砂	粘性ある。(盛土)	
8.	褐灰	10 YR 5/1	粘質土	細～中砂が均一に混ざり合う。直径2mm大の円礫わずかに含む。(耕土)	
9.	灰黄褐	10 YR 5/2	粘質土	細～中砂よりなる。地山の黄色粘土ブロック入る。	
10.	灰褐	7.5 YR 5/2	粘質土	細～粗砂が均一に混ざり合う。酸化鉄斑文含む。8層より粘性低い。直径1cm以下の円礫をわずかに含む。(耕土)	
11.	明褐	7.5 YR 5/6	粘質土	細～粗砂が均一に混ざり合う。10層より粗砂の含有量が多い。酸化鉄斑文が多量に含む。(耕土)	
12.	黄灰	2.5 Y 6/1	粘質土	微～粗砂が均一に混ざり合う。マンガン斑文含む。11層より粗砂・直径2mm大の礫含む。	
13.	灰黄褐	10 YR 4/2	粘質土	微～粗砂が均一に混ざり合う。12層よりやややします。マンガン斑文含む。(耕土)	
14.	灰	5 Y 5/1	砂質土	細～中砂からなる。直径2mm大の円礫、地山粘土ブロックをわずかに含む。(耕土)	
15.	灰褐	7.5 YR 5/2	砂質土	中～粗砂からなる灰色砂と耕作土ブロックとが混ざり合う。黄色の地山ブロックをわずかに含む。(耕土)	
16.	にぶい褐	7.5 YR 5/4	粘質土	微～中砂が均一に混ざり合う。15層より粘性強い。黄色の地山ブロックとマンガン斑文含む。(耕土)	
17.	灰	5 Y 5/1	粘質土	微～中砂が均一に混ざり合う。(耕土)	
18.	黄灰	2.5 Y 5/1	粘質土	微～細砂・直径2mm大の円礫が混ざり合う。直径1、以内の黄色の地山ブロックをわずかに含む。マンガン有り。(耕土)	
19.	灰オリーブ	7.5 Y 6/2	粘土	地山の粘土ブロックからなる。下部に直径2cm大の円礫混ざる。(近世整地層)	
20.	明黄褐	10 YR 6/6	礫	直径2～4mmの礫が主体で、直径2cm大の円礫が混ざる。(近世整地層)	
21.	黄灰	2.5 Y 5/1	粘質土	微～細砂に直径2mm大の円礫が混ざる。10層よりやや粘性勝る。(近世整地層)	
22.	にぶい黄橙	10 YR 7/3	砂	粗砂～礫をベースとした地山を削り落として形成された整地層。(近世整地層)	
23.	灰オリーブ	7.5 Y 6/2	粘土	地山の粘土ブロックからなる。(近世整地層)	
24.	にぶい黄橙	10 YR 6/4	粘質土	細～粗砂が均一に混ざり合う。25層より中～粗砂の含有量が多い。酸化鉄斑文含む。	
25.	灰黄褐	10 YR 6/2	粘質土	細～粗砂が均一に混ざり合う。24層よりよく締まる。	
26.	灰黄褐	10 YR 6/2	砂質土	中～粗砂と直径2cm以下の円礫が混ざり合う。	
27.	黄灰	2.5 Y 6/1	砂質土	細砂と直径2mm大の白砂粒が均一に混ざり合う。25層より粘性強い。	
28.	黄灰	2.5 Y 5/1	粘質土	微～中砂が均一に混ざり合う。植物の根の貫入痕が顕著。	
29.	黄灰	2.5 Y 6/1	粘質土	細～中砂が均一に混ざり合う。28層より中砂の含有量が多い。	
30.	褐灰	10 YR 5/1	粘質土	細～粗砂が均一に混ざり合う。粗砂の含有量が多い。	
31.	灰	5 Y 6/1	粘質土	細砂と直径2mm大の白砂粒が均一に混ざり合う。27層より粘性強い。	
32.	褐灰	10 YR 6/1	砂質土	細砂～直径5mm以下の円礫が混ざる。直径3cm大の円礫を多く含む。	
33.	灰	7.5 Y 6/1	粘質土	細～中砂が均一に混ざり合う。	
34.	褐灰	10 YR 5/1	砂質土	細～中砂が混ざり合う。直径5mm大の礫をわずかに含む。	
35.	灰黄褐	10 YR 6/2	砂	細～粗砂からなる。ラミナ有り。	
36.	灰黄褐	10 YR 5/2	砂質土	細～粗砂からなる。ラミナ有り。直径5mm以下の円礫を含む。	
37.	にぶい橙	7.5 YR 6/4	砂質土	細～粗砂からなる。ラミナ有り。36層より粘性あり。	
38.	明褐	7.5 YR 5/6	砂質土	細～粗砂からなる。	
39.	灰	7.5 Y 6/1	粘質土	細～中砂が均一に混ざり合う。33層より中砂の含有量が少なく、粘性が強い。	
40.	褐灰	10 YR 6/1	粘質土	細～粗砂が均一に混ざり合う。上部に比べて粗砂の含有量が多い。	
41.	明褐灰	7.5 YR 7/1	粘質土	細～中砂が均一に混じる。39層より締まりあり。(耕土)	
42.	灰褐	7.5 YR 6/2	粘質土	細～粗砂が均一に混じる。直径2cm以下の円礫をわずかに含む。(耕土)	
43.	灰白	10 YR 7/1	粘質土	細～粗砂が均一に混じる。41・42層より粗砂の含有量が多い。(畦)	
44.	褐灰	7.5 YR 6/1	粘質土	細～粗砂が均一に混じる。42層より粗砂の含有量が多い。(耕土)	
45.	灰黄褐	10 YR 5/2	粘質土	細～中砂が均一に混ざる。酸化鉄斑文・マンガン斑文含む。(耕土)	
46.	褐灰	10 YR 5/1	粘質土	細～中砂が均一に混ざる。マンガン斑文含む。41層より粘性あり。(耕土)	
47.	褐灰	7.5 YR 4/1	粘質土	細～中砂が均一に混ざる。46層より中～粗砂の含有量が多い。(耕土)	
48.	灰	N 4/0	粘質土	細～粗砂が均一に混ざる。47層より中～粗砂の含有量が多い。(耕土最下層)	
49.	暗灰	N 3/0	砂質土	細～中砂が均一に混ざる。(耕土最下層)	
50.	灰	7.5 Y 6/1	砂	細～粗砂よりなる	
51.	灰黄	2.5 Y 6/2	砂	中～粗砂よりなる。	
52.	暗灰	N 3/0	砂質土	中～粗砂が主体。(耕土最下層)	
53.	褐灰	10 YR 5/1	粘質土	細～中砂が均一に混ざりあったものを主体とするが、直径3cm大の円礫を多く含む。	
54.	褐灰	10 YR 4/1	粘質土	細～粗砂が均一に混ざりあり。中砂が主体。	
55.	にぶい黄橙	10 YR 6/4	礫	地山の花崗岩バイラン土の再堆積層。直径5cm以下の円礫を含む。	
56.	明黄褐	10 YR 6/6	粘土	地山の黄色粘質土ブロックの再堆積層。	
57.	～60.		礫	直径3～5cm大の円礫が主体をなし、5cmを含むものも含まれる。	
61.	礫		直径5～10cm大の円礫が主体をなす。		
61より下層			地山の花崗岩バイラン土と直径5cm以下の円礫が互層をなす。非常に硬く締まり、最下部に木の葉、枝類の敷き詰まった堆積層あり。その中に飛鳥時代の遺物を一点含む。		



第6図 1A区 南東壁土層断面図





第7図 1A区・1B区 平面図



## 第2項 遺構

### ・掘立柱建物跡

(その1) 調査区で検出された掘立柱建物跡は、規模を確認できるものが6棟で、うち1棟(建物3)は2A調査区にまたがって位置する。なお(その1) 調査区で検出した建物跡はすべて1A区に位置する。1B区でも柱穴と思われるピットをいくつか検出したが、建物もしくは柵と明確に判断しうるまとはななかった。後述するように近世以降の耕地開発に際して、丘陵頂部が大規模に削平されたことは明らかで、それに伴い1B区に存在していた掘立柱建物跡も消失した可能性がある。

建物の方向軸に着目すると、建物9と建物11がN-20°-Wで一致する。また建物12と建物13はN-30°-Wで方向軸が一致する。いずれも方向軸に加えて、建物の規模および構造に共通点がみられる。

次に方向軸に共通性がみられるものごとに掘立柱建物跡の詳細を説明する。なお建物3の詳細は次節でふれる。

[主軸方向がN-20°-Wを指すもの]

建物9 (ピット010~016) (第8図)

東西2間(約4m)×南北3間(約6m)の南北棟である。柱穴間は東西列が平均1.9m、南北列が平均2.0m、ピットは直径が約60~80cmの円形で、深さ約20~70cmを測る。ピットの柱痕跡には微量の炭化物が含まれていた。

建物9に属するピット015が建物10に属するピット006にきられていることから、建物9が建物10に先行したことは明らかである。この建物の北辺および東辺が欠しているのは、それらが柵田の法面にあたっていることから、後世の耕作地造成に伴って削平されたためと考える。

建物11 (ピット022~029) (第9図)

東西1間(1.7m)×南北3間(6.8m)の南北棟である。柱穴間は東西列が平均1.7m、南北列が平均2.3mである。ピットは直径が約40~50cmの円形で、深さが約10~20cmと浅いことから、全体的にかなり削平を受けていると考えられる。ピットの柱痕跡および埋土に少量の炭化物を含む。

[主軸方向がN-15°-Wを指すもの]

建物10 (ピット001~009) (第10図)

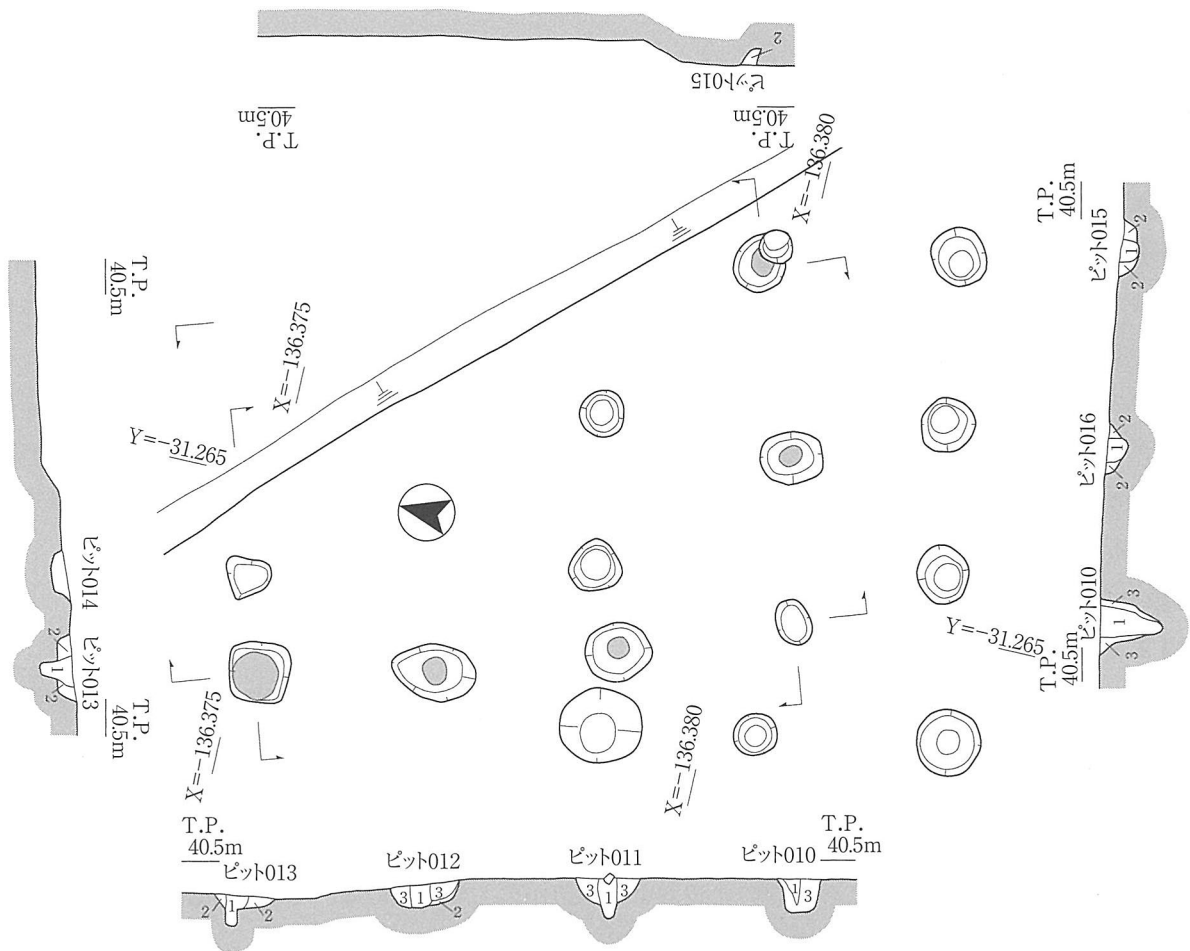
東西3間(5.1m)×南北2間(3.7m)の東西棟である。柱穴間は東西列が平均1.7m、南北列が平均1.9m、ピットは直径が約40~70cmの円形で、深さ約20~50cmを測る。ピットの柱痕跡および埋土に少量の炭化物を含む。ピット002・003・008・009から須恵器および土師器が出土したが、いずれも細片で実測可能なものは5点だった。土器全体の形状がわかるものはなかったが、いずれも飛鳥時代に属するものと考えられる。建物の北東隅の柱穴は、柵田の法面際にあっており、後世の柵田造成に際して削平されたと考えられる。

建物10に属するピット006が建物9に属するピット015を切っている。このことから建物9が廃絶した後、それとほぼ同じ位置に、建物の長辺の向きを約90度回転させるようにして建物10を建てたことがわかる。

[主軸方向がN-30°-Wを指すもの]

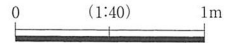
建物12 (ピット032~040) (第11図)

東西2間(3.0m)×南北2間(3.4m)の総柱建物である。柱穴間は東西列が平均1.4m、南北列が平均1.7mである。直径約40~80cmの円形のピットで深さは12~25cmを測る。残存深度が20cmに満たな

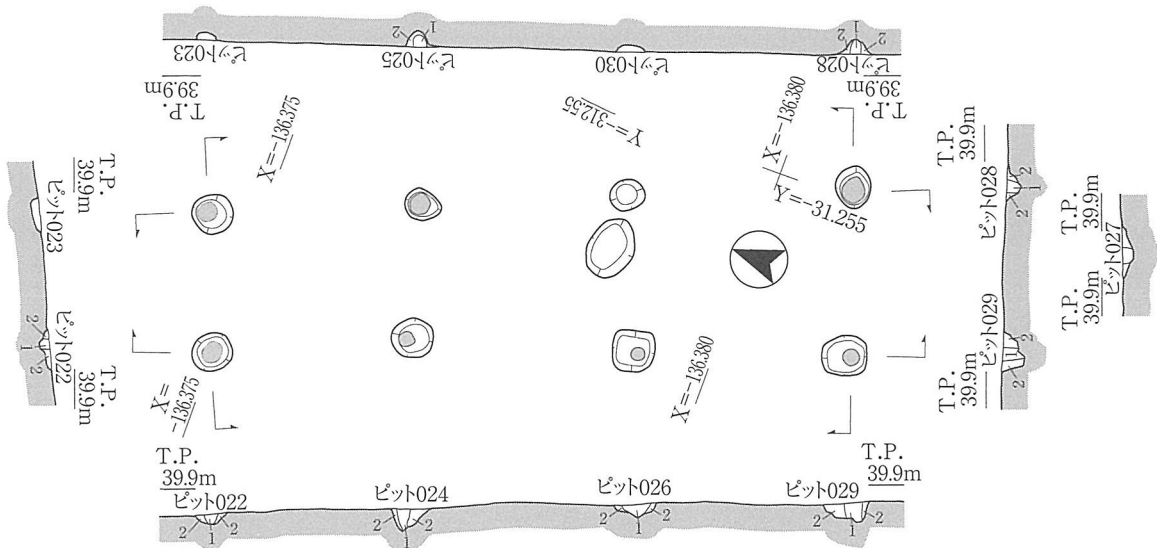


建物9 柱穴 (ピット010~016)

1. 柱痕 10 YR 5/6 黄褐色 中砂混じりシルト~粗砂混じり中砂 微量の炭化物含むものあり。
2. 埋土 10 YR 5/6 黄褐色 細砂混じりシルト~粗砂混じり細砂 地山ブロック混入するものあり。
3. 柱痕 10 YR 5/6 黄褐色 中砂混じり細砂 1より粘性強い。

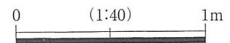


第8図 1A区 建物9 平・断面図



建物11 柱穴 (ピット022~029)

1. 柱痕 10 YR 5/6 黄褐色 中砂混じり細砂ないシルト 粘性あり 少量の炭化物および酸化鉄含む。
2. 埋土 10 YR 7/8 黄褐色 細砂混じりシルトないシルト 酸化鉄斑文と微量の炭化物含む 地山ブロック混入する。



第9図 1A区 建物11 平・断面図



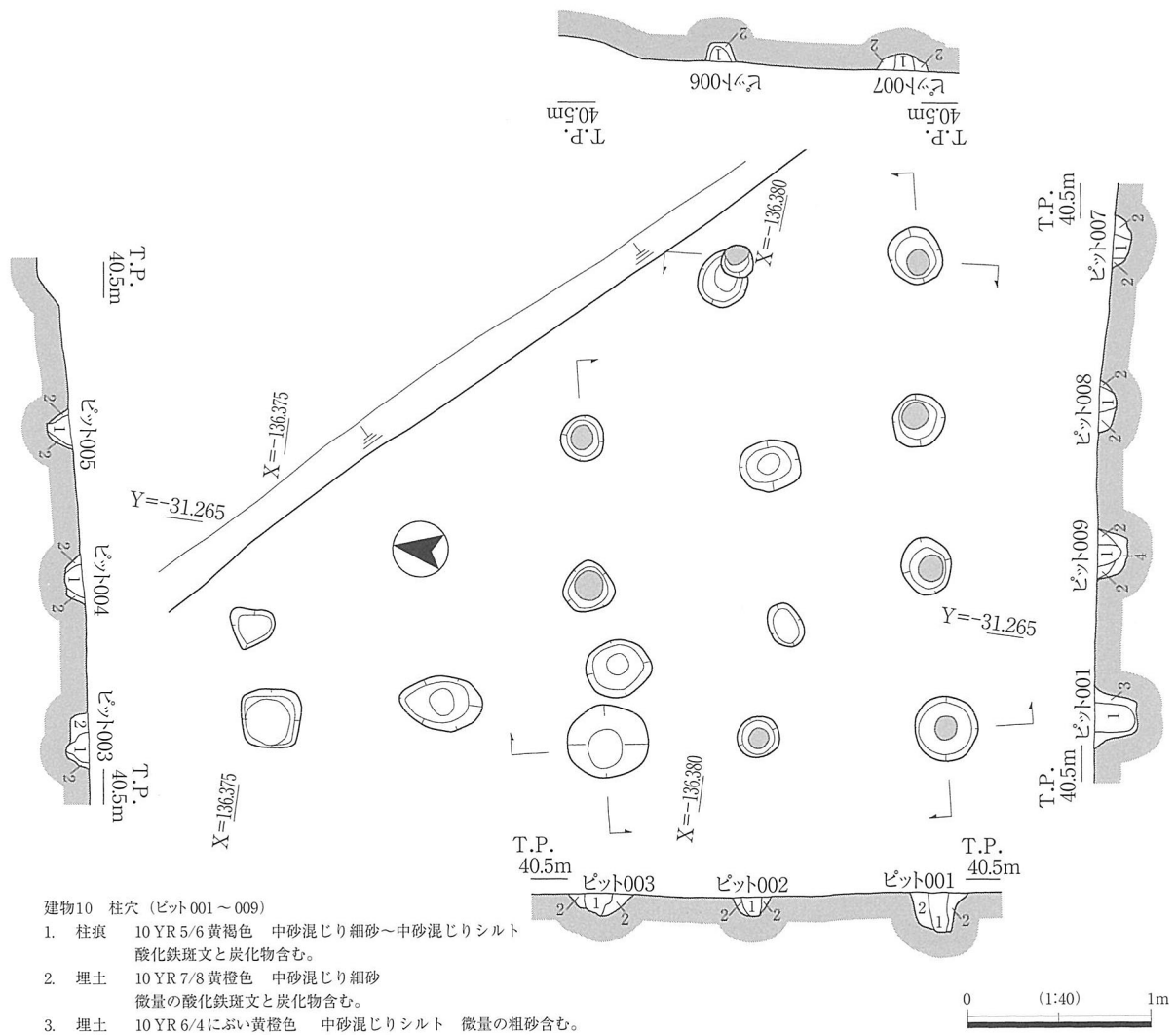
いものが大半で、全体的に削平が著しい。ピットの埋土は粘性の低い砂質土からなり、炭化物は含まれない。

建物の方向軸・規模・構造の近似性からみて、建物13との関連性が高いと考える。

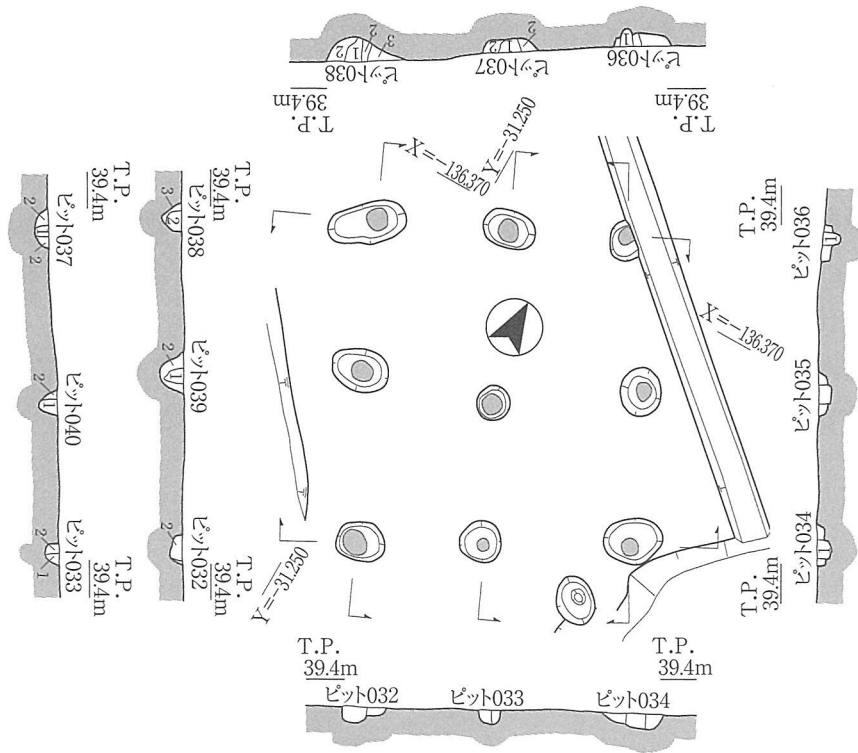
建物13 (ピット041~049) (第11図)

東西2間(3.6m)×南北2間(3.2m)の総柱建物である。柱穴間は東西列が平均1.8m、南北列が平均1.6mであり、ピットは直径が約40~60cmの円形で、深さ約20~40cmを測る。ピットの埋土は粘性の低い砂質土からなり、建物12の埋土に似る。

前述したように方向軸・規模・構造からみて建物12との近似性が高いが、平面積は建物13の方がやや大きい。また建物12が南北にやや長い形状なのに対し、建物13は東西にやや長いという平面上の形態差も見られる。

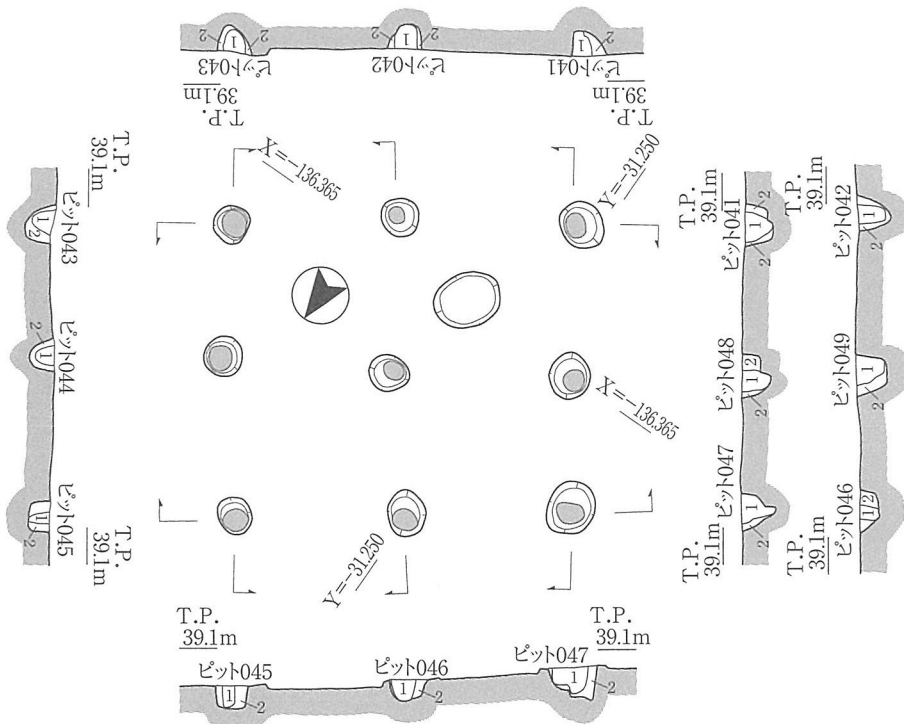


第10図 1 A区 建物10 平・断面図



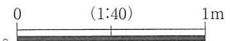
建物12 柱穴 (ピット032～040)

- |       |                |     |                   |
|-------|----------------|-----|-------------------|
| 1. 柱痕 | 10 YR 4/4 褐色   | 砂質土 | 細砂～粗砂が混ざりあう。      |
| 2. 埋土 | 10 YR 5/6にいい橙色 | 砂質土 | 1より砂の含有量が多くしまり弱い。 |
| 3. 埋土 | 10 YR 4/4 褐色   | 砂質土 | 2より砂の含有量が多くしまり弱い。 |



建物13 柱穴 (ピット041～049)

- |       |                 |                         |                  |
|-------|-----------------|-------------------------|------------------|
| 1. 柱痕 | 10 YR 5/4にいい黄褐色 | 粘質土                     | 細砂～礫混ざりあう。       |
| 2. 埋土 | 10 YR 6/4にいい黄褐色 | 細砂をベースに直系0.2～1cm大の礫を含む。 | 地山ブロックがわずかに混入する。 |



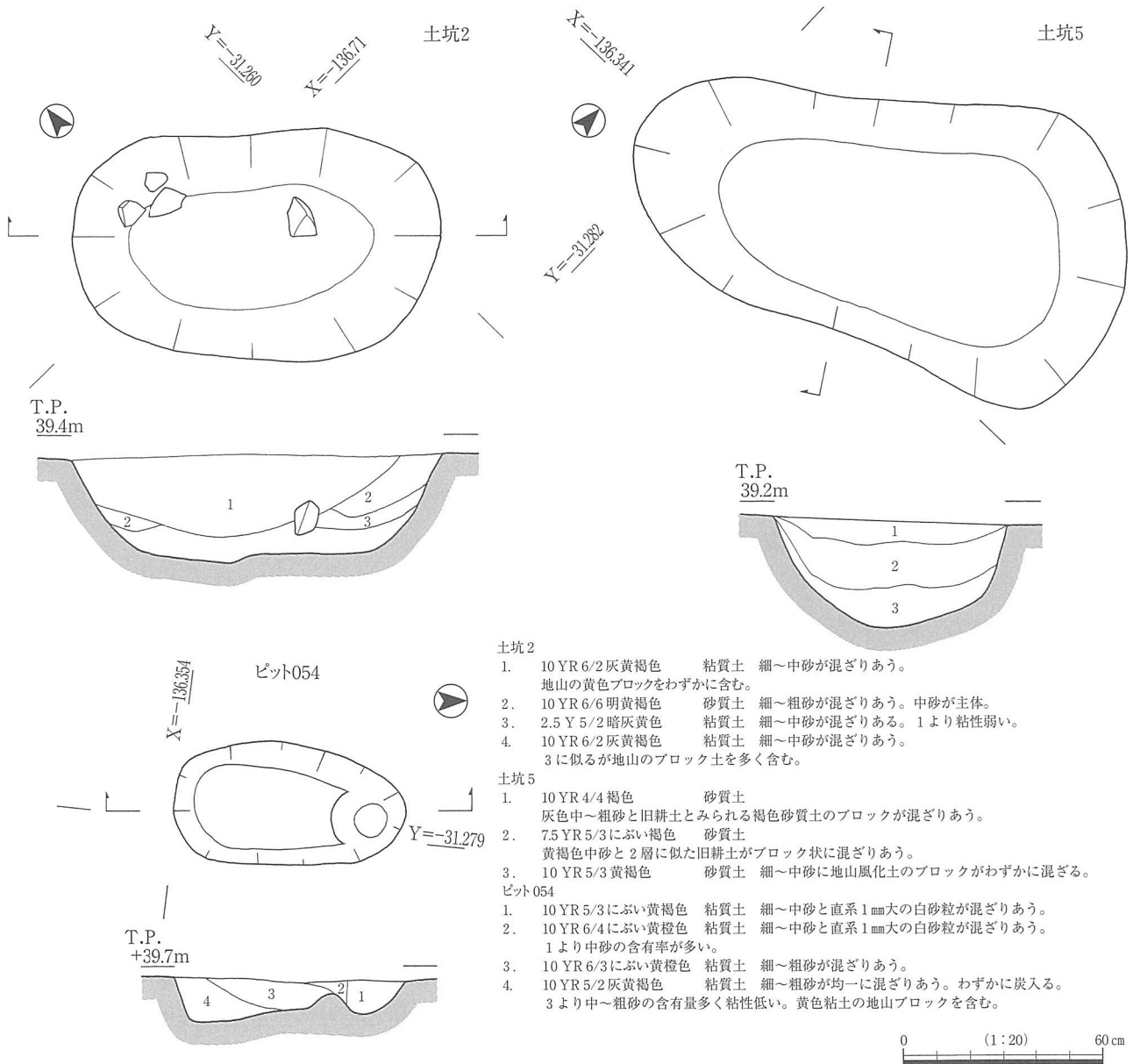
第11図 1 A区 建物12・13 平・断面図

・ピット

建物ないし柵に伴う柱穴、土止めや導水施設に伴う杭跡などが含まれると考えられる。ピット054の埋土からサヌカイト剥片を検出した他に出土遺物はなく、それぞれの時期や性格は不明である。1 A区で検出した建物跡周辺に散在するピットを含め、残存深度が20cmに満たないものが多く、そのほとんどが掘立柱建物跡と同様、後世に削平を受けたものと考えられる。

ピット054 (第12図)

長軸70cm、短軸37cm、深さ10cm強の長楕円形のピットである。もとは長軸約50cmの長楕円形のピットを直径約30cmの円形のピットが切ったものと考えられる。サヌカイトのチップが1点出土した。埋土に地山のブロック土が含まれることから、チップは地山の削平土などとともに混入したもので、それ自体がピットの時期を示すものではないと考える。



第12図 1 A区・1 B区 土坑2・5、ピット054 平・断面図

## ・土坑

主に丘陵部の平坦面で、平面形態が長楕円形のを10基前後検出したが、中世ないし古代までさかのぼる可能性のある遺物が出土したのは土坑2・5・15のみである。

### 土坑2（第12図）

長軸110cm、短軸70cm、深さ約30cmの平面が長楕円形の土坑である。遺構埋土より10cm大の角礫3個と瓦片、陶磁器片を各1点検出した。

土器片はおそらく甕のような大型の容器の上半部分と考えられるが、器種・時期の特定は難しい。胎土に直径2mm以下の長石・石英を多く含み、厚さ1.2cmほどの焼け締まりがあまい印象をうける土器で、中世後半以降のものと考えられる。角礫は丘陵部分の地山には含まれないものなので、近隣から持ち運ばれたものとみられるが、用途は不明である。

### 土坑5（第12図）

長軸160cm、短軸90cm、深さ約30cmの長楕円形の比較的浅い土坑である。遺構埋土から須恵器の細片を1点検出した。須恵器片は厚さ5mmのやや焼け締まりのあまい破片で、内面にロクロなどの痕跡が明瞭に残る。器種・時期などは不明である。

### 土坑15

後世の耕作地造成の際、棚田の法面整形にともなって削り落とされた部分があり、元の形状は不明である。おそらく直径40～50cmほどの円形の土坑だったとみられる。最下段の棚田で検出した遺物包含層を除去した段階で検出した。埋土は黄褐色の砂質土で、古代の土師器高杯の脚部が1点出土した。

## ・その他

### 粘土採り穴（第13図）

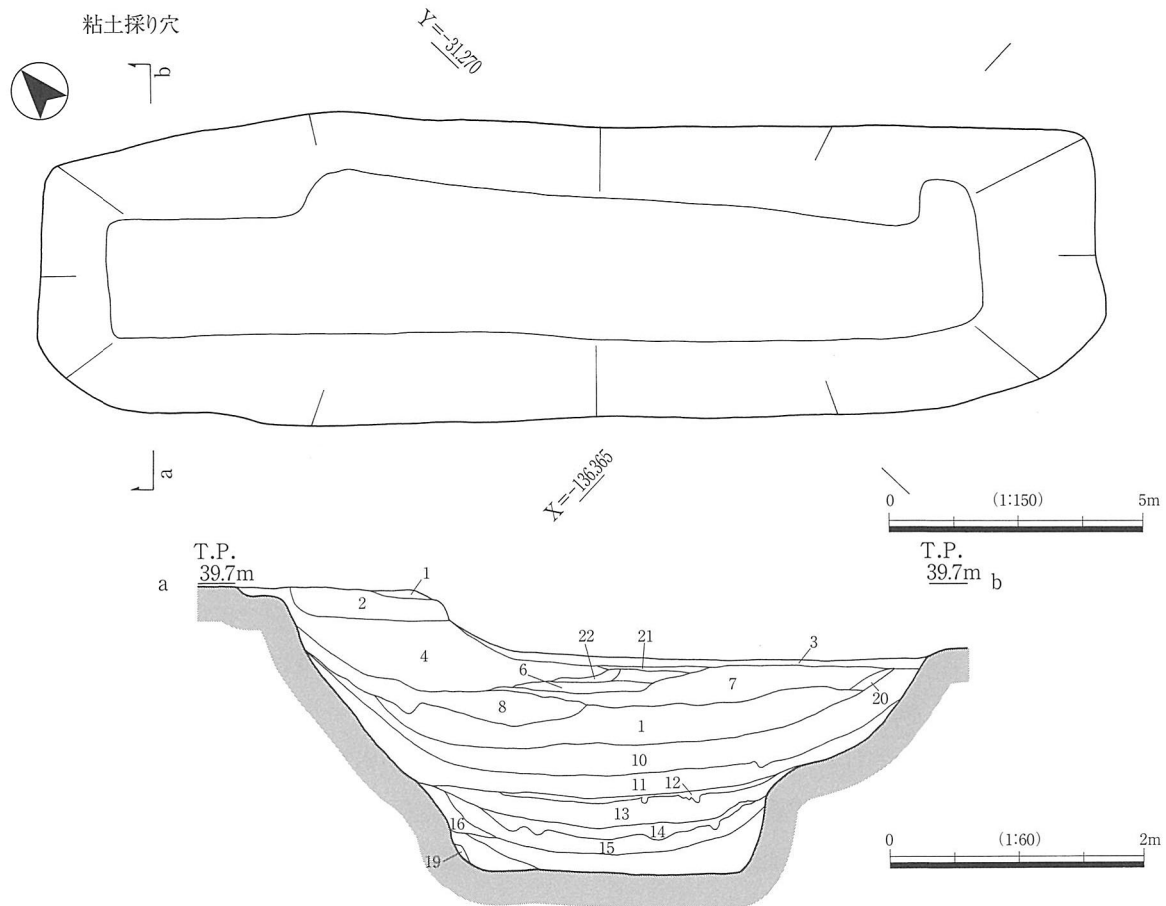
5.7m×21m、深さが約2mある長方形の長大な掘り込みである。出土遺物からみて、近世以降に掘られたことが明らかなため、遺構検出面の平面図では攪乱の扱いで図示している。埋土は主に地山の削平土からなり、上層・下層のいずれにおいても瓦や染付が出土しているので、比較的短期間のうちに埋積したと考えられる。底部は地山のシルト層を掘り抜き、その下の花崗岩バイラン土からなる土層に達している。これらのことから粘土採り穴だった可能性が指摘できる。

## ・谷

調査区を含む丘陵の裾を、南東方向から北西方向にむけて蛇行しながらはしる谷地形を検出した。その埋積状況から、古代における地形変遷と、中世以降の水田造成の経緯を次のように把握することができた。

層序模式図（第4図）の⑤～⑦層は流水作用によって生じたものである。検出した谷地形のうち、1B区の丘陵先端に近い部分では、谷底が急傾斜で落ち込んでいた。傾斜部分では流路が蛇行する様子がみられ、特に水流の方向が変化する箇所では、谷の側面がオーバーハングする状況がみられた。⑥・⑦層は谷が急傾斜を呈する1B区の北よりの部分でみられることから、活発な流水作用を受けて堆積したと考えられる。⑦層は主として5～10cmの角礫を多量に含む礫層からなり、最下層で須恵器杯の底部を1点検出した。⑥層も礫層であるが、直径3～5cmの円礫を主体とし、⑤層は細砂～粗砂からなる砂層である。⑦層から⑤層にいたる流水堆積層の変化を通じ、谷の埋積とともに流水堆積作用も徐々に沈静化していった状況がうかがえる。⑥・⑦層が谷底の斜度のきつい部分にのみ分布するのに対し、⑤層は1A・1B区を通じてみられることもその証左となろう。

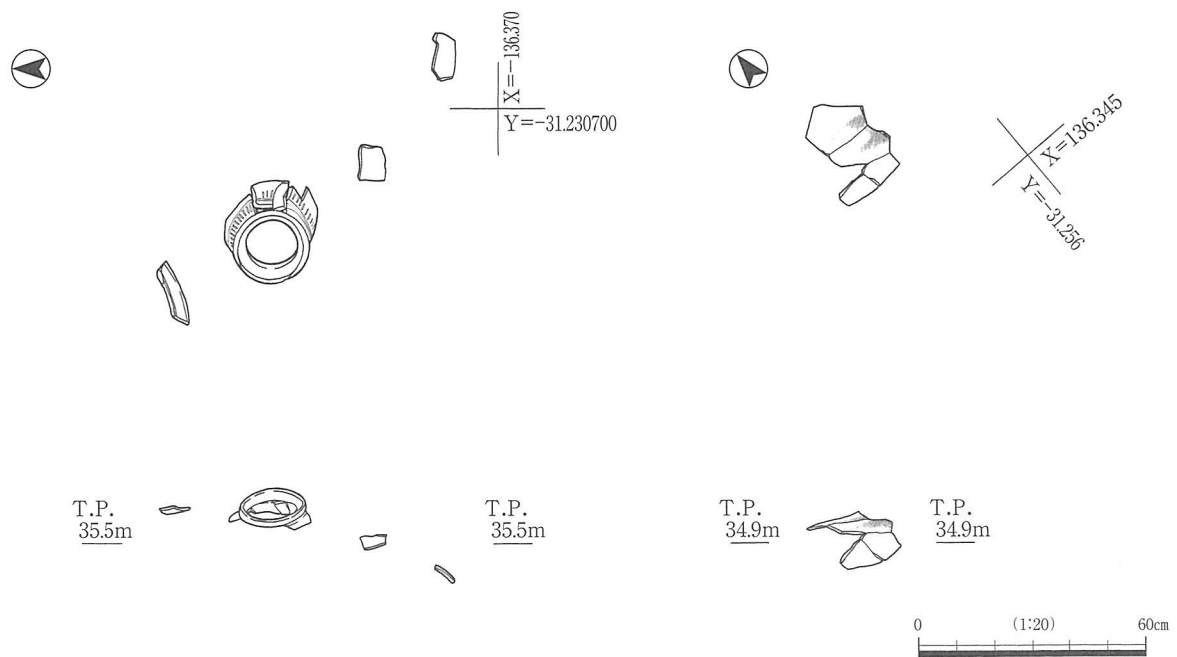
層中に一定量の古代土器を含んでいたのは⑤・⑥層である（第14図）。これらの須恵器はいずれも飛鳥時代のものと見られ、掘立柱建物跡の柱穴から検出した遺物と、近似した時期のものである。したがって谷部分での流水作用が比較的活発な段階から、終息しつつある段階にかけて、それに接する丘陵部分では掘立柱建物からなる集落が展開していたと考えられる。換言すれば、ここで出土した古代の土器は、丘陵部分で検出された集落から遺棄された可能性が高いと考える。



- |     |                  |  |
|-----|------------------|--|
| 1.  | 近・現代の耕作土         |  |
| 2.  | 5 Y 8/8 黄色       | 地山のブロックからなる整地層。  |
| 3.  | 5 Y 7/4 浅黄色      | 砂質土 細～中砂が均一に混ざりあう。   |
| 4.  | 5 Y 7/4 浅黄色      | 砂質土 細～中砂が均一に混ざりあう。マンガン含む。  |
| 5.  | 10 YR 7/4 におい黄橙色 | 砂質土 細～中砂が混ざりある。21よりしまりあり。  |
| 6.  | 10 YR 8/3 浅黄橙色   | 砂 中～粗砂からなる。ラミナあり。  |
| 7.  | 10 YR 6/4 黄橙色    | 粘質土 細～粗砂が均一に混ざりあう。地山の粘土ブロックが主体。  |
| 8.  | 2.5 Y 8/2 灰白色    | 粘質土 地山ブロックと旧耕土が混ざる。地山ブロックが主体。  |
| 9.  | 5 Y 8/6 黄色       | 砂質土 削りおとした地山の再堆積層。   |
| 10. | 2.5 Y 7/3 淡黄色    | 細～粗砂が均一に混ざりあう。地山ブロックを含むが7～8層ほどの割合ではない。炭化物わずかに含む。                         |
| 11. | 10 YR 7/3 におい黄橙色 | 砂質土 中～粗砂と微砂が混ざりあう。下部に地山ブロックが混入する。上部にリバースグレイディングが部分的に入るが、踏み込みで乱れている部分もある。 |
| 12. | 10 YR 7/1 灰白色    | 粘土 リバースグレイディングからなる。  |
| 13. | 10 YR 7/4 におい黄橙色 | 砂質土 中～粗砂からなる。削りおとした地山の再堆積層で9層に似る。  |
| 14. | 10 YR 7/2 におい黄橙色 | 砂質土 リバースグレイディングを3枚ほど含むが、踏み込みにより乱されている部分もある。                              |
| 15. | 10 YR 7/2 におい黄橙色 | 粘質土 地山の再堆積土が主体。下部にリバースグレイディング含む。   |
| 16. | 10 YR 7/4 におい黄橙色 | 砂質土 地山の再堆積土 細砂が主体。   |
| 17. | 10 YR 7/3 におい黄橙色 | 粘質土 15層に似る。  |
| 18. | 10 YR 7/8 におい黄橙色 | 砂質土 地山の再堆積土 細砂が主体。   |
| 19. | 10 YR 7/1 灰白色    | 砂 中～粗砂からなる。  |
| 20. | 10 YR 6/4 におい黄橙色 | 砂質土 中～粗砂・円礫からなる。   |
| 21. | 10 YR 7/2 におい黄橙色 | 砂質土 細砂と粗砂が混ざりあう。   |
| 22. | 10 YR 7/3 におい黄橙色 | 砂 中～粗砂からなる。直系 0.5 mm 大の円礫含む。   |

第13図 1 B区 粘土採り穴 平・断面図





第14図 1A区 谷における遺物出土状況図

④層は有機物を多く含んだシルトもしくは粘土層からなる黒色化の顕著な層である。谷底の水の流れが停滞し、澱みを呈するようになった段階で形成された自然堆積層と考える。

③層最下層の粘質土層は、④層を母材とするシルトと、細砂ないし中砂が均一に混ざり合っただけのもので、水田耕作への移行を示すものである。T. P. +40.0 m前後の丘陵地において、水の確保が比較的容易な谷の部分、水田開発の端緒になっていると考えられる。

水田造成は中世を通じて行われたとみられる。複数の耕作土層からなり、それらをあわせた厚さは1.5mに達する。配水の便の良さが重視されて造られた谷水田であるが、一方では水が浸かりやすいという問題も含んでいた。その不便を解消しつつ、地力の回復を図るため、ここでは頻繁に土を入れては耕すという行為が繰り返されたと見られる。

③・④層ともに中世までの遺物を含み、④層では13世紀代の瓦器碗が出土した。ただ③層最下層と④層の土色が類似していたため、④層として取り上げた遺物の中に③層最下層の遺物が含まれる可能性がある。したがって当調査区の、谷部における水田耕作の開始時期は13世紀にさかのぼる可能性がある。

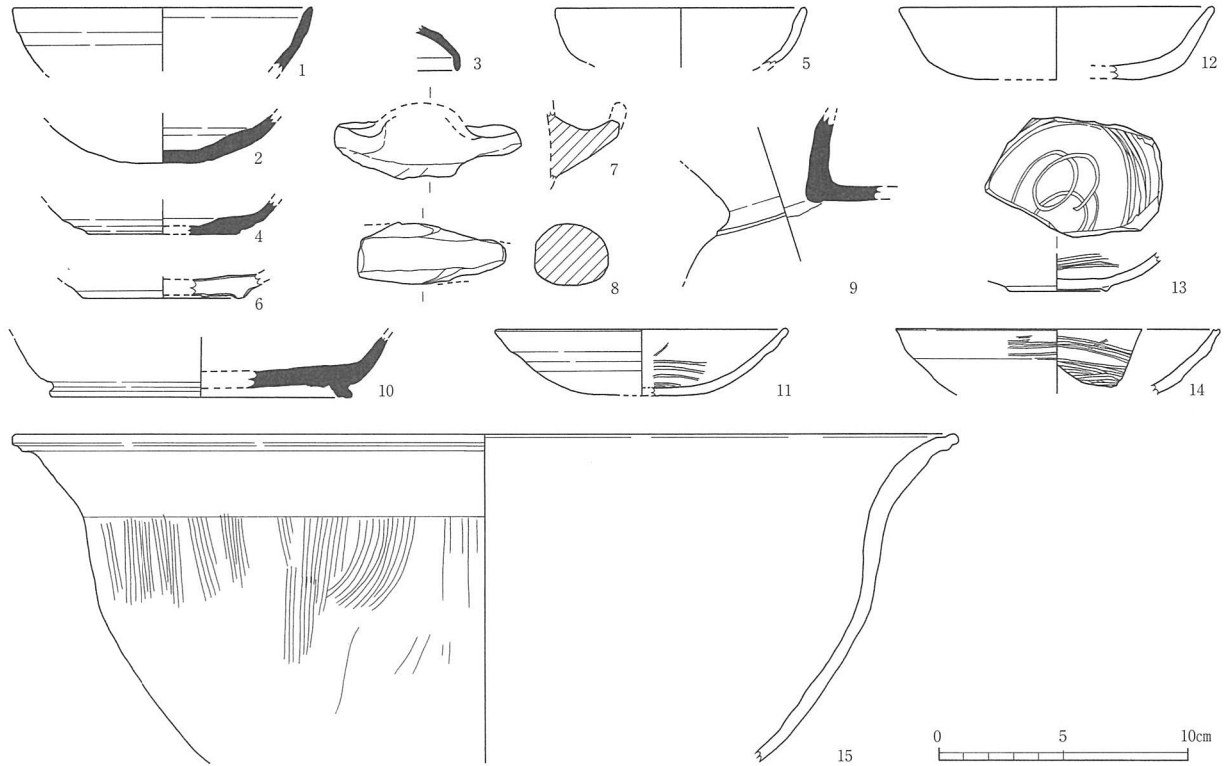
近世になると、地山の削平土を多量に盛土して水田面の嵩上げを図ったことがわかった。②層の下半部は黄色の地山ブロックと、中～粗砂が混ざり合っただけで形成された土層であり、これは地山の削平土を主体とする造成土と位置付けられる。この造成土は、(その1) 調査区における分布傾向から見て、おそらく谷全体で平均50～60cmの厚さで敷き詰められたとみられる。したがってこの段階における谷水田の改変は、丘陵部分の耕作地造成と連動して行われた大規模なものだったといえる。②層に含まれている土器より、大規模造成の開始時期は18世紀初頭にさかのぼることが可能である。なお造成土と、その上の粘性が強く黄灰色の複数の耕作土層からなる土層を②層、現代耕作土直下の細～粗砂の含有量が多い粘性の低い耕作土を①層とした。

①～③層に含まれるいずれの時期においても、丘陵の斜面際や谷に向けての傾斜変換部に溝や畦畔を

設けながら、谷部分の水田造成を繰り返した様子がうかがえる。

### 第3項 遺物

(その1) 調査区では、コンテナ (60cm×40cm×15cm) 13杯分の土器が出土した。出土遺物は弥生時代から近世までのものを含むが、中世以前のものを優先的に記述する。



第15図 1A区・1B区 遺構・その他出土土器

第5表 1A区・1B区 遺構・その他、出土土器観察表

NO.	出土遺構	時代	種類・器種	法量 (cm)	NO.	出土遺構	時代	種類・器種・部位	法量 (cm)
1	建物10 ピット02	A	須恵器 杯身 (蓋)	※口径12.0	9	溜池3	A	須恵器 平瓶	※頸部径 4.3
2	建物10 ピット02	A	須恵器 杯身	※底径3.2	10	溜池3	A	須恵器 杯身	※高台径 12.0
3	建物10 ピット02	A	須恵器 杯蓋	—	11	溜池3	B	瓦器 椀	※口径11.8
4	建物10 ピット08	A	須恵器 杯身	※底径6.0	12	谷部 (5層)	A	土師器 杯身	※口径12.7
5	建物10 ピット09	A	土師器 杯	※口径10.0	13	包含層	B	瓦器 椀	※底径4.0
6	ピット053	C	陶磁器 (瀬戸系)	※底径6.5	14	落込み1	B	瓦器 椀	※口径13.0
7	土坑11	A	土師器 鍋/甑	—	15	包含層	A	土師器 鍋/鉢	※口径38.0
8	土坑15	A	土師器 鍋/甑	—	A: 古代 B: 中世 C: 近世 ※: 復元長				

遺構出土遺物に関しては細片も含まれるが、可能な限り図化するようにした。ただ遺構出土遺物の点数に限られるため、谷の埋土から出土した土器、包含層出土遺物、旧耕作土や近世以降に築かれた溜池の埋土から採取した土器に関しても、時期判断が可能なものはとりあげた。それらは決して遺構出土遺物と同レベルで扱えるものではないが、掘立柱建物からなる集落遺跡が展開する時期や、その後の土地利用の推移を判断する際の一助としたい。

#### ・遺構出土遺物（第15図参照）

（その1）調査区で検出した掘立柱建物跡6棟中、柱穴から土器が出土したのは建物10、および（その2）調査区にまたがる建物3の2棟である。建物3の柱穴から出土した土器については次節で述べる。

建物10に属するピット002・008・009から、須恵器および土師器が出土した。うち土師器には細片で、図示できないものも含まれる。須恵器（1～4）は杯の身と蓋で、口頸部に内方向のかえり・受部はなく直口のものである。3は口縁部の形状から蓋と判断したが、残存部分がわずかなため判断材料に乏しく、杯身か蓋か確実ではないところがある。2・4は口頸部に回転ナデを、底部にはヘラ切り・ヘラケズリののちナデ調整を施している。ピット009から検出した5の土師器杯身は、器面保存が悪く調整は不明である。

土坑11・15から出土した土師器把手2点（7・8）には、いずれも下方からの加熱による赤変や煤付着がある。それぞれ土器の使用状況を示すものと考えられることから、鍋・甌の一部と判断できる。いずれも古代の土器とみられるが、土坑11は中世包含層の上面で検出した遺構である。したがってこの土器は、2次的に土坑埋土に含まれたもので、この遺構の時期を決定するものではない。

ピット053から出土した底部破片（6）は、緑色釉薬がかかった瀬戸系近世陶磁器である。これは近世以降に使用されていた溜池1に近接して検出されたピットの一つで、水利施設に伴う杭跡と考えられる。

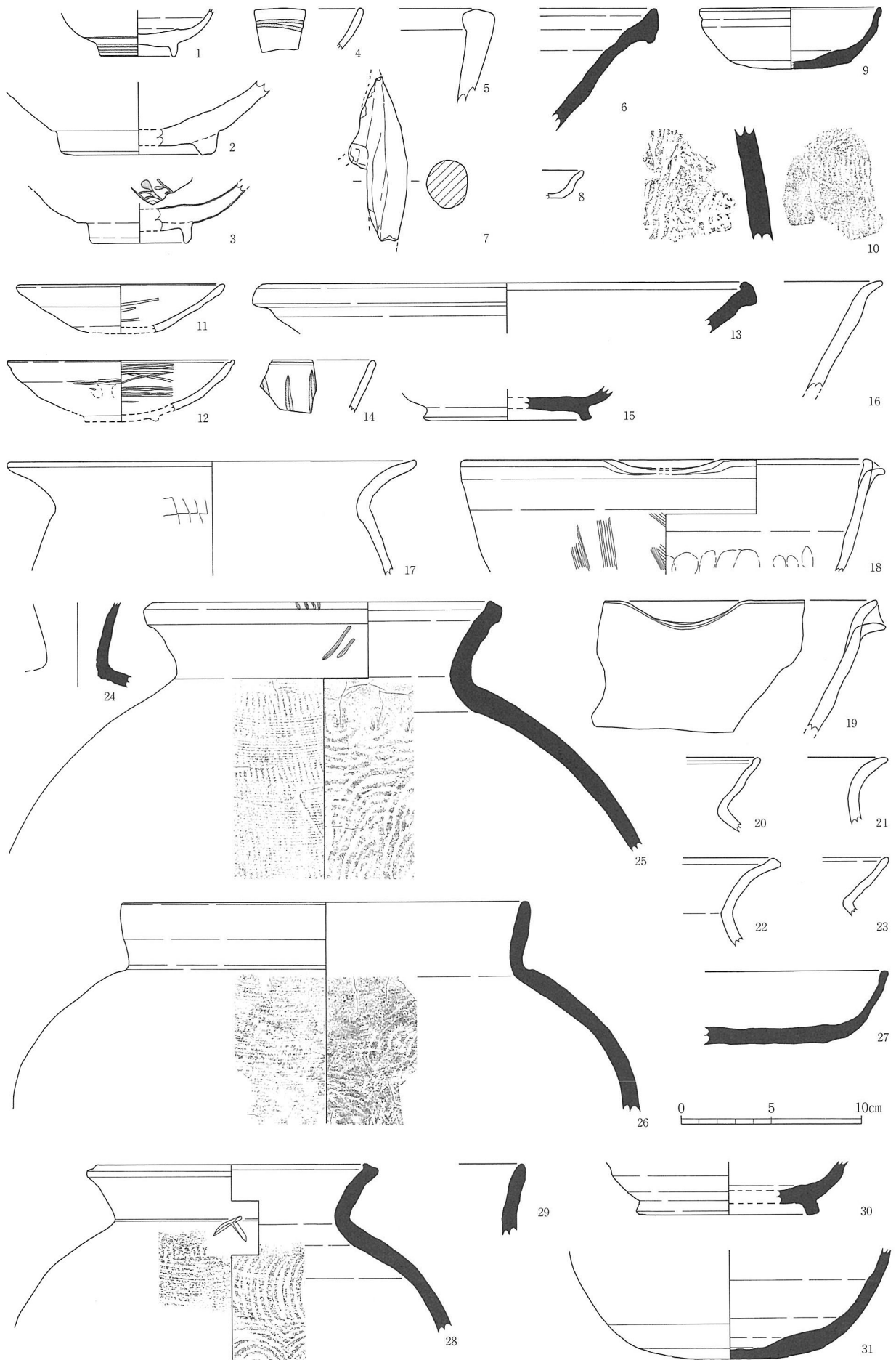
この他、図示しなかったが、1B地区で検出した粘土採り穴から出土した遺物の中に平底で、石英・長石・黒雲母を含み、茶褐色を呈するいわゆる生駒西麓産の胎土をもつ弥生土器のようなものが混じっていた。またピット054および、建物10を構成するピット002の埋土にサヌカイト剥片が混在していたことを付記しておきたい。おそらくこれらは地山の削平土などとともに遺構埋土に混入したと考えられる。今回の調査区では認めなかったが、周辺に弥生時代の遺跡が存在した可能性を指摘できる。

#### ・谷出土遺物（第15図-12、第16図）

（その1）調査区で検出した谷埋土の分層状況に関しては前述したとおりであり、遺物の概要も層位ごとに行う。層位別に遺物の種類別点数表を作成し、谷部の埋没状況を確認するための一助とした（第6表）。なお須恵器片には細片のため古代か中世か不明のものがある。また陶磁器・瓦の破片についても中・近世の判別が難しい点があり、いずれも一括した。

②層（第16図） 近世までの土器が出土する。近世陶磁器で図示したのは染付（1）、施釉の九州系かと思われるもの（2）の2点である。

③層（第16図） 古代～中世までの土器が混在する。瓦質土器・東播系須恵器・青磁などが揃うが、瓦器の出土はなかった。瓦質土器には火鉢（5）や三足釜（7）がある。土師器皿（8）は、口縁部上端が内方向に少し巻き込むように突き出した「ての字状口縁」ではなくなった段階の12世紀以降のものである。東播系須恵器鉢（6）は、口縁端部の上方拡張がみられる段階のものである。青磁碗（3）で



第16图 1 A区·1 B区 谷出土土器



第6表 1A区・1B区 谷出土土器観察表

NO.	出土層位	時代	種類・器種・部位	法量(cm)	NO.	出土層位	時代	種類・器種・部位	法量(cm)
1	2層	C	陶磁器 椀	※高台径4.0	17	5層	A	土師器 甕	※口径22.5
2	2層	C	陶磁器 鉢	※高台径8.2	18	5層	A	土師器 甌	※口径22.5
3	3層	B	青磁器 椀	※高台径5.2	19	5層	A	土師器 片口鉢	—
4	3層	B	青磁器 椀	—	20	5層	A	土師器 甕	—
5	3層	B	瓦質土器 火鉢	—	21	5層	A	土師器 甕	—
6	3層	B	須恵器 東播系鉢	—	22	5層	A	土師器 甕	—
7	3層	B	瓦質土器 三足釜	—	23	5層	A	土師器 甕	—
8	3層	B	土師器 皿	—	24	5層	A	須恵器 長頸壺	頸部径3.5
9	3層	A	須恵器 杯身	※口径9.8	25	5層	A	須恵器 壺	—
10	3層	A	須恵器 壺	—	26	5層	A	須恵器 短頸壺	※口径22.2
11	4層	B	瓦器椀	※口径11.5	27	5層	A	須恵器 皿	器高4.0
12	4層	B	瓦器椀	※口径12.5	28	6層	A	須恵器 壺	口径14.8
13	4層	B	須恵器 東播系鉢	※口径26.8	29	6層	A	須恵器 短頸壺	—
14	4層	B	青磁器 椀	—	30	7層	A	須恵器 杯	高台径10.0
15	4層	A	須恵器 杯	※底径9.0	31	6層	A	須恵器 壺／鉢	底径5.3
16	4層	A	土師器 鉢	—	A：古代 B：中世 C：近世 ※：復元長				

は、見込みに輪花文の押捺がみられるものがあり、これと同時代と思われる口縁部もあった(4)。古代の須恵器については、口頸部外面は回転ナデ、底部外面はヘラ切り後、回転ケズリ調整を施した杯身(9)、外面は叩きの上に横方向の刷毛目調整、内面は円弧叩きを重ねた生焼けの破片(10)を図示した。

④層(第16図) 古代の土器とともに中世の土器が出土した。3層までにはみられなかった瓦器が、破片ではあるが器面保存のよい状態で出土している。瓦器椀は、底部に高台がつかない後出のもの(11)、内面に強いヨコナデを施した大和型の口縁部形状をもち、おそらく断面三角形の低い高台が付く段階のもの(12)がある。東播系須恵器鉢(13)は口縁部上端の上がりが少ない。青磁椀(14)は外面に蓮華文がつく。古代の須恵器高台付杯(15)・土師器鉢(16)は、形状から掘立柱建物跡出土土器と同じ時期のものと考えられる。とくに16は、5層の土師器片口鉢(19)の形状と同タイプである。

⑤層(第15図、第16図) 古代の土器のみ出土する。第15図-12の土師器杯身は器面保存が悪い。須恵器は壺(第16図-25・26)、長頸壺(第16図-24)、皿(第16図-27)を図示した。第16図-25・26と



もに、外面は叩きの上を横方向の刷毛目調整、内面は同心円や円弧の叩きを重ねる。第16図-25の口頸部2カ所に4線、2線の篋描直線を重ねる記号文がある。土師器の甕は、曲線を描くように外反する口縁部をもつもの（第16図-17・21・22）が多く、くの字に外反する口縁部をもつ甕（第16図-20・23）もある。口縁部形状とともに多少の時期幅がみられるようである。鉢や直口の甑には片口が付く（第16図-18・19）。

⑥・⑦層（第16図） ⑤層と同じく古代の土器のみ出土する。28の須恵器壺は、⑤層出土の25を小型にした同形状のもので、内外面の調整も同様である。頸部に「人」字状の篋描き記号文が付される。29も、5層出土の短頸壺（26）と同形状である。高台付杯（30）も④層出土（15）と変わらない。31は、壺または鉢の体部と考えられる。外面は底部が回転ヘラケズリ、体部が回転ヨコナデ、内面はナデ調整である。

#### ・その他の遺物（第15図）

中世遺物包含層が谷にむけて緩傾斜する部分で帯状に分布することは前項で述べた。落込み1もこの範囲に含まれる。これは中世包含層の堆積以前に、谷にむけて雨水などの侵食を受けて形成されたもので、大きく見れば谷地形の一部としてとらえられるかもしれない。その落込み1を覆う、中世包含層から出土した土器（14）は、口縁部上端内側に強いナデ状の筋が入る。外面は上位1/3位までの省略ヘラミガキ、内面は粗い圏線ミガキが施される。底部は欠損するが、高台断面が三角形の低いものになった段階のものである。13は断面三角形の低い高台をもち、見込みに省略気味の連結輪状のヘラミガキがある。15の土師器は外面に煤が付着する。鉢というより鍋に近いと判断した。

溜池埋土からの採取遺物は、主として近世の磁器や瓦からなるが、古代や中世の土器も若干混入していた。10の高台付杯の高台内はヘラケズリ調整である。須恵器の平瓶（9）・高台付杯（10）は大筋でいえば、掘立柱建物跡から出土した土器と所属時期をともにするものとして捉えた。11は高台が無くなった段階のもので、内面に圏線ヘラミガキが隙間をあけて施される。

以上をまとめると、（その1）調査区で出土した古代の土器は、多少の時期幅をもつものの、ほとんどが飛鳥時代に所属するものと思われる。次節で述べるが、（その2）調査区検出の掘立柱建物跡から出土した土器の様相とも考え合わせ、須恵器でいえば杯の身と蓋の区別がもっともしづらい段階、つまり陶邑高蔵寺地区に所在した須恵器窯TK209、TK217並行期あたりが考えられる。中世段階では瓦器碗において、高台が断面三角形の低いもの、ないし高台が無くなった段階のものがみられる。森島康雄氏による編年でみれば、和泉型IV-3～4段階、また、大和型III-C～D段階にあたる。13世紀後半～14世紀にかけての年代が求められる。同じく東播系須恵器鉢は、第Ⅱ期第2段階～第Ⅲ期、12世紀末～14世紀前半にかけてのものと思われる。

加えて輪花文押捺の青磁碗は16世紀に所属する（注②参照）。中世土器としては後出のものである。中世でいえば、13世紀代を中心として、近世に続く段階的な年代のものが混じる可能性があるのではなからうか。

注) ① 合田幸美氏（財団法人 大阪府文化財センター）の教示による。

② 鈴木廣司、南出俊彦両氏（財団法人 大阪府文化財センター）の教示による。

<参考文献>

- 大阪府教育委員会 1978 『陶邑Ⅲ』大阪府文化財調査報告書第30輯  
田 辺 昭 三 1981 『須恵器大成』  
中 村 浩 編 1995 『須恵器集成図録』第1巻 近畿編  
古代の土器研究会編 1992 『古代の土器1 都城の土器集成』  
古代の土器研究会編 1994 『古代の土器3 都城の土器集成』  
小 森 俊 寛 1997 「概説」『古代の土器5-1 7世紀の土器』（近畿東部・東海編）古代の土器研究会編  
森 田 稔 1995 「中世須恵器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編  
中世土器研究会編 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』  
森 島 康 雄 1992 「畿内産瓦器碗の併行関係と暦年代」『大和の中世土器』Ⅱ

※ 古代の土器の時期設定においては、上記のほか、以下の方々の教示を得た。記して感謝の意を表したい。  
(敬称略、順不同)

宇治田和生・西田俊秀(財団法人 枚方市文化財研究調査会)

塩山則之・濱田延充(寝屋川市教育委員会)

野島 稔(四條畷市教育委員会)・一瀬和夫(大阪府教育委員会)

## 第2節 寝屋東遺跡（その2）の調査成果

### 第1項 基本層序（第17～20図）

層序の観察は、主に調査区北西・南東側の壁面において行った。当調査区の北東側に隣接する（その1）調査区とは同一の壁面となるため、基本的な層序も同様となる。

（その1）・（その2）調査区では、調査区の北東・南西側に飛鳥時代以前の開析谷と考えられる谷地形を検出しており、ちょうど調査区境周辺を頂点として、両側の谷に向かって傾斜する地形を確認した。谷以外の丘陵部では後世の削平が著しく、表土を除去すると直ちに段丘形成層である地山が露出し、ここで飛鳥時代と考えられる遺構を検出した。

谷へ向かって傾斜する緩斜面においては、後世の削平の影響が比較的少なく、中世段階の遺物を含む包含層を複数枚確認した。これらの土層は比較的強い攪拌を受け、土壌化が進んでいるため、中世以降の耕作土に相当するものと考えられる。そこでは耕作土と耕作土の間にブロック土を含む土層を部分的に検出した。ブロック土を含む土層は造成土と考えられ、耕作地の確保のために運ばれたものとみられる。換言すれば、過去において数次にわたる造成行為が行われたことを示唆する。

谷部分でも2m以上にわたって中世以降の耕作・造成の状況を示す土層が確認されており、現況で見られるような比較的平坦な耕作地が広がる以前には、徐々に埋積する谷部を両側に挟んだ台地状の耕作地があった状況を考えることができる。

以上をまとめると、谷以外の丘陵部では表土直下が地山、谷に向かって傾斜する緩斜面においては、表土を除去すると、部分的にブロック土を含む土層を挟む黄褐色の中・近世耕作土が複数枚確認され、それを除去すると地山となる。谷部では、中世以降の耕作・造成土と考えられる青灰色～褐色の粘質土層が2m以上堆積し、その下層で飛鳥時代の遺物を含む礫層が確認される。これについては後に詳述する。

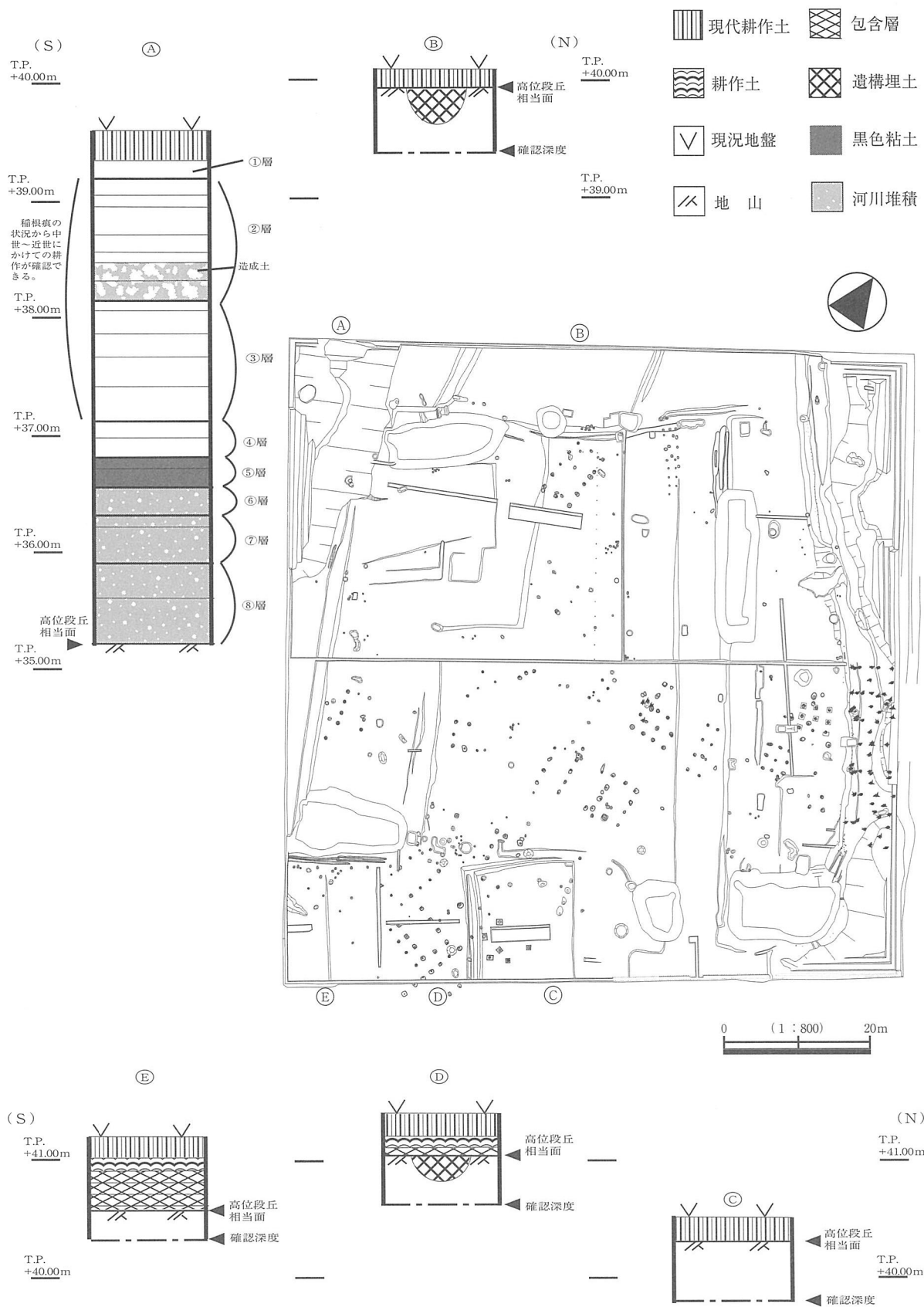
### 第2項 遺構（第21図）

（その2）調査区で検出した遺構には柱穴ピットや土坑、溝がある。ピットの分布は比較的まとまって掘立柱建物を構成するものが多く、建物と認識できるピット群を9棟分確認した。ピットなどの他に、丘陵部の耕作地としての利用状況をあらわすものに、近・現代の井戸や芋貯蔵穴・肥溜・土採り穴・瓦質管暗渠などがある。現存していた溜池5の南東付近では、近世以降の耕作土を除去するとそれらとは耕作地割が異なる耕作地段差が確認できた。耕作土中に中世の遺物を含むことから、中世段階の耕作に起因するものと推測する。

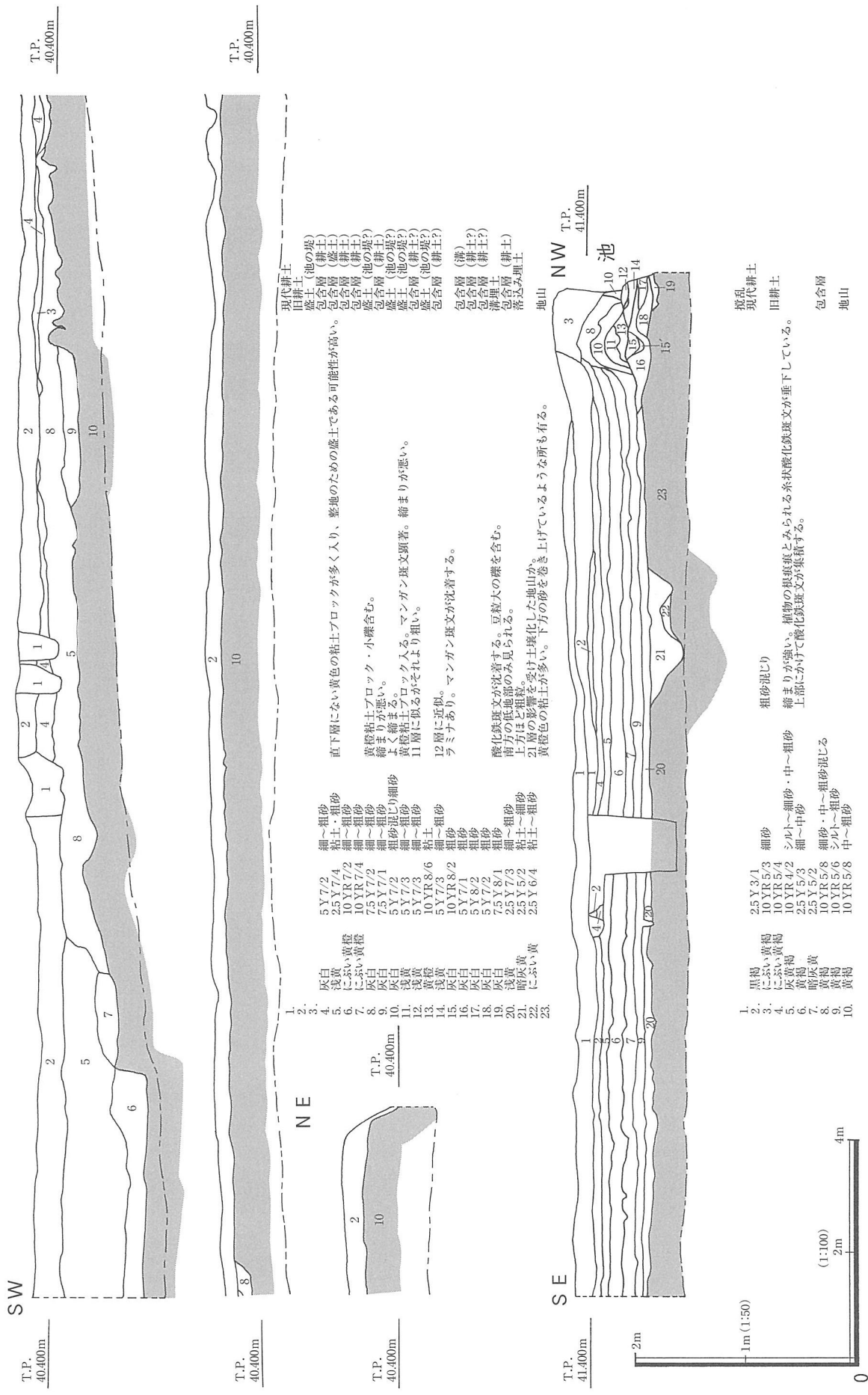
次いで各遺構についてその概要を述べたい。

#### ・掘立柱建物跡・柵

検出した掘立柱建物跡は9棟あり、主に主軸方向から5つのグループにまとめることができる。一つは主軸方向がN-3°～9°-E（W）を指すもので3棟（建物1・8・16）ある。東西3間×南北2間と東西2間×南北4間の建物からなる。2つめは主軸方向がN-15°-Wを指すもので2棟（建物3・4）あり、東西2間×南北3間の建物からなる。3つめは主軸方向がN-25°-Wを指すもので1棟（建物7）あり、東西2間×南北3間の規模である。4つめは主軸方向がN-30°-Wを指すもので2棟（建物2・6）あり、東西2間×南北3間の建物からなる。5つめは主軸方向がN-53°-Eを指すもので1棟（建物5）あり、東西2間×南北2間以上である。柵1は主軸方向がN-6°-Eを指し、建物1の東側に近接してほぼ同じ方向で並ぶことから、同時期にあったと推測する。



第17図 2A区・2B区 層序模式図



現代耕土  
 旧耕土(池の底)  
 盛土層(耕土)  
 包含層(耕土)  
 包含層(耕土)  
 包含層(耕土)  
 盛土層(池の底?)  
 盛土層(池の底?)  
 盛土層(池の底?)  
 盛土層(池の底?)  
 盛土層(池の底?)  
 盛土層(池の底?)  
 包含層(耕土?)  
 包含層(耕土?)  
 包含層(耕土?)  
 溝埋土(耕土)  
 落込み埋土

直下層にない黄色の粘土ブロックが多く入り、整地のための盛土である可能性が高い。  
 黄褐色粘土ブロック・小礫含む。  
 締まりが悪い。  
 黄褐色粘土ブロック入り。マンガン斑文顕著。締まりが悪い。  
 11層に限るがそれより粗い。  
 12層に近似。マンガン斑文が沈着する。  
 アミナナあり。  
 酸化鉄斑文が沈着する。豆粒大の礫を含む。  
 南方の低地部のみ見られる。  
 上方ほど粗粒。  
 21層の影響を受け土壌化した地山か。  
 黄橙色の粘土が多い。下方の砂を巻き上げているような所も有る。

1. 黒褐  
 2. にぶい黄褐  
 3. にぶい黄褐  
 4. 灰黄褐  
 5. 灰黄褐  
 6. 暗灰黄  
 7. 黄褐  
 8. 黄褐  
 9. 黄褐  
 10. 黄褐

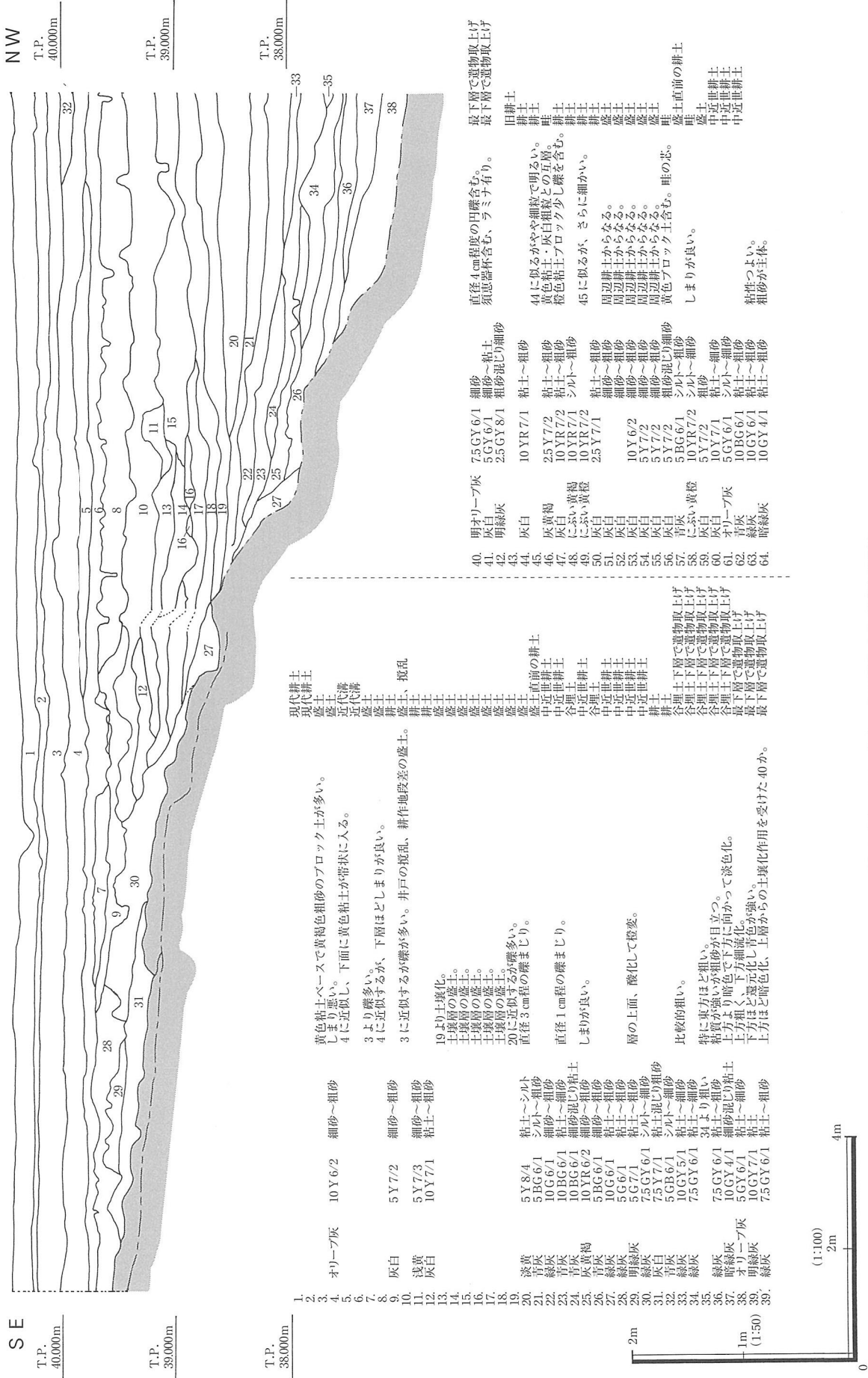
1. 細土・粗砂  
 2. 細土  
 3. 細土  
 4. 細土  
 5. 細土  
 6. 細土  
 7. 細土  
 8. 細土  
 9. 細土  
 10. 細土  
 11. 細土  
 12. 細土  
 13. 細土  
 14. 細土  
 15. 細土  
 16. 細土  
 17. 細土  
 18. 細土  
 19. 細土  
 20. 細土  
 21. 細土  
 22. 細土  
 23. 細土

1. 粗砂混じり  
 2. シルト～粗砂・中～粗砂  
 3. シルト～中砂  
 4. 粗砂・中～粗砂混じる  
 5. シルト～粗砂  
 6. 粗砂

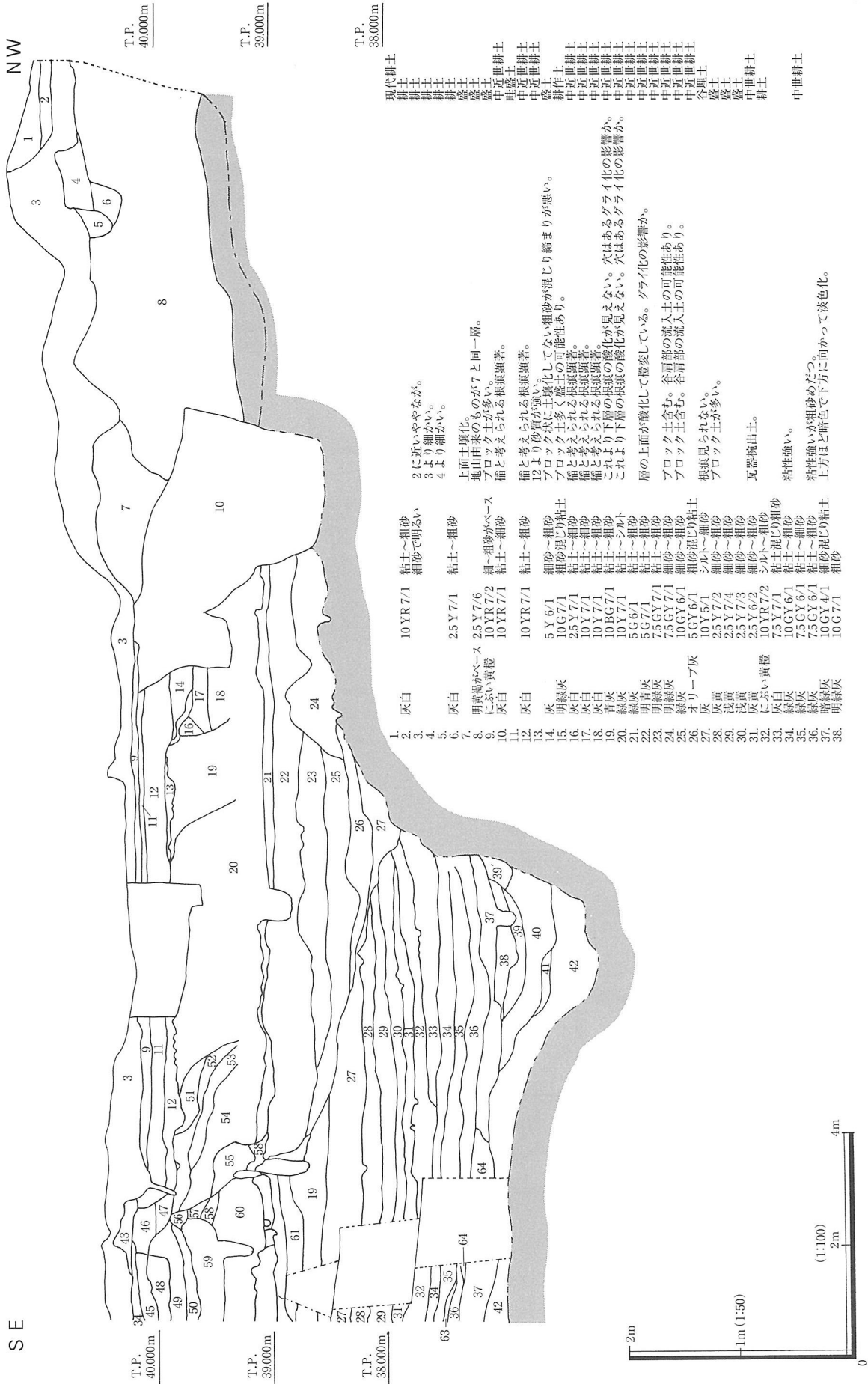
1. 攪乱  
 2. 現代耕土  
 3. 旧耕土  
 4. 包含層  
 5. 地山

第18図 2A区 上段：北西壁断面図・下段：南西壁断面図

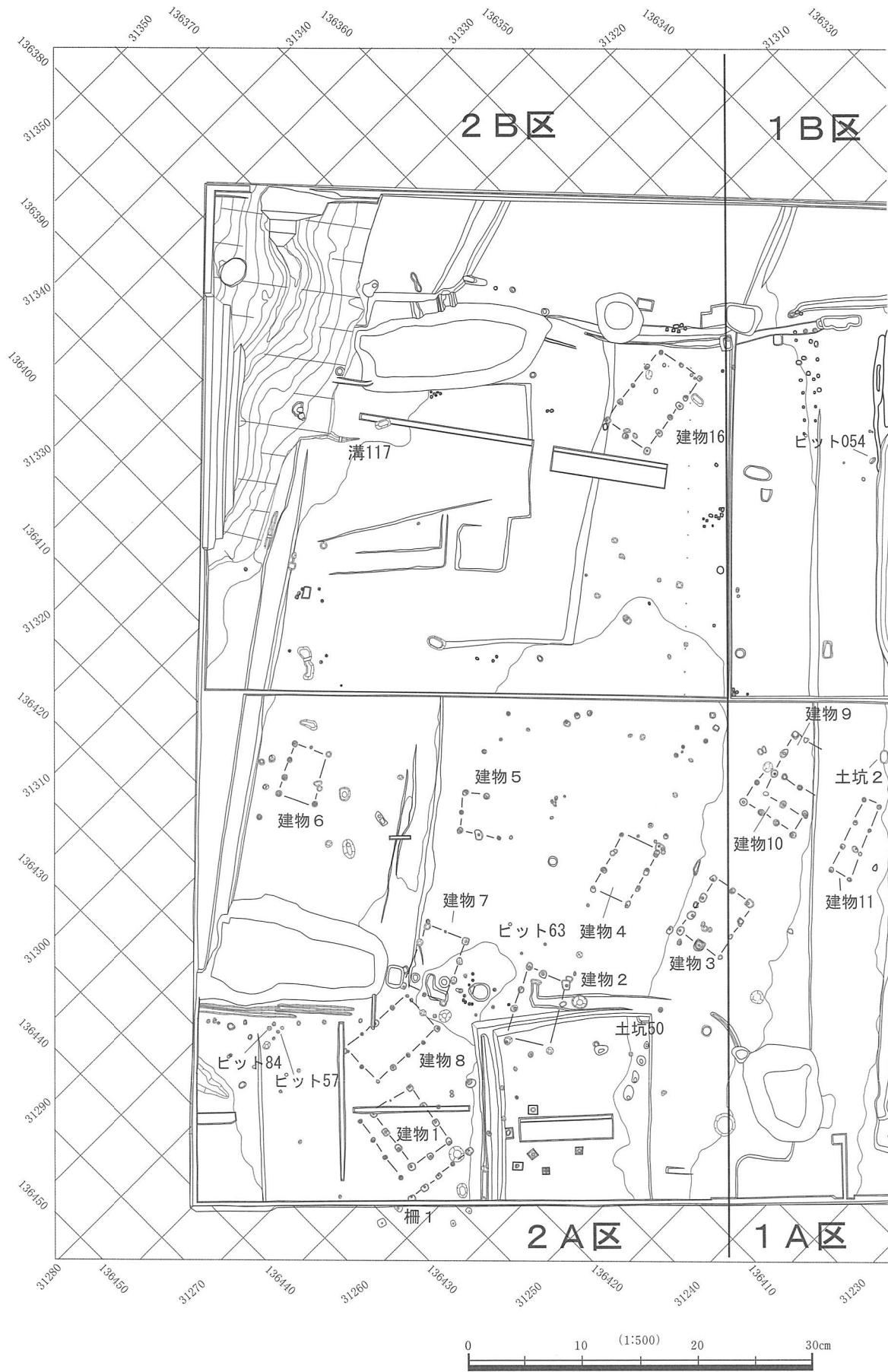




第19図 2B区 南西壁土層断面図①



第20図 2B区 南西壁土層断面図②



第21図 2A区・2B区 平面図

主軸方向を等しくする建物群は、規模にも共通点がみられる傾向にある。

柱穴の出土遺物からN-3°~9°-E (W) を指す建物 1、N-15°-W を指す建物 3 はいずれも飛鳥時代頃と推定できるが、その他の建物は出土遺物を伴わないため不明である。

[主軸方向がN-3°~9°-E (W) を指すもの]

建物 1 (ピット 1~13) (第23図)

南側に一間の底をもつ東西 3 間 (5.7m) × 南北 2 間 (4.0m) の東西棟である。柱穴間は東西列の平均 2.0m、南北列の平均 2.0m である。ピットは一辺 60cm の方形で、深さ 30cm を測る。

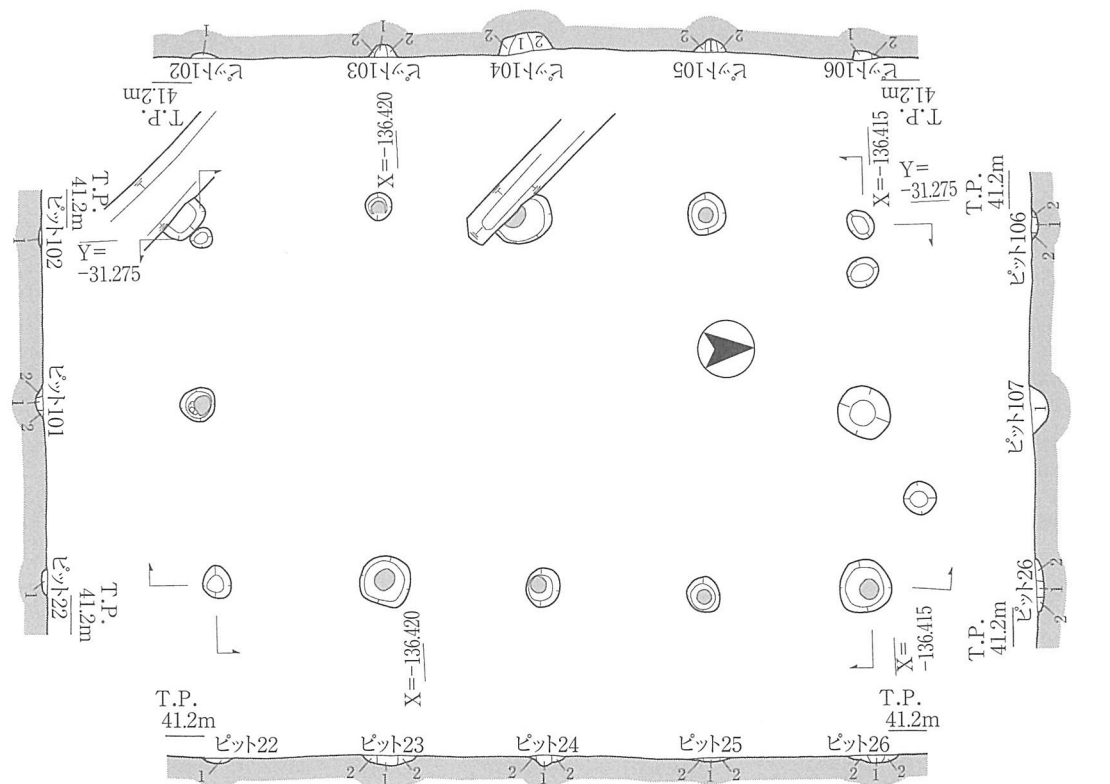
ピット 1、3~9、11~13 で土師器の細片や須恵器杯蓋・身 (第32図-2・3) などが出土している。それぞれの柱穴の中央付近では、直径約 20cm の柱痕跡を検出した。

柱掘方の下部に、にぶい黄橙色粘土~細砂を充填するものがある。ピット断面を観察すると柱痕跡がこの上部までしか確認できないことから、それは柱を据える際に掘方の深さを調整した整地土であろうと推測する。

建物 8 (ピット 22~26、101~107) (第22図)

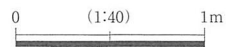
東西 2 間 (3.7m) × 南北 4 間 (7.0m) の南北棟で、柱穴間は東西列が平均 1.8m、南北列が平均 1.8m である。ピットは直径が 60cm、深さ 10cm を測る。

ピット 23・104 から土師器の細片を出土しているが、図化しえなかった。柱掘方埋土は黄褐色の細砂で、直径が約 20cm の柱痕跡を検出した。

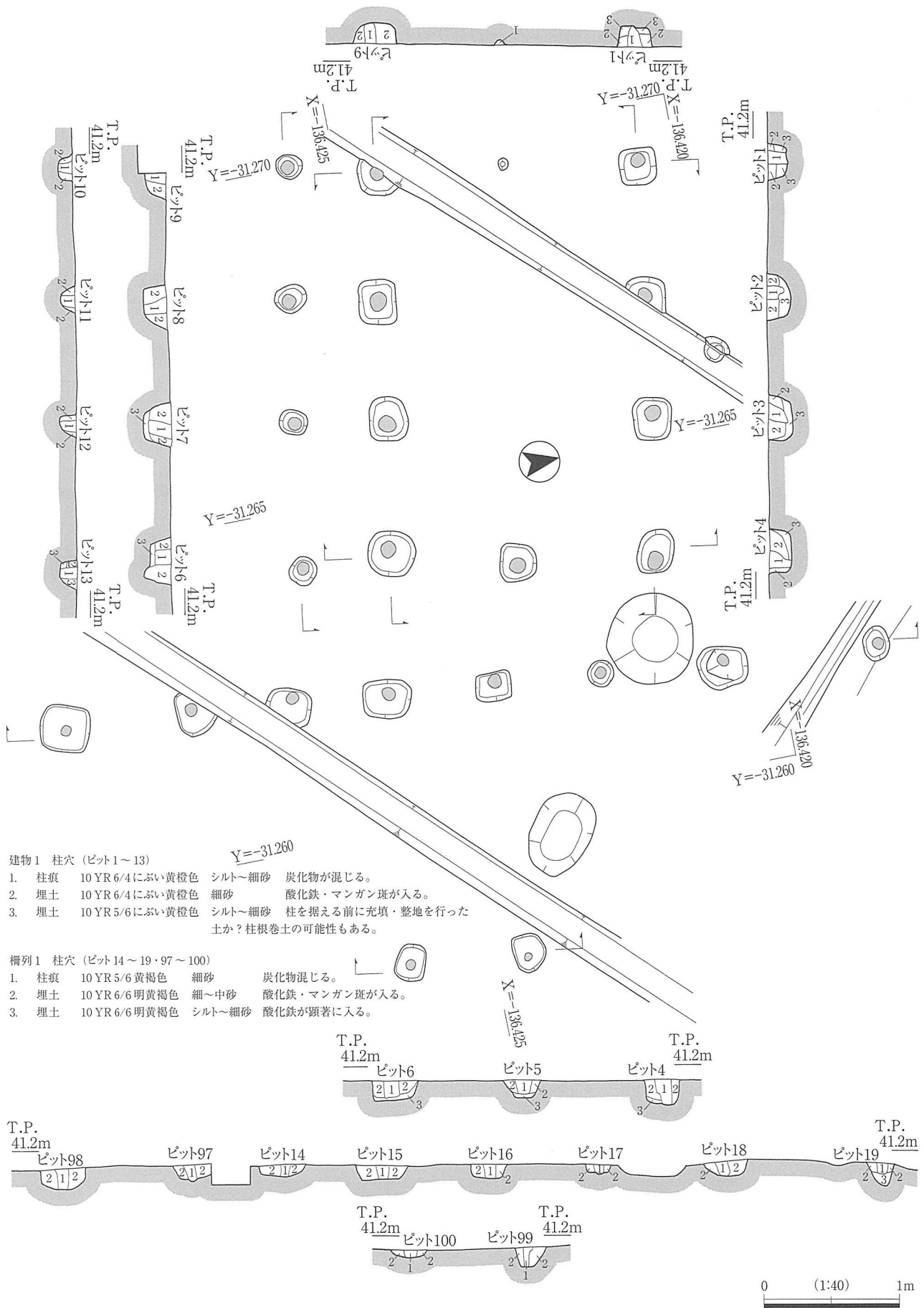


建物 8 柱穴 (ピット 22~26・101~107)

- |       |                  |        |               |
|-------|------------------|--------|---------------|
| 1. 柱痕 | 10 YR 5/4 にぶい黄褐色 | 細砂     | 酸化鉄斑が入る。      |
| 2. 埋土 | 10 YR 5/6 黄褐色    | 細砂     | 酸化鉄斑が入る。      |
| 3. 埋土 | 10 YR 6/4 にぶい黄橙色 | シルト~細砂 | 粘性つよく酸化鉄斑著しい。 |



第22図 2A区 建物 8 平・断面図



建物1 柱穴 (ピット1～13)

1. 柱痕 10 YR 6/4 におい黄橙色 シルト～細砂 炭化物が混じる。
2. 埋土 10 YR 6/4 におい黄橙色 細砂 酸化鉄・マンガン斑が入る。
3. 埋土 10 YR 5/6 におい黄橙色 シルト～細砂 柱を据える前に充填・整地を行った土か? 柱根巻土の可能性もある。

柵列1 柱穴 (ピット14～19・97～100)

1. 柱痕 10 YR 5/6 黄褐色 細砂 炭化物混じる。
2. 埋土 10 YR 6/6 明黄褐色 細～中砂 酸化鉄・マンガン斑が入る。
3. 埋土 10 YR 6/6 明黄褐色 シルト～細砂 酸化鉄が顕著に入る。

第23図 2A区 建物1・柵1 平・断面図



柵 1 (ピット列) (ピット14~19、97~100) (第23図)

建物1の東側で検出した南北方向の直線を呈する柵である。主軸方向はN-6°-Eで、建物1の東側に隣接し、かつほぼ同一方向を示すことから、これに付随する施設であると考えられる。柵列の検出長は南北方向で8間以上(13.9m)を測る。さらに南方向に延びるものと思われるが、調査区外に及ぶため総延長は不明である。柱穴間は平均1.8mを測り、ピットの平面形は方形で一辺50~70cm、深さは30cmを測る。

ピット98と97、ピット18と19の柱穴間はほかの柱穴間よりやや長い。このことから、ピット14~18・97と、ピット99・100が組合って建物となる可能性もある。

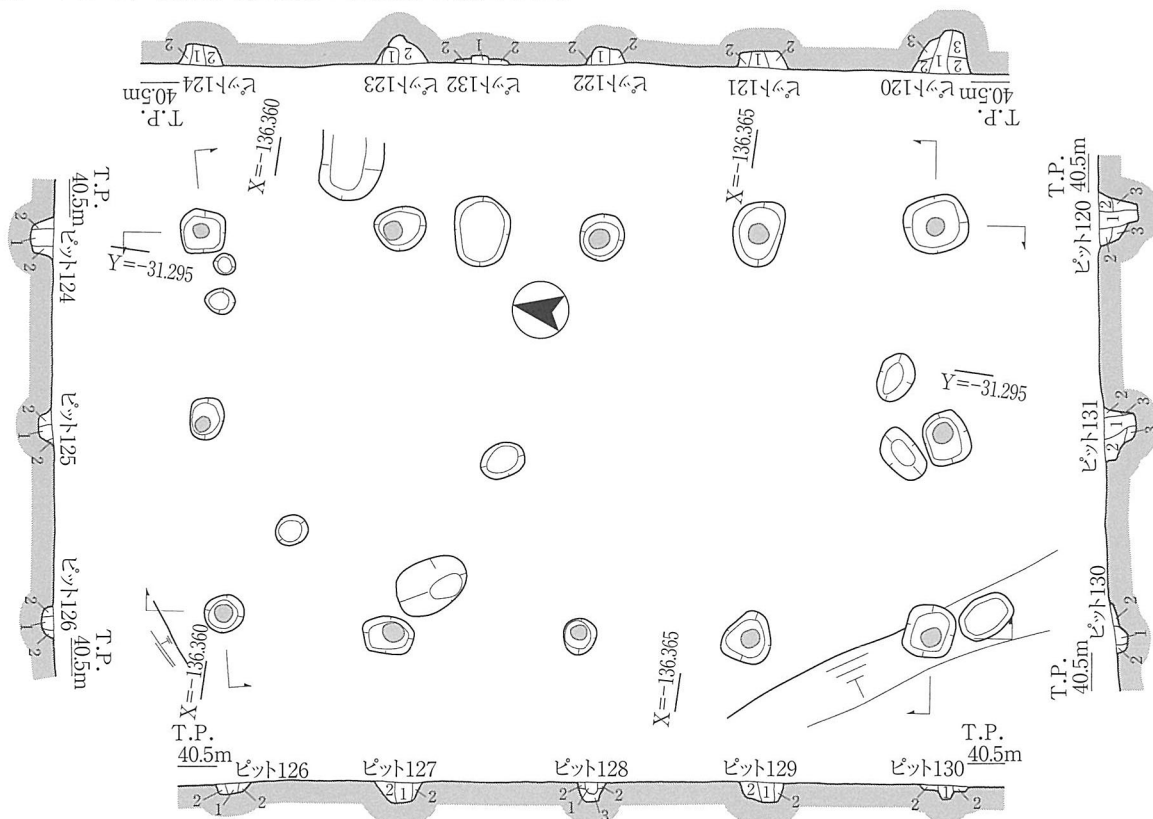
ピット14~17と97から土師器鍋(第32図-8)や須恵器杯蓋(第32図-6・9)などが、ピット98・100から須恵器杯蓋(第32図-4・5・7)が出土している。

柱掘方埋土は明黄褐色の細~中砂で、直径約20cmの柱痕跡を検出した。

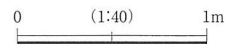
建物16 (ピット120~131) (第24図)

東西2間(4.2m)×南北4間(7.6m)の南北棟で、柱穴間は東西列が平均2.1m、南北列が平均1.9mである。ピットは一辺30~50cmの方形で、深さ20cmを測る。

主軸方向を同じくする、建物1・8と柵列1から北に大きく離れて位置する。柱掘方埋土は明黄褐色の細~中砂で、直径が約0.2mの柱痕跡を検出した。



- 建物16 柱穴(ピット120~131)
- |       |                |                        |               |            |
|-------|----------------|------------------------|---------------|------------|
| 1. 柱痕 | 10 YR 5/6 黄褐色  | 細砂                     | T.P. 40.5m    | T.P. 40.5m |
|       |                | 概ね2より粘性が強い。            |               |            |
| 2. 埋土 | 10 YR 6/6 明黄褐色 | 細~中砂                   | ピット134 ピット133 |            |
|       |                | 概ね1よりしまりがある。           |               |            |
| 3. 埋土 | 10 YR 5/6 黄褐色  | 中~粗砂                   |               |            |
|       |                | 一部で確認でき地山に質が近似ししまりがある。 |               |            |



第24図 2A区 建物16 平・断面図

[主軸方向がN-15°-Wを指すもの]

建物3 (ピット42~49、85、86) (第25図)

東西2間(平均4.0m)×南北3間(5.3m)の南北棟で、柱穴間は東西列が平均2.1m、南北列が平均1.8mである。ピットは平面形が方形で一辺50~60cm、深さ20~40cmを測る。

ピット46~48の東西間はピット42・43・86の東西間よりやや短い。またピット47と48の柱穴間は、ほかよりやや短い。柱掘方埋土は黄褐色の細~中砂で、直径が約20cmの柱痕跡を検出した。

ピット44・45から土師器の細片・須恵器杯蓋(第32図-10)が出土している。

建物4 (ピット67~74) (第26図)

東西1間(平均3.4m)×南北3間(5.1m)の南北棟で、柱穴間は東西列が平均1.7m、南北列が平均1.7mである。したがって東西列は南北列の2間に相当する。ピットは平面形が方形で一辺40~60cm、深さ20cmを測る。柱掘方埋土は褐色の細~粗砂で、直径約20cmの柱痕跡を検出した。

[主軸方向がN-25°-Wを指すもの]

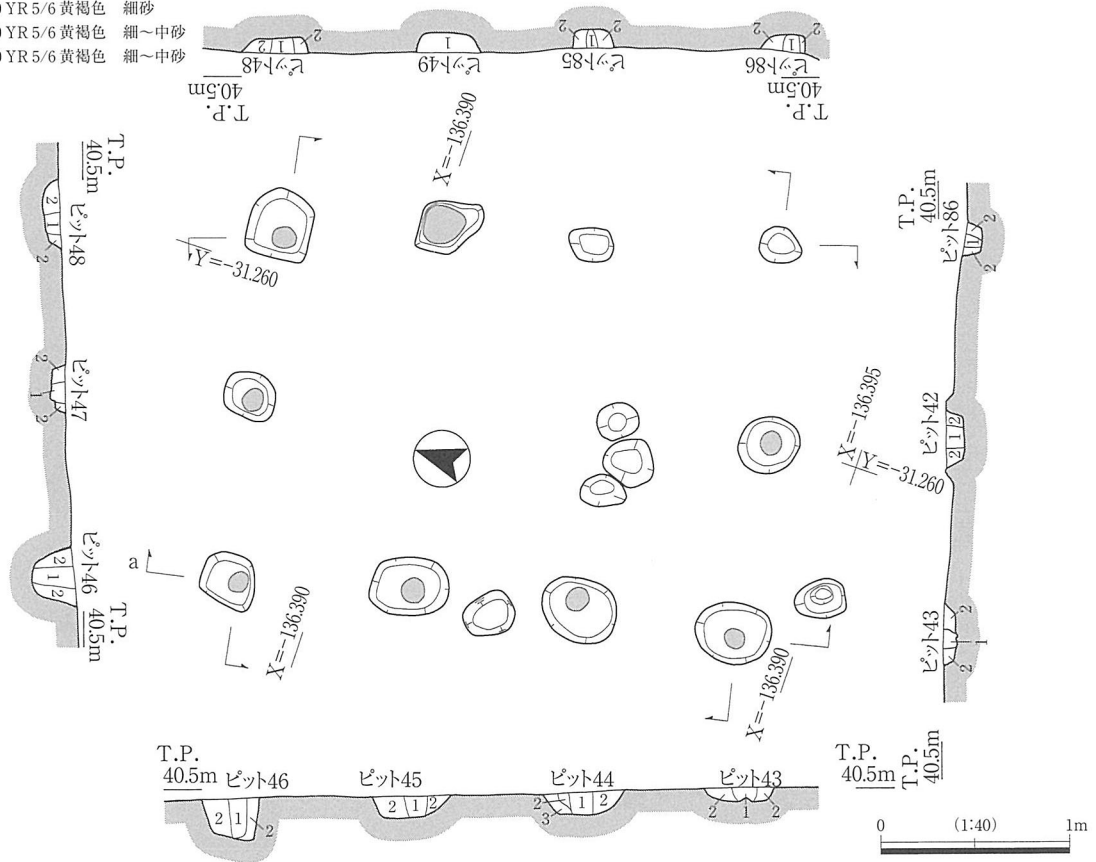
建物7 (ピット60~62、66、109、110、113~115) (第28図)

東西2間(3.7m)×南北3間(5.7m)の南北棟で、柱穴間は東西列が平均1.8m、南北列が平均1.8mである。ピットは平面形が方形で一辺60cm、深さ20cmを測る。

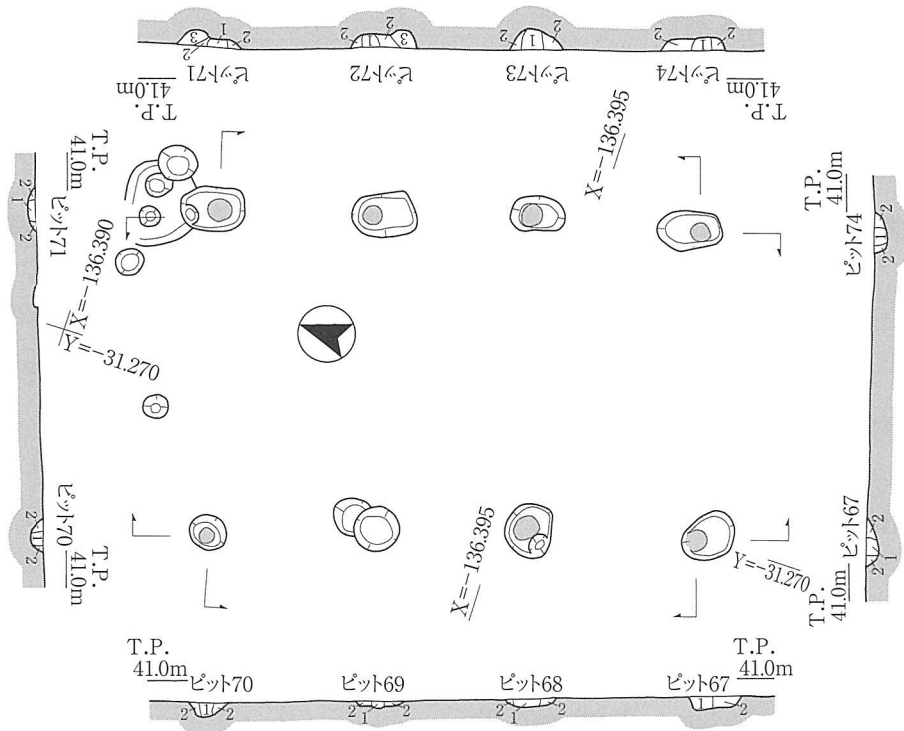
柱掘方埋土は明黄褐色の細砂で、直径が約20cmの柱痕跡を検出した。

建物3 柱穴(ピット42~49・85・86)

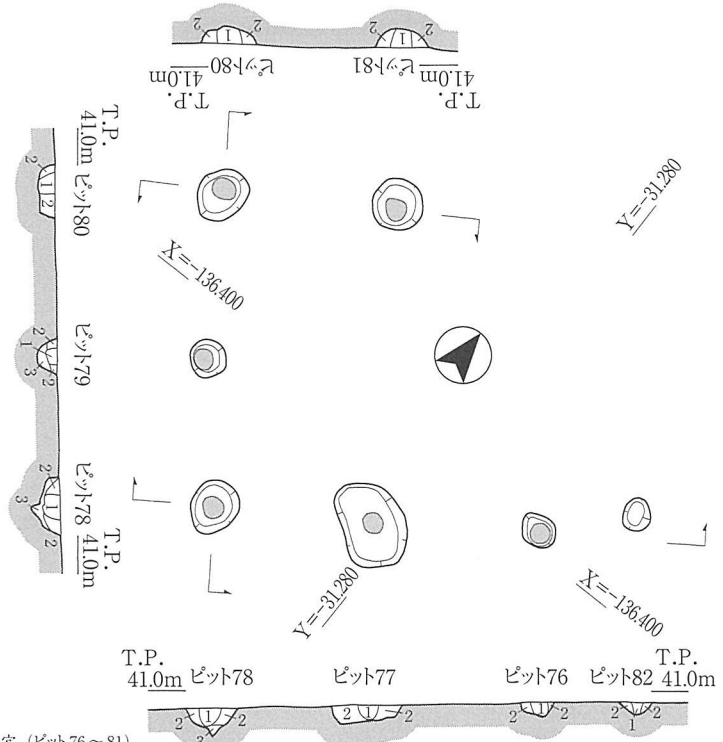
- 1. 柱痕 10 YR 5/6 黄褐色 細砂
- 2. 埋土 10 YR 5/6 黄褐色 細~中砂
- 3. 埋土 10 YR 5/6 黄褐色 細~中砂



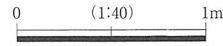
第25図 2A区 建物3 平・断面図



- 建物4 柱穴 (ピット67～74)
1. 柱根 10 YR 5/6 黄褐色 細～中砂
  2. 埋土 10 YR 4/4 褐色 細～粗砂 酸化鉄が入る。
  3. 埋土 10 YR 5/6 黄褐色 細～中砂 1、2より粘性よわく、酸化鉄斑が著しい。



- 建物5 柱穴 (ピット76～81)
1. 柱痕 10 YR 5/6 黄褐色 細～中砂
  2. 埋土 10 YR 5/6 黄褐色 細砂 しまりが強い。
  3. 埋土 10 YR 5/6 黄褐色 細～中砂



第26図 建物4・5 平・断面図

〔主軸方向がN-30°-Wを指すもの〕

建物2 (ピット87~95) (第27図)

東西2間(3.7m)×南北3間(平均6.4m)の南北棟で、柱穴間は東西列が平均1.8m、南北列が平均2.3mである。ピットは一辺60~70cmの方形で、深さ20~40cmを測る。

柱穴間が他の建物に比べて一定していない。柱掘方埋土は黄褐色の細砂で、直径が20~30cmの柱痕跡を検出した。

建物6 (ピット34~41) (第28図)

東西2間(3.2m)×南北3間(4.5m)の南北棟で、柱穴間は東西列が平均1.6m、南北列が平均1.6mである。ピットは直径が60cm、深さ20cmを測る。

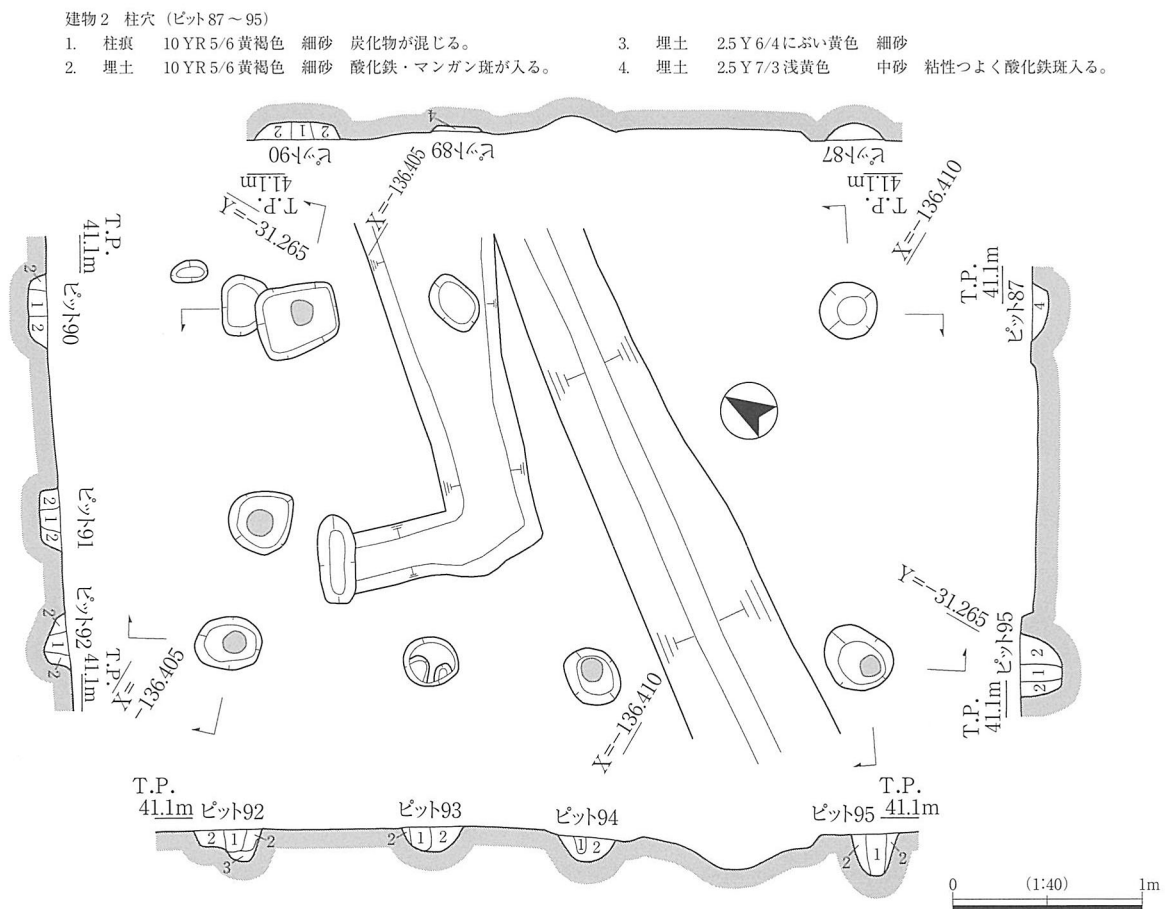
主軸方向を同じくする建物2から西に離れて位置する。柱掘方埋土は黄褐色の細~粗砂で、直径が約20cmの柱痕跡を検出した。

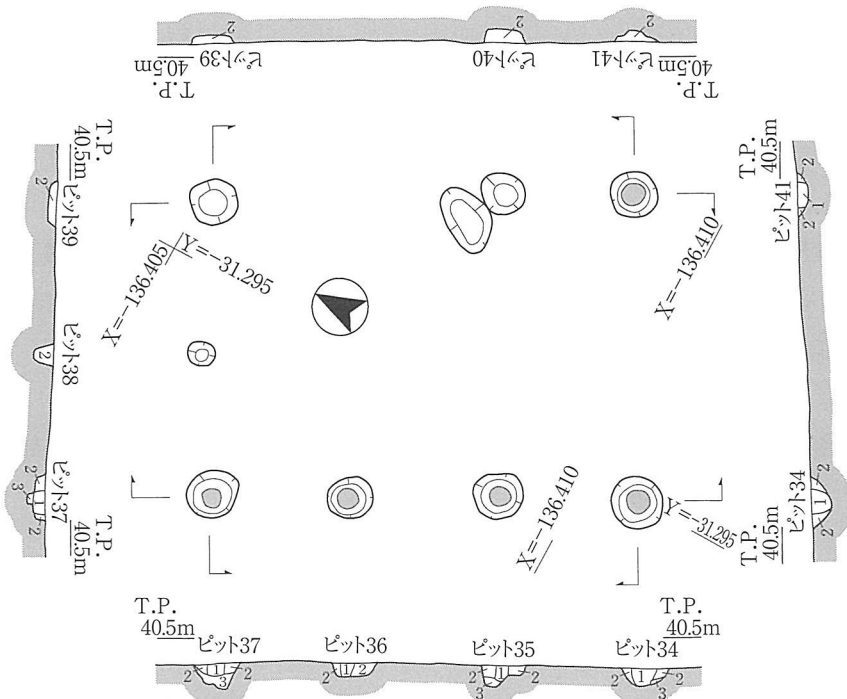
〔主軸方向がN-53°-Eを指すもの〕

建物5 (ピット76~81) (第26図)

東西2間(3.4m)×南北2間以上(3.5m以上)の東西棟で、柱穴間は東西列が平均1.7m、南北列が平均1.7mである。ピットは直径が60cm、深さ20cmを測る。

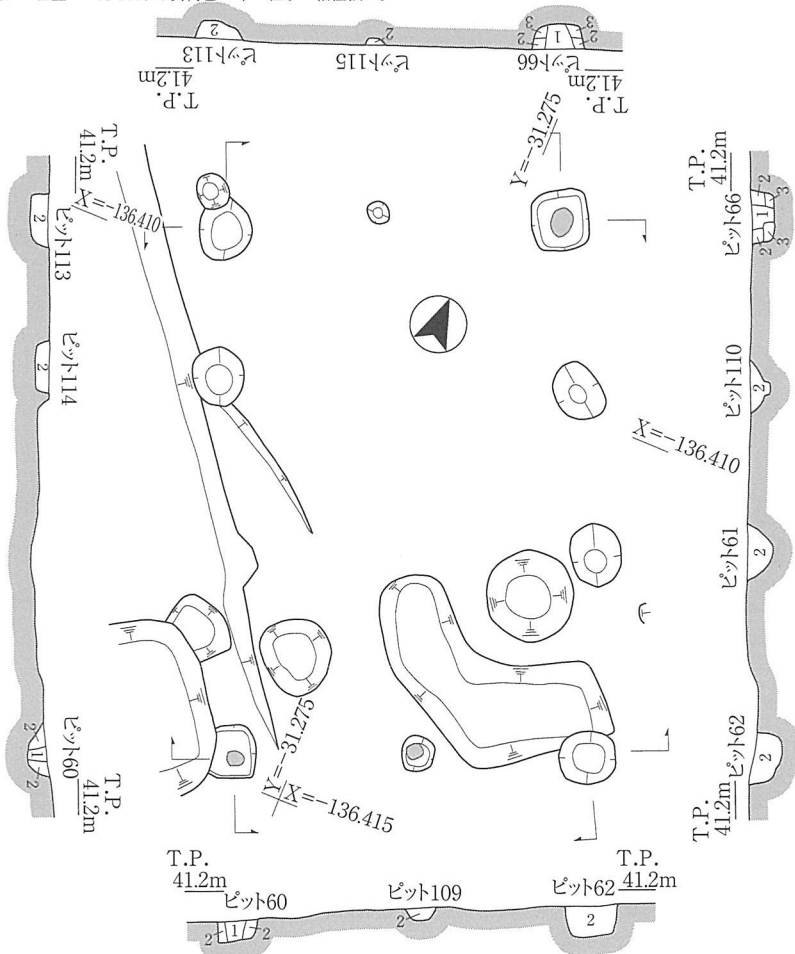
この建物は、他のものと異なり主軸方向が大きく東に振る。また西側の耕作段差に平行している点も、他の建物と相違する。





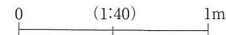
建物6 柱穴 (ピット34～41)

1. 柱痕 10 YR 4/4 褐色 細～中砂 粘性もよく炭化物混じる。
2. 埋土 10 YR 5/6 黄褐色 細～中砂 粘性に強く酸化鉄斑が入る。
3. 埋土 10 YR 5/6 黄褐色 中～粗砂 粘性強い。



建物7 柱穴 (ピット60～62・66・109・110・113～115)

1. 柱痕 10 YR 6/6 明黄褐色 細砂 炭化物が混じるものもある。
  2. 埋土 10 YR 6/6 明黄褐色 細砂 酸化鉄・マンガン斑が入る。
- ※柱を据える時に柱根の腐食を防ぐために充填あるいは巻いた粘性が強い。黄褐色 シルト～細砂 (3) をもつ柱もある。



第28図 2A区 建物6・7 平・断面図



さらに、付近は削平が著しく柱穴掘方が非常に浅いことから、特に建物東側は明確なプランを検出したとは言いがたい。柱掘方埋土は黄褐色の細砂で、直径が約20cmの柱痕跡を検出した。

#### ・ピット

##### ピット51（第29図）

建物2の西隣で検出した直径が50cmほどの円形、深さは約30cmのピットである。埋土は黄褐色のシルト～細砂で、直径が約30cmの柱痕跡を検出しており、建物に関係するものであった可能性がある。柱痕跡埋土からは土師器杯（第32図-11）が出土している。

##### ピット63（第29図）

建物2の北隣で検出した直径が約50cmの円形、深さ約20cmのピットである。ピット埋土は黄褐色の細砂で、土師器細片や須恵器杯蓋（第32図-12）が出土している。

##### ピット57（第29図）

建物8の南西部で検出した直径が約60cmの円形、深さ約20cmのピットである。ピット埋土は灰黄褐色の細～粗砂で、上部で土師器が出土している。

##### ピット84（第29図）

ピット57の西隣で検出した直径が約60cmの円形、深さ約50cmのピットである。ピット埋土は黄褐色の細砂で、底部からやや浮くような状態で土師器が出土している。

##### ピット64（第29図）

建物8の北隣で検出した直径が約60cmの円形、深さ約20cmのピットである。ピット埋土は灰黄褐色の細～粗砂で、上部で土師器細片が出土している。

#### ・土坑

##### 土坑50（第29図）

建物2の東隣で検出した直径が約2.4mの円形、深さ約80cmのすり鉢状の底部を呈する土坑である。埋土はにぶい黄橙色のシルトで、底面から浮くような状態で丸・平瓦と陶器甕片が出土している。

#### ・溝

##### 溝117（第30図）

2 B区で検出した、北東から谷に向かってのびる幅約60cm、深さは20cmの溝である。埋土はにぶい黄褐色の中砂で、須恵器細片が出土している。

この溝の東側で確認した中世以降と考えられる、耕作土と埋土が近似することから、当該期の耕作に関連する排水施設である可能性が高い。

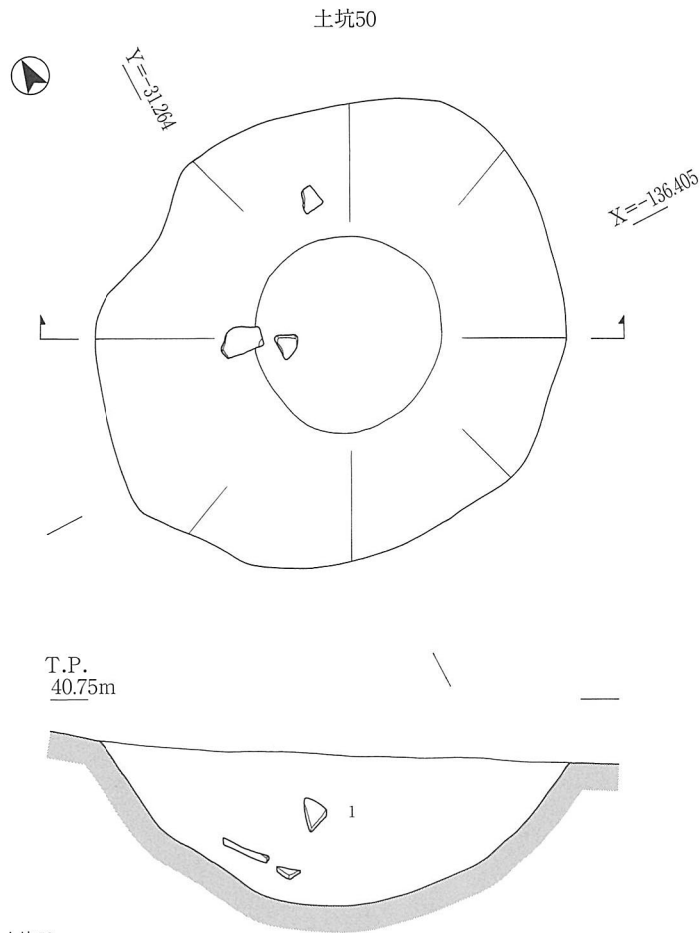
#### ・その他

##### 落込み27（第30図）

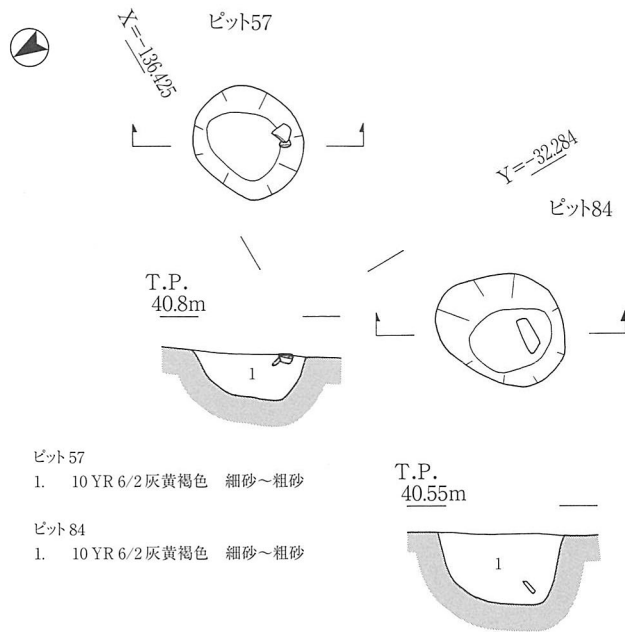
2 A区の南東部で耕作土と考える数枚の包含層を除去した最下面で検出し、平面形は不定形で深さ約30cmの自然地形と思われる落込みである。埋土は比較的均質な暗褐色の細砂で、須恵器細片が出土している。耕作が開始される以前の湿地状の堆積を示す落込みであろう。

##### 土採り穴（写真図版13-6）

2 A区南東部の現代耕作土を除去した地山質の橙色粘土面で検出した1辺約70cmの方形の土採り穴である。土採り穴は列を成しており、南東・北西方向の現代耕作地割に沿った軸を示す列と、やや北に軸を振ったものがある。この軸の違いは、おそらく時期差を示すものと考えられる。これら土採り穴の掘方は

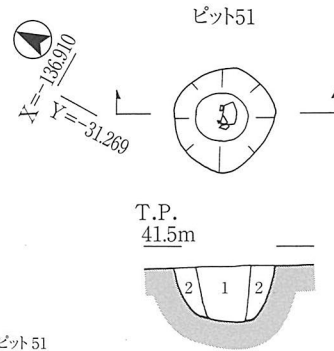


土坑 50  
 1. 10 YR 6/4 にふい黄橙色 シルト 全体に粘性があり下部で特に強い。細砂を主体に粗砂も混じる。酸化鉄斑が顕著に入る。上面・上部で腐食であろう暗褐色が垂下混入する。底面から少し浮くように遺物が出土。

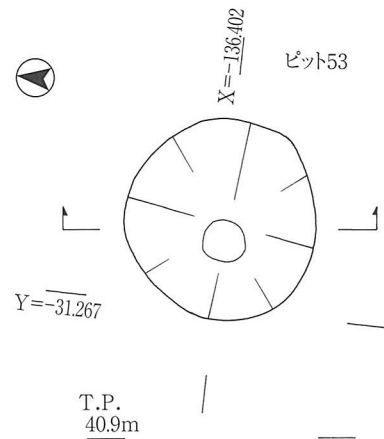


ピット 57  
 1. 10 YR 6/2 灰黄褐色 細砂～粗砂

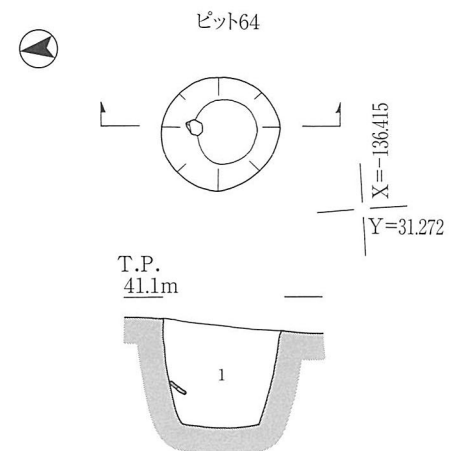
ピット 84  
 1. 10 YR 6/2 灰黄褐色 細砂～粗砂



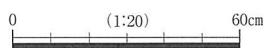
ピット 51  
 1. 柱痕? 10 YR 5/4 にふい黄褐色 シルト～細砂 1mm以下の炭化物が若干混じる。  
 2. 埋土 10 YR 5/6 黄褐色 シルト～細砂 酸化鉄斑が入る。柱痕部分との違いは不明。



ピット 53  
 1. 10 YR 5/6 黄褐色 細砂



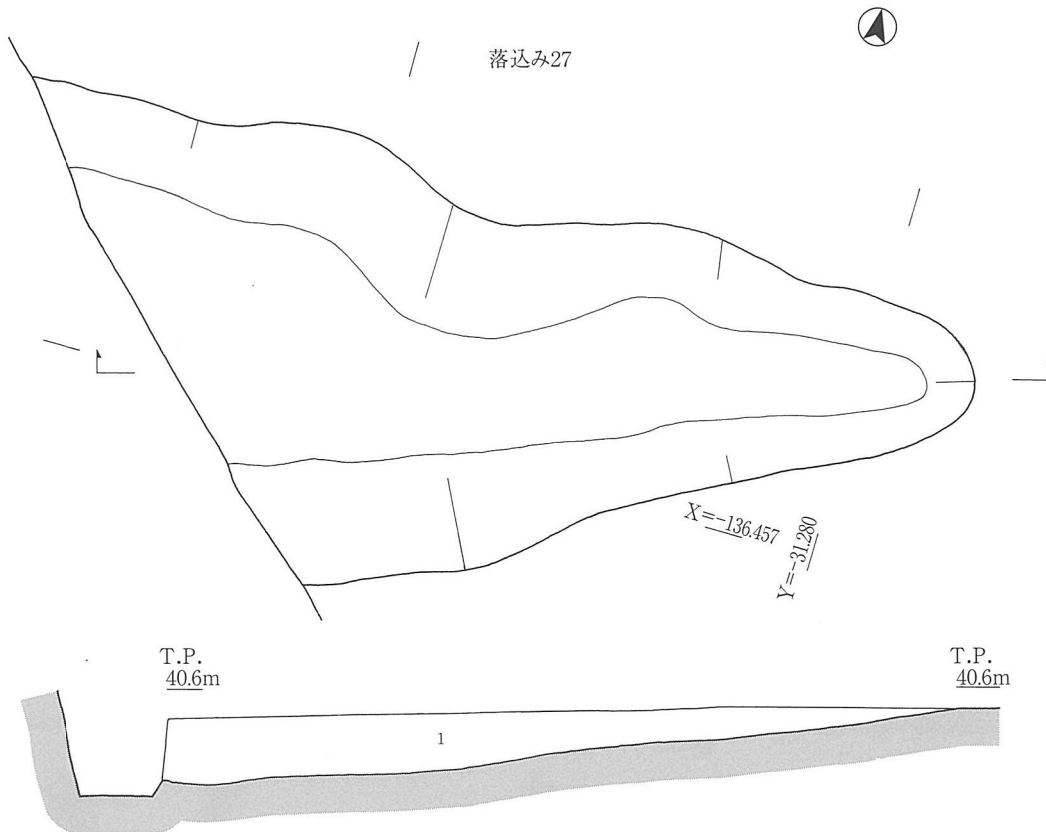
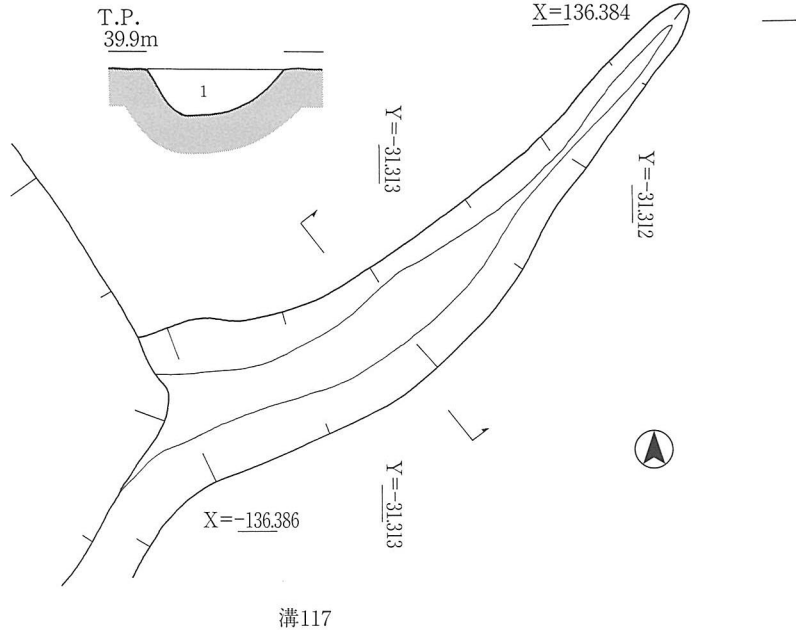
ピット 64  
 1. 2.5 Y 5/4 黄褐色 細砂 粘質があり酸化鉄斑が若干入る。暗褐色土ブロック・中砂が混じる。



第29図 2 A区・2 B区 土坑50、ピット51・53・57・64・84 平・断面図

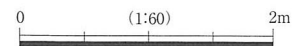
溝 117

1. 10 YR 4/3 におい黄褐色 中～粗砂 粘性強い。



落ち込み27

1. 10 YR 3/3 暗褐色 細砂 均質な土壌 粘性は並でしよりは強い。2 Y 6/4 におい黄色 細砂 (粗砂混じり) が上面から垂下して入りこんでいる上方ほど暗色を呈する (下方が弱く溶脱している) 直上層の段階で耕作が始まる前の自然の落ち込みと考えられる。



第30図 2 A区・2 B区 溝117、落ち込み27 平・断面図

いずれも、橙色粘土層までにとどまり、下層で確認できる砂層の地山には及んでいない。

遺物は出土していないが、埋土が近・現代耕作土と共通することから、この時期に畦や里道、土留めなどに使用する土を採取した痕跡と推測する。

#### ・谷（第31図）

現地表面から谷底までの深さは、北よりの部分でG.L.-4mほどを測る。谷の埋積状況を見ると、下層1mほどは砂礫を主体とした埋土になっている。それより上方は黒褐色の粘土層と自然堆積層を挟んで、グライ化した粘土質の堆積が続く。これにより最下層の段階では、谷が流路としての性格を持っていたことがうかがわれる。黒褐色の粘土層より上方の土層は、流水の供給が絶たれて沼沢のような湿地が生じた後、徐々に埋積したものであろう。この湿地段階の土層断面を観察すると、稲と推定できる根痕が多く確認できることから、導水の難しい丘陵部に先行して、湿地状の谷部の水田経営を行っていた可能性を指摘できる。

谷埋土を掘削する際は土質の変化に留意したものの、遺物の取り上げにあたり、掘削深度が一致するものをまとめてしまう場合があったため、必ずしも同一の層位ごとに遺物を取り上げたとは言えない。特に谷のかたや谷底の深度が急に浅くなるような部分では、上層に帰属する遺物を下層以下の遺物として取り上げる状況が生じた。したがって第7表に掲載している、層位と遺物の対応関係には一定のノイズが含まれている。そのような状況を考慮しつつ、（その1）調査区で検出した谷の埋積状況を比較材料としてみると、この谷の埋積時期は、砂礫層が飛鳥時代頃、黒褐色粘土層より上方の層が中世以降と推測できる。

### 第3項 遺物

（その2）調査区では、コンテナ（60cm×40cm×15cm）12杯分の遺物が出土した。主体となるのは、地山面で検出された掘立柱建物跡出土の古代の土器と、包含層や谷部から出土した中世土器である。

遺構から出土した土器は細片が多く、実測できるものは少ないが、とくに掘立柱建物跡から出土した、時代・段階設定に利用できそうな土器は、すべて図示するようにした。

#### ・遺構出土遺物（第32図）

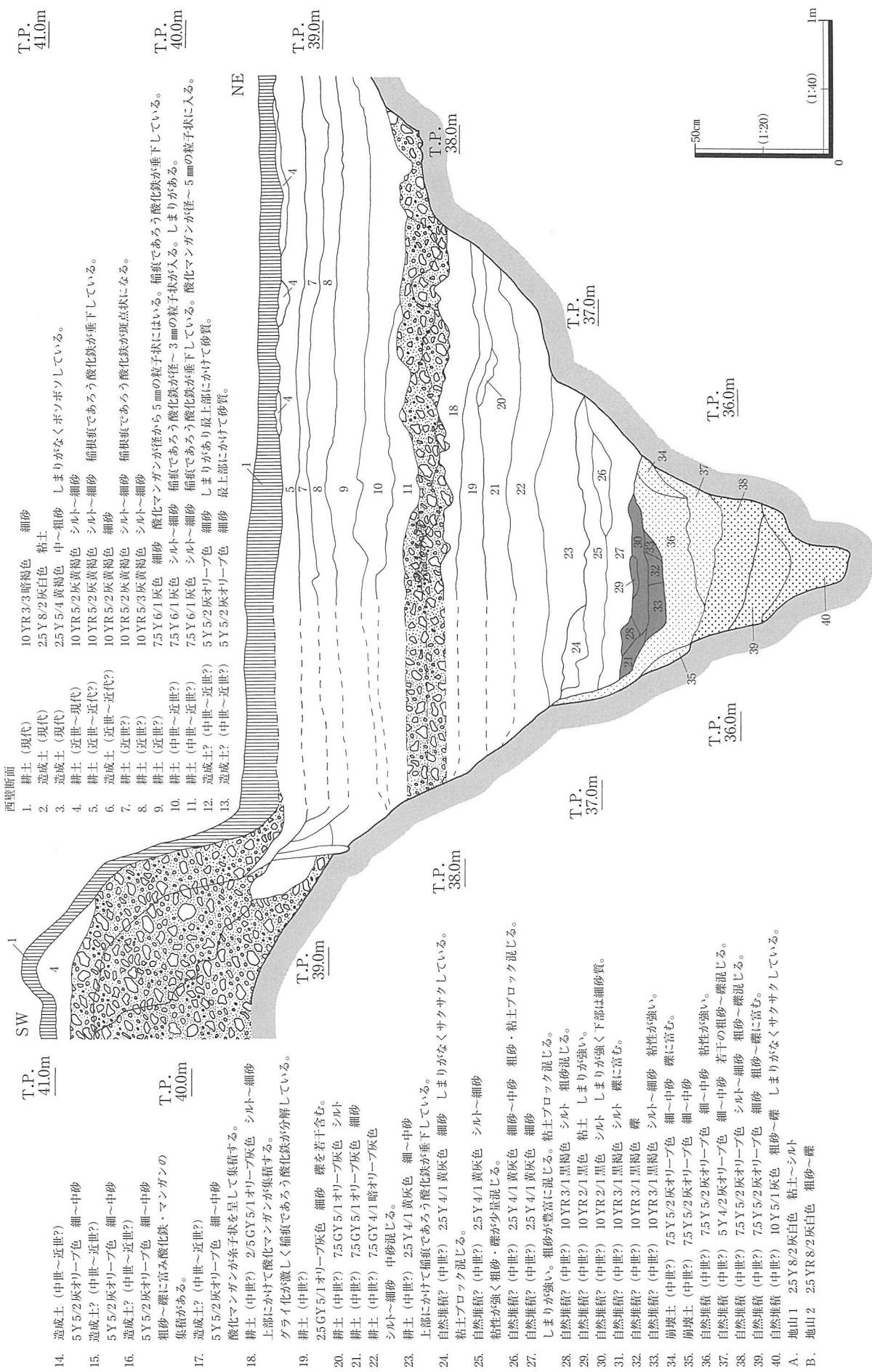
検出された建物跡は9棟分で、柱穴から土器が出土したのは建物1・建物3の2棟分と、建物1の短辺に併行する位置で検出した柵1である。それ以外のピットから出土した土器も須恵器、土師器に限られる。

須恵器は杯の身と蓋の区別がむづかしい時期の土器を主体とする。うち7は口頸部内面にかえりをもち、受部をもたない直口の皿・杯とセットになる蓋である。2・6・7・9の杯蓋天井部は回転ヘラケズリ、3の杯身底部はケズリの上にナデ調整を行っている。8は土師器鍋か甑の把手とみられる。高台の付いた土師器（11）は、同様の形状をした古代の須恵器杯と同じ時期のものと考えている。その一方で10世紀末～11世紀初めに見られる須恵器と同じ製作手法をもつ土師器との見方も可能である。

#### ・谷部出土遺物（第32図）

谷部から出土した遺物に関して、土器の種類と層位との対応関係は第7表を参照されたい。谷埋土の堆積状況は大略的には（その1）調査区で検出した谷の状況に似ると考えられ、5・6層が古代に形成されたものと考えている。それらの層位からも中世土器、中・近世陶磁器が出土しているが、その要因に関しては前項で詳述しているので参照されたい。

図示したもののうち、中世に属する遺物は灯明皿（14）・土師器皿（15）・東播系須恵器鉢（16）である。瓦器は出土しているが、細片であり図示できなかった。15の口縁部内面には強いヨコナデがあり、



第31図 2B区 谷断面図

T.P. 41.0m

T.P. 40.0m

T.P. 39.0m

T.P. 37.0m

50cm

1m

(1:20)

(1:40)

0

西壁断面

1. 耕土 (現代)

2. 造成土 (現代)

3. 耕土 (近世～現代)

4. 耕土 (近世～近代?)

5. 造成土 (近世)

6. 耕土 (近世?)

7. 耕土 (中世～近世?)

8. 耕土 (中世～近世?)

9. 耕土 (中世～近世?)

10. 耕土 (中世～近世?)

11. 耕土 (中世～近世?)

12. 造成土? (中世～近世?)

13. 造成土? (中世～近世?)

10 YR 3/3 暗褐色 細砂

2.5 Y 8/2 灰白色 粘土

2.5 Y 5/4 黄褐色 中～粗砂

10 YR 5/2 灰黄褐色 シルト～細砂

10 YR 5/2 灰黄褐色 シルト～細砂

10 YR 5/2 灰黄褐色 シルト～細砂

10 YR 5/3 灰黄褐色 シルト～細砂

7.5 Y 6/1 灰色 細砂

7.5 Y 6/1 灰色 シルト～細砂

7.5 Y 6/1 灰色 シルト～細砂

5 Y 5/2 灰オリーブ色 細砂

5 Y 5/2 灰オリーブ色 細砂

T.P. 41.0m

T.P. 40.0m

T.P. 39.0m

T.P. 38.0m

T.P. 37.0m

T.P. 36.0m

14. 造成土 (中世～近世?)

5 Y 5/2 灰オリーブ色 細～中砂

15. 造成土? (中世～近世?)

5 Y 5/2 灰オリーブ色 細～中砂

16. 造成土? (中世～近世?)

5 Y 5/2 灰オリーブ色 細～中砂

粗砂・礫に富み酸化鉄・マンガン  
の集積がある。

17. 造成土? (中世～近世?)

5 Y 5/2 灰オリーブ色 細～中砂

酸化マンガンが糸子状を呈して集積する。  
上部にかけて酸化マンガンが  
集積する。

18. 耕土 (中世?)

2.5 GY 5/1 オリーブ灰色 シルト～細砂

上部にかけて酸化マンガンが  
集積する。  
グライ化が強く稲稈であらう  
酸化鉄が分解している。

19. 耕土 (中世?)

2.5 GY 5/1 オリーブ灰色 細砂 礫を若干含む。

20. 耕土 (中世?)

7.5 GY 5/1 オリーブ灰色 シルト

21. 耕土 (中世?)

7.5 GY 5/1 オリーブ灰色 細砂

22. 耕土 (中世?)

7.5 GY 4/1 暗オリーブ灰色  
シルト～細砂 中砂混じる。

23. 耕土 (中世?)

2.5 Y 4/1 黄灰色 細～中砂

上部にかけて稲稈であらう  
酸化鉄が垂下している。

24. 自然堆積? (中世?)

2.5 Y 4/1 黄灰色 細砂

粘土ブロック混じる。

25. 自然堆積? (中世?)

2.5 Y 4/1 黄灰色 シルト～細砂

粘性が強く粗砂・礫が少量混じる。

26. 自然堆積? (中世?)

2.5 Y 4/1 黄灰色 細砂～中砂

粗砂・粘土ブロック混じる。

27. 自然堆積? (中世?)

2.5 Y 4/1 黄灰色 細砂

しまりが強い。粗砂が豊富に混じる。粘土ブロック混じる。

28. 自然堆積? (中世?)

10 YR 3/1 黒褐色 シルト 粗砂混じる。

29. 自然堆積? (中世?)

10 YR 2/1 黒色 粘土 しまりが強い。

30. 自然堆積? (中世?)

10 YR 2/1 黒色 シルト しまりが強く下部は細砂質。

31. 自然堆積? (中世?)

10 YR 3/1 黒褐色 シルト 礫に富む。

32. 自然堆積? (中世?)

10 YR 3/1 黒褐色 礫

自然堆積? (中世?)

10 YR 3/1 黒褐色 シルト～細砂 粘性が強い。

34. 崩壊土 (中世?)

7.5 Y 5/2 灰オリーブ色 細～中砂

礫に富む。

35. 崩壊土 (中世?)

7.5 Y 5/2 灰オリーブ色 細～中砂

粘性が強い。

36. 自然堆積 (中世?)

7.5 Y 5/2 灰オリーブ色 細～中砂

若干の粗砂～礫混じる。

37. 自然堆積 (中世?)

5 Y 4/2 灰オリーブ色 細～中砂

粗砂～礫混じる。

38. 自然堆積 (中世?)

7.5 Y 5/2 灰オリーブ色 シルト～細砂

粗砂～礫に富む。

39. 自然堆積 (中世?)

7.5 Y 5/2 灰オリーブ色 細砂

粗砂～礫に富む。

40. 自然堆積 (中世?)

10 Y 5/1 灰色 粗砂～礫

しまりがなくサクサクしている。

A. 地山 1

2.5 Y 8/2 灰白色 粘土～シルト

B. 地山 2

2.5 YR 8/2 灰白色 粗砂～礫



「ての字口縁」の痕跡を残すやや古い様相のものである。16の東播系須恵器鉢口縁部の形状は、(その1)調査区で検出した谷部出土土器(第16図-6)に類似する。19の須恵器杯底部は外面のヘラ切り痕跡が残るものであった。また、須恵器台付き小型甗(13)、底部に滑り止めの篋による刺突が多数施された播り鉢もしくは捏ね鉢(20)に特色がある。

・その他の遺物(第32図)

本調査区東南側の包含層から石鏃1点、サヌカイト剥片1点、石庖丁の未製品のような結晶片岩破損品1点が出土した。石鏃は全長2.7cm、最大幅1.9cm、最大厚0.3cmを計る凹基式の比較的大型のものである(1)。全体に白っぽく風化しているが、剥離痕は明瞭である。

(その2)調査区出土土器は、古代・中世ともに(その1)調査区から出土した土器と同じ様相を示している。古代は飛鳥時代に所属し、須恵器でいえばTK209・TK217併行期を中心としている。

中世においては、瓦器・東播系須恵器・瓦質土器が存在する段階のものである。出土数が少ないために現状では明確ではないが、(その1)調査区で出土した土器と同じ段階に所属するものが出土していると考えられる。

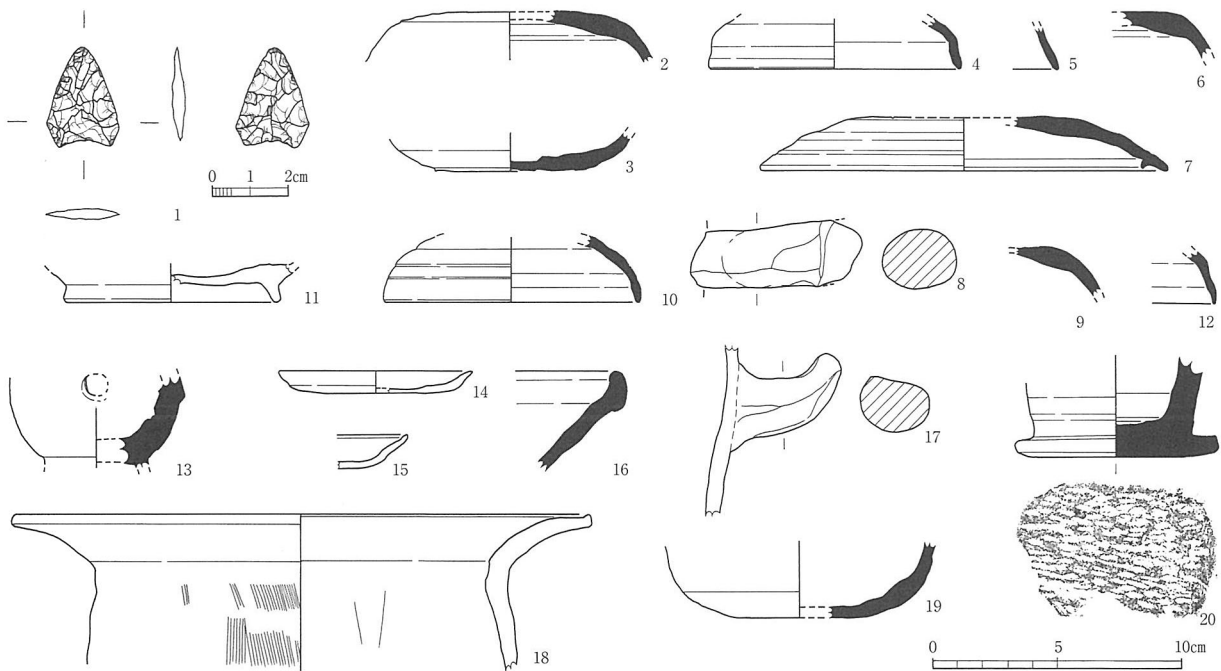
〈参考文献〉

第4章・第1節・第3項の参考文献を参照

※ 古代の土器の時期設定においては、上記のほか、以下の方々の教示を得た。記して感謝の意を表したい。

(敬称略、順不同)

宇治田和生・西田敏秀(財団法人 枚方市文化財研究調査会)、塩山則之・濱田延充(寝屋川市教育委員会)、野島 稔(四條畷市教育委員会)、一瀬和夫(大阪府教育委員会)



第32図 2A区・2B区 遺構・その他出土土器・石器

第7表 2A区・2B区 遺構・その他出土土器・石器観察表

NO.	出土層位	時代	種類・器種	法量 (cm)	NO.	出土層位	時代	種類・器種	法量 (cm)
1	包含層	弥生	石鏃	全長2.7	11	ピット51	A	土師器 杯	※高台径8.5
2	建物1 ピット11	A	須恵器 杯蓋	—	12	ピット53	A	須恵器 杯蓋	—
3	建物1 ピット9	A	須恵器 杯身	※底径6.0	13	包含層	A	須恵器 台付礎	※底径4.4
4	柵列1 ピット100	A	須恵器 杯蓋	※口径10.1	14	谷(中層)	B	土師器 灯明皿	※口径7.8
5	柵列1 ピット98	A	須恵器 杯蓋	—	15	谷(下～ 最下層)	B	土師器 皿	—
6	柵列1 ピット14	A	須恵器 杯蓋	—	16	谷(下～ 最下層)	B	須恵器 東播系鉢	—
7	柵列1 ピット98	A	須恵器 蓋	※口径16.5	17	谷(下～ 最下層)	A	土師器 甑 把手	—
8	柵列1 ピット15	A	土師器 鍋／甑	—	18	谷(下～ 最下層)	A	土師器 甕	※口径23.1
9	柵列1 ピット17	A	須恵器 杯蓋	—	19	谷 (下層)	A	須恵器 杯	※底径5.0
10	建物3 ピット44	A	須恵器 杯蓋	※口径10.2	20	谷(下～ 最下層)	A	須恵器 捏鉢	※底径8.0

A：古代 B：中世 C：近世 ※：復元長

## 第3節 寝屋東遺跡（その3）の調査成果

### 第1項 基本層序（第33図）

現況は南から北に向けて緩やかに傾斜するが、起伏はなく平坦な印象をうける地形である。これは調査区とその周辺が、調査以前には畑もしくは水田として利用されていたことによる。

層序の観察は主に調査区北側と西側の壁面において行った。これを見ても、起伏に乏しい平坦な地形が踏襲されてきたことがわかる。ただ後述するように、検出した遺構の残存深度がいずれも浅いこと、土坑4の埋土に地山のブロック土が多く含まれることから、耕作地造成に伴い、全体的に地山面が削平されたと考えられる。

基本層序は、上から順に表土層（現代耕土）、第1層（包含層）、地山層である。遺構検出は第1層の上面と、第1層を除去して検出した地山面で行った。したがって前者を第1面、後者を第2面とした。

### 第2項 遺構（第34図）

当調査区では確認調査の段階で、中世と考えられる溝1が検出されていた。そのため今回の調査でも、中世の遺構を検出することに主眼が置かれた。

第1面では溝1・土坑4を検出した。確認調査の成果等から、溝1の時期は13世紀後半から16世紀と考えられるが、今回の調査では出土遺物が須恵器細片1点のみだったため、時期を特定できなかった。

第2面では溝2・土坑3を検出した。これらも遺物が出土しなかったため時期の特定はできなかった。

第1層は古墳時代の土器と、中世土器を含んでいることから、中世の包含層と言える。その下面の第2面で検出された各痕跡の埋土が第1層に近似することから、第2面の遺構の形成時期も中世の範疇でとらえられると考えた。

#### ・溝

##### 溝1（第35図）

南東から北西方向を指すが、徐々に幅を減じて途切れてしまう。最大幅2.4m、深さは30cm強である。埋土に微量の炭化物を含む。

出土した須恵器片は厚さ約7mm、大きさが5cm×2cmほどの細片で、器種・時期の特定はできなかった。

##### 溝2（第35図）

東西方向を指向するが、調査区のコーナー部分で検出したものであり、全体の形状は不明である。幅は約1.0m、深さは20cm弱の浅い溝である。

#### ・土坑

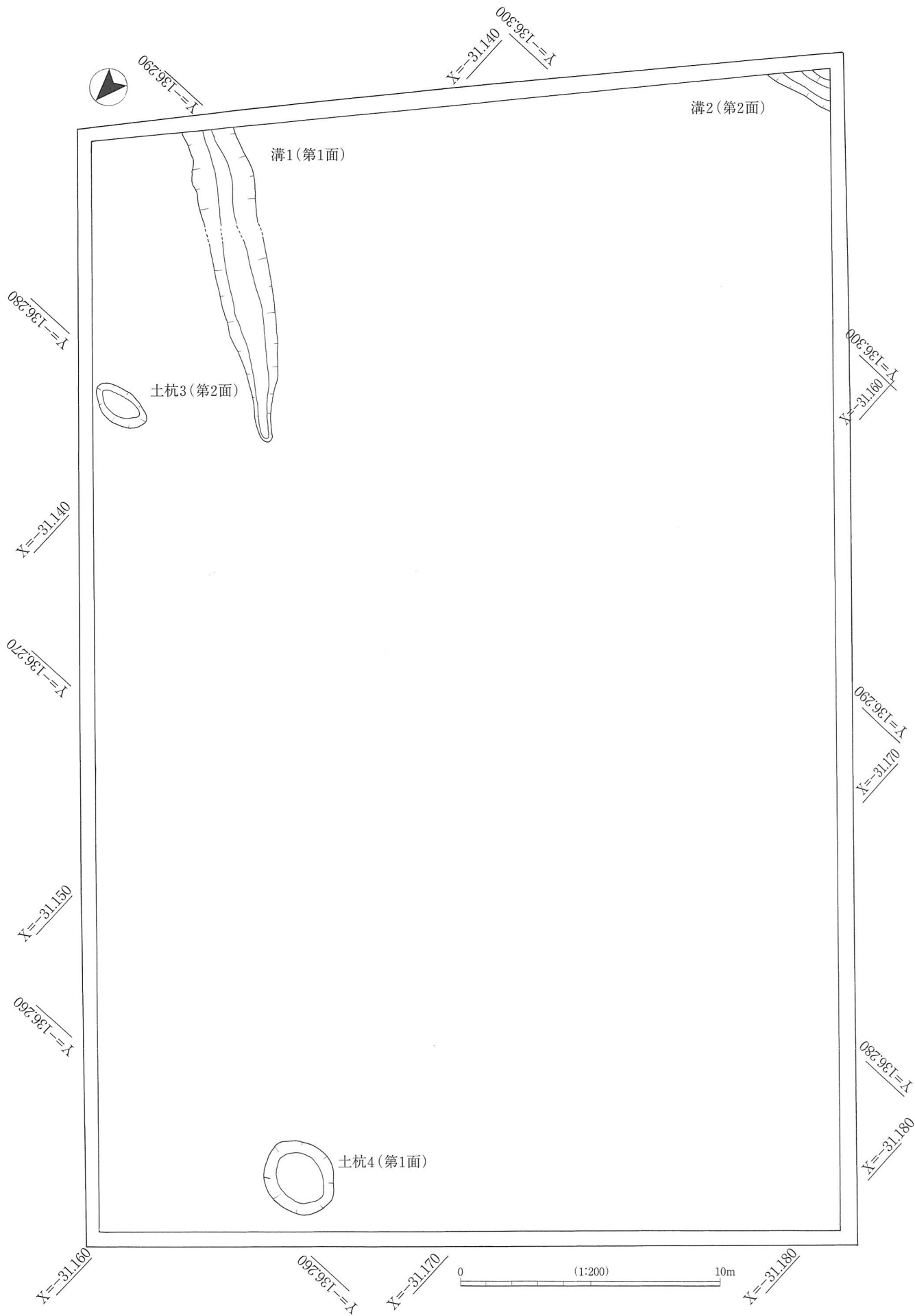
##### 土坑3（第35図）

長軸2.4m、短軸1.4mを測る楕円形の土坑である。深さは40cm弱で、皿状の断面形状を呈する。埋土に微量の炭化物を含む。

##### 土坑4（第35図）

最大径約3mを測る、平面形態が正円形に近い土坑である。残存深度は60cm弱で土坑3と同様平坦な底部をもつ断面形状が皿状の土坑である。埋土に地山のブロック土を多く含む。





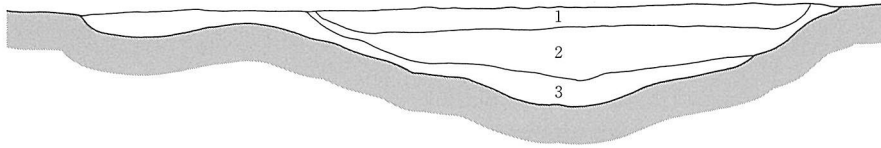
第34図 寝屋東遺跡 (その3) 第1・2面 平面図



T.P. 41.3m  
N

溝 1 (第 1 面)

T.P. 41.3m  
S

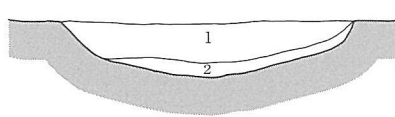


1. 埋土 7.5 YR 4/4 褐色 中砂混じり細砂 (微量の炭化物含む) (土師器片含む)
2. 埋土 5 YR 4/4 にぶい赤褐色 中砂混じり細砂 (粘性あり) (少量の炭化物含む)
3. 埋土 5 YR 5/6 明赤褐色 中砂混じり細砂 (少量の粗砂含む) (少量の炭化物含む)

T.P. 41.2m  
E

溝 2 (第 2 面)

T.P. 41.2m  
W

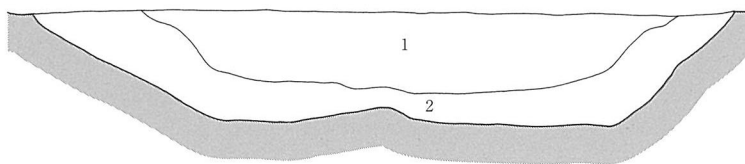


1. 埋土 7.5 YR 6/8 橙色 中砂混じりシルト (少量の植物遺体見られる)
2. 埋土 7.5 YR 5/8 明褐色 粗砂混じり細砂

T.P. 41.1m  
N

土坑 3 (第 2 面)

T.P. 41.1m  
S

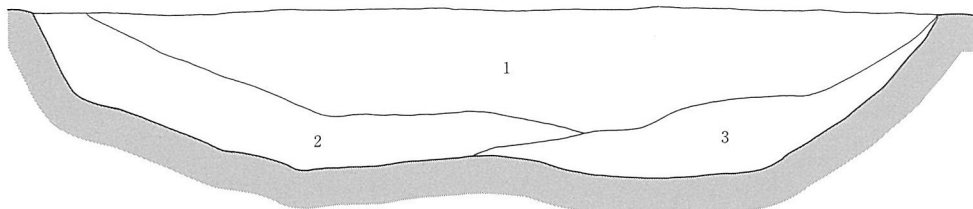


1. 埋土 7.5 YR 4/4 褐色 粗砂混じり細砂 (粘性強い) (少量の炭化物含む) (多量の植物遺体含む)
2. 埋土 5 YR 5/8 明赤褐色 中砂混じり細砂 (粘性あり) (微量の炭化物含む)

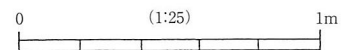
T.P. 41.2m  
W

土坑 4 (第 1 面)

T.P. 41.2m  
E



1. 埋土 7.5 YR 5/6 明褐色 中砂混じり細砂 (少量の直径 0.5 cm 大の礫含む) (微量の炭化物含む)
2. 埋土 7.5 YR 6/8 橙色 中砂混じりシルト (地山ブロック土が目立つ) (粘土ブロック入る)
3. 埋土 7.5 YR 5/8 明褐色 中砂混じり細砂 (地山ブロック土が目立つ) (多量の直径 0.5 cm 大の礫含む)



第35図 寝屋東遺跡 (その 3) 検出遺構断面図

・その他

上記の遺構以外に、不整形な落ち込みやくぼみ等を多数検出したが、それらから出土遺物を認めなかった。埋土の堆積状況等から見て、木の根等の痕跡であり、人為的なものではないと考えた。

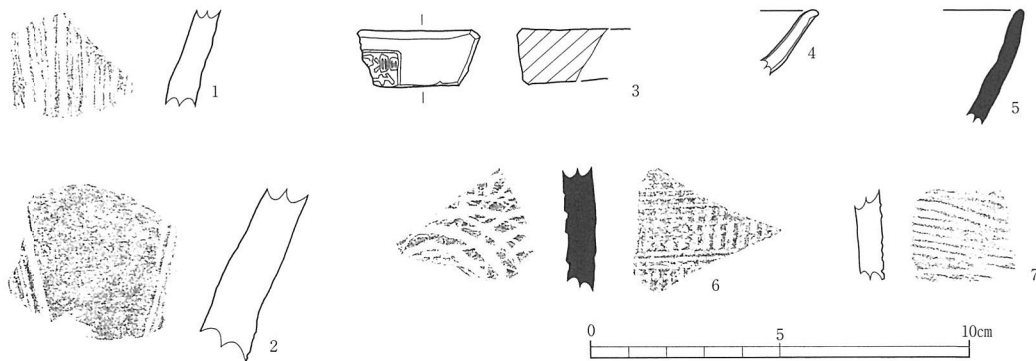
第3項 遺物 (第36図)

第1層出土遺物を主体とする約40点の土器を検出した。遺物の出土量は、調査地の北側および東南側に多い傾向が認められた。いずれも破損、磨滅した細片である。

図示したのは、表土層出土の播鉢2点(1・2)、第1層から出土した瓦側縁部(3)、青磁碗口縁部(4)、須恵器杯または鉢口縁部(5)、須恵器甕体部(6)、瓦質土器甕体部(7)の計7点である。

播鉢(1・2)は、中・近世の陶器である。3は側部に製造者屋号の押捺がある。破損のため文字は不明であるが、「□増」が読みとれる。胎土・焼成からみれば、近世以降に所属するものと考えられる。4は中世の青磁碗の口縁部である。5の須恵器口縁部は、内外面ともに回転ヨコナデが施される。胎土・焼成などの特徴からみて、中世東播系の須恵器碗と考える。6も須恵器であるが、内面に円弧の当て具痕、外面は叩きの上に刷毛目調整を施したもので、古代に所属する。7は外面に叩き調整を施しており、中世のものである。

なお当調査区における遺構出土遺物は、溝1から出土した須恵器破片1点であった。これは細片のため、器種・所属時期は不明である。



第36図 寝屋東遺跡(その3) 包含層出土土器

## 第5章 まとめ

(その1)・(その2)調査区とその周囲の現況は、北東および南西方向に向かってゆるやかに傾斜する耕作地である。調査の結果、(その1)調査区北東側と(その2)調査区西端で、南から北に向かって下る谷地形を検出した。これらの谷が(その1)・(その2)調査区の南西側で合流することは、周辺地形との比較を通して明らかである。つまり(その1)・(その2)調査区で検出した掘立柱建物跡群は、丘陵先端の独立性のある地形を占めた状況がうかがえる。

掘立柱建物跡の所属時期は、建物1とそれに付随するとみられる柵1・建物3・建物10の柱穴から出土した遺物より、部分的に判断が可能である。それ以外の掘立柱建物跡に関しては出土遺物がなく、後世の耕作地造成に伴う削平により上層の包含層も存在しなかったため、所属時期の判断が難しい。しかし柱穴の規模や主軸方向が近似すること、柱穴埋土の類似性、隣接する谷地形埋土から出土した遺物のうち、中世段階の耕作地開発に先立つ時期の遺物と、掘立柱建物跡出土遺物とにあまり時期的な齟齬が認められないこと等から、それ以外の建物に関しても、同様の時期に属する可能性は十分あると考えた。したがって(その1)・(その2)調査区で検出した掘立柱建物群は、おおむね飛鳥時代を主体とする古代集落を構成するものと判断したい。ただ、以下に記すようにVI群に含まれる建物に関しては、主軸方向のずれが、他と比べて非常に大きいため、他の時期に含まれる可能性が高いと考える。

掘立柱建物群は、主軸方向や規模・構造などの属性をもとに分類が可能である。主軸方向にもとづくと以下のグルーピングが可能である。

- ・ I群 主軸方向がN-3°~9°-E(W)を指すもの
- ・ II群 主軸方向がN-15°-Wを指すもの
- ・ III群 主軸方向がN-20°-Wを指すもの
- ・ IV群 主軸方向がN-25°-Wを指すもの
- ・ V群 主軸方向がN-30°-Wを指すもの
- ・ VI群 主軸方向がN-53°-Eを指すもの

各群に対応する掘立柱建物跡ないし柵の規模・構造を一覧すると第8表のようになる。これをみると各群は、2ないし3棟の建物を最小単位とする建物群からなること、その最小単位は相互に近接して位置する傾向のあることが指摘できる。さらにそれらは柱間や規格などに共通点の多いこともみてとれる。このような観点から、逆に例外にあたる事例に目を転ずるとどのような想定が可能だろうか。

まず対応する建物が1棟しかない群の建物7に関していえば、主軸方向に若干のずれを含むものの、建物2とほぼ並列する状況を指摘できる。両者は2間×3間の建物で、規格の面でも共通点が認められる。IV・Vが同一の属性に含まれると仮定して、それらの建物配置を仔細にながめると、次のようなことが言える。

建物12・13は、建物2・6・7から離れた場所で相互に近接しており、一つのまとまりを構成している。また建物2・6・7に関しても、建物6がその他の2棟からやや離れて位置しており、別の単位に含まれていたと想定できる。建物6に近接する建物がかつてあったか、今後予定の(その4)調査区であらたに検出されるとすれば、それらを一つの単位ととらえるのが自然と考えられる。これらのことから現時点では、N-25°~30°-Wの建物に関し、2棟を最小単位とする建物群が少なくとも3箇所に展開していたと考えたい。

他方、I群に含まれる建物16が一つだけ離れた場所に位置していること、VI群に対応する建物が1棟しかないことに関しても、同様の観点から次の可能性が指摘できる。すなわちそれぞれの建物には、

主軸方向や規格に共通性のある建物が近接してあったが、それらは後世に削平され、失われたという可能性である。そうであればⅠ群に含まれる建物跡に関しても、2棟を最小単位とする建物群が、複数箇所に展開していたと想定できる。なおⅡ群に関しては現在のところ、3棟を最小単位とする建物群と考えたい。

次に各最小単位の建物群をみると、建物9・11の関係に端的にあらわれているように、平面積に大・小の別が見られる傾向のあることも伺える。またそれらの配置を見ると、建物3・4のように並列するもの、建物1と建物8のように、直行する配置を示すものの2パターンが認められる。これらは、当遺跡で検出した建物群の最小単位がどのような性質のものだったか検討する際、一つの手がかりとなろう。

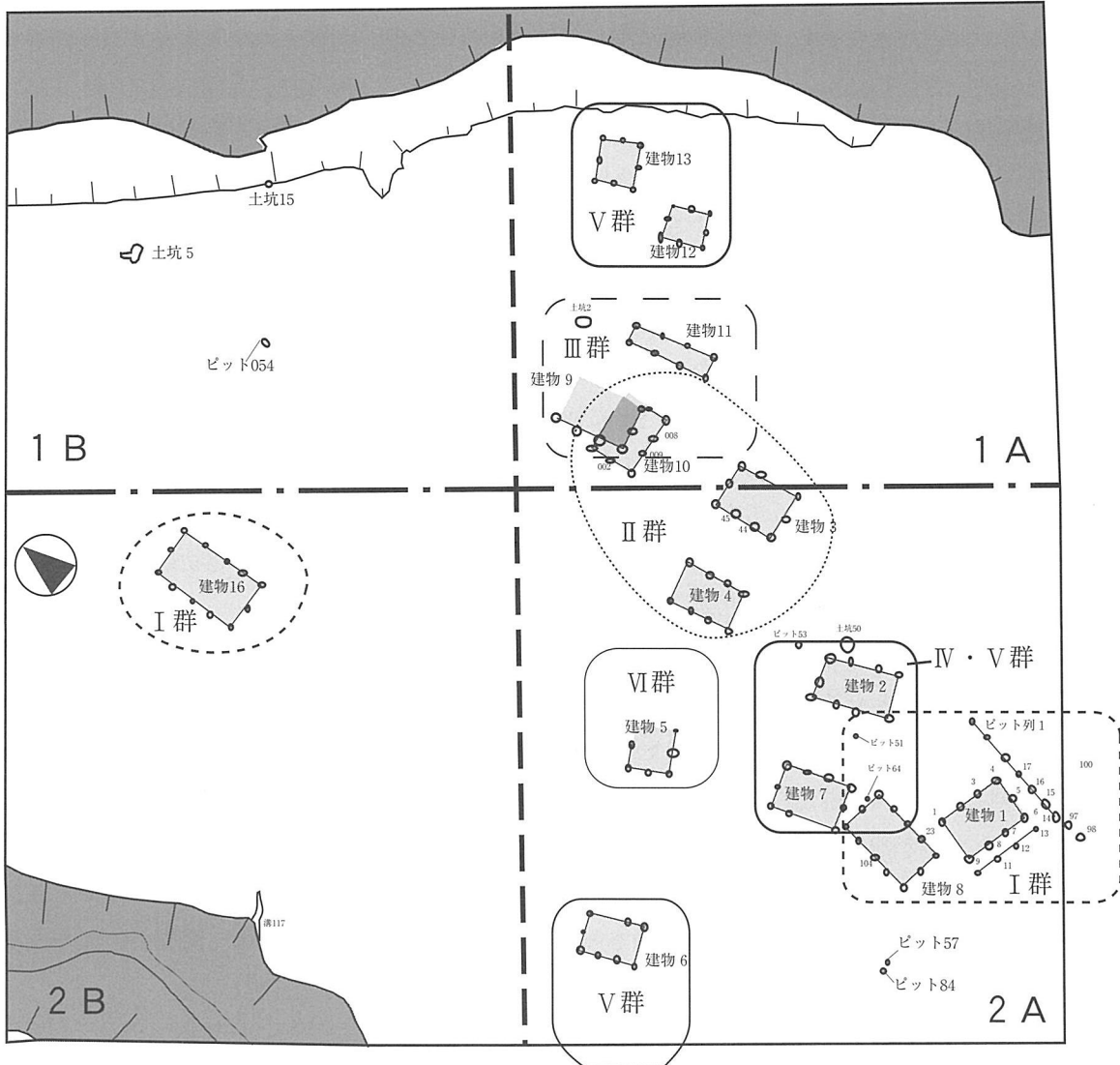
今回検出した古代集落が、独立性の高い丘陵先端部に位置することは先に述べた。谷部でこの時代にさかのぼる地山削平土を検出できなかったことから、集落が展開するにあたって大規模な造成が行われたとは考えにくい。したがって今回検出された掘立柱建物は、もともと緩傾斜面を呈する丘陵の尾根筋を選んで建てられたと考える。その場合、建物の主軸方向のずれは地形変化に起因して生じたと考えられることも可能だろう。ただ、もしそうであれば主軸方向のずれは、かなり微視的な地形の変化に対応した結果と言え、逆に建物7・2と建物12・13のように、やや離れた場所に位置する建物群同士が、ほぼ同一の主軸方向を指すことに矛盾が生じる。

そこで建物の主軸方向の違いは、時期差を反映するものと仮定したい。そうであれば今回検出した掘立柱建物跡は、少なくとも5時期からなると考えられる。前述したように柱穴から出土した土器の点数が少ないため、これらの建物の時期を判断する材料は限られる状況である。ただいずれの柱穴出土土器も、それらの特徴からみて古代に位置付けられること、建物が占める丘陵尾根に隣接する谷埋土の最下層から出土した土器が飛鳥時代中葉から奈良時代初頭ないし前葉に位置付けられること等から推して、今回検出した集落の時期もほぼその時期に対応すると考えると、掘立柱建物はそれぞれの耐用年数に応じて順次、建てかえられていったものと推測できる。なお集落範囲は、(その3)調査区の調査成果より現在のところ、(その1)調査区で検出した谷の北側へは展開しないと考えている。

第8表 寝屋東遺跡検出掘立柱建物一覧表

群	遺構名	間×間	大きさ (㎡)	備 考
Ⅰ群	建物1	2×3	22 (30)	ピット1、3～9、11～13から土器出土。建物南辺に庇を設ける
	柵1	8間以上		建物1に付随する
	建物8	2×4	26	ピット23、104から土器出土
	建物16	2×4	31	
Ⅱ群	建物3	2×3	21	
	建物4	1×3	17	
	建物10	2×3	19	ピット2・8・9から土器出土、建物の間数・大きさは推定値
Ⅲ群	建物9	2×3	22	
	建物11	1×3	9	
Ⅳ群	建物7	2×3	20	
Ⅴ群	建物2	2×3	24	
	建物6	2×3	14	
	建物12	2×2	10	総柱建物
	建物13	2×2	11	総柱建物
Ⅵ群	建物5	2×2?	12?	建物の間数・大きさは推定値

(その1)



(その2)

■ 谷      ■ 掘立柱建物

0 (1:600) 20m

第37図 寝屋東遺跡建物配置図

# 写 真 图 版





1

1A区 全景 (北西から)



2

1A区 全景 (東から)



1

1 B区 全景（南東から）



2

1 B区 全景（北東から）





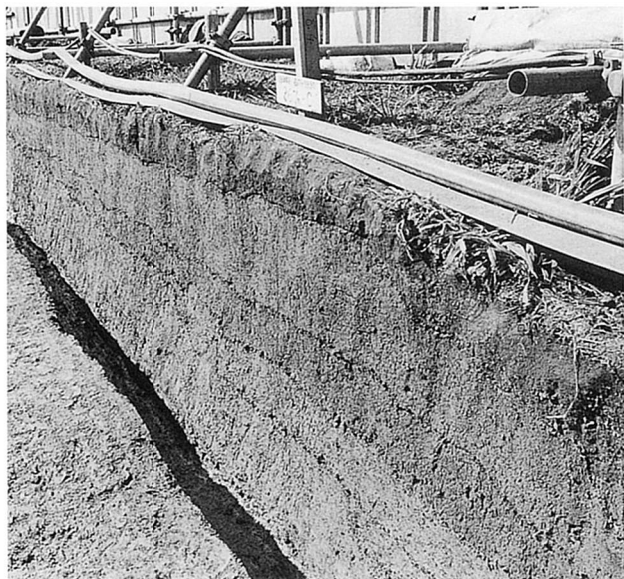
1

1A区 谷 (南東から)



2

1B区 谷 (南東から)



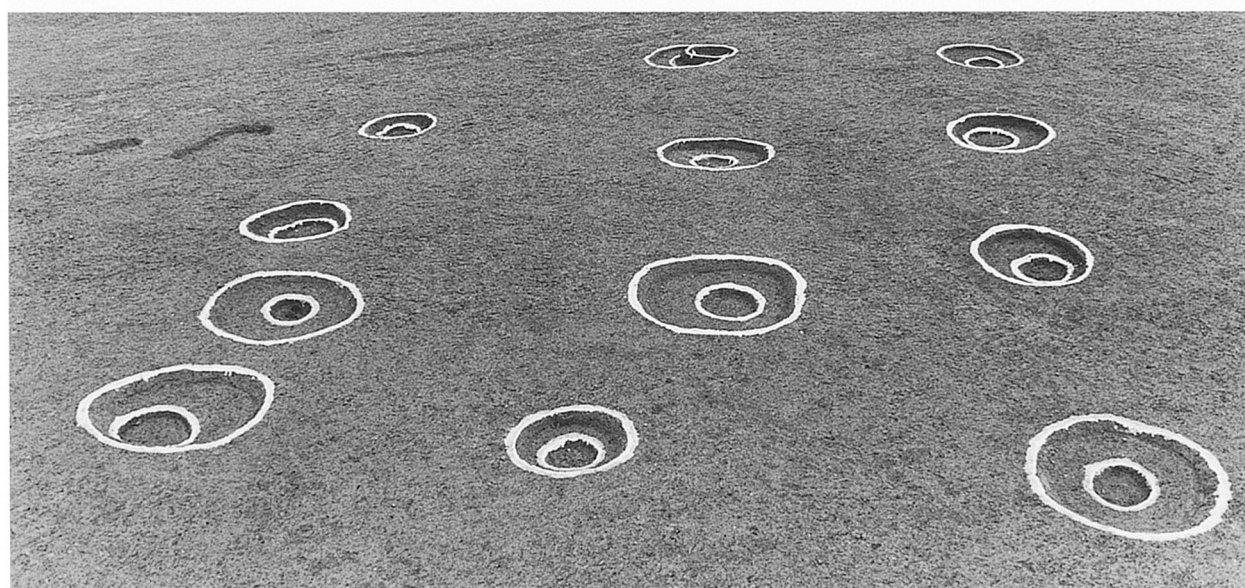
1 1 B区 調査区北西壁断面（南から）



2 1 B区 周辺地形との比較（南東から）



3 1A区 建物9（南から）



4 1A区 建物10（西から）





1

1A区 建物12（南から）



2

1A区 建物13（南から）



3

1A区 建物11（南から）

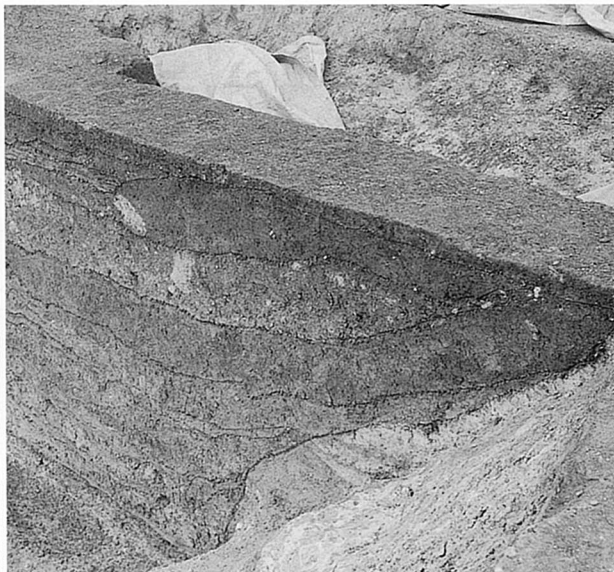


4

1A区 建物9、ピット011（西から）



1 1A区 土坑2（西から）



2 1B区 粘土採り穴横断面（南東から）



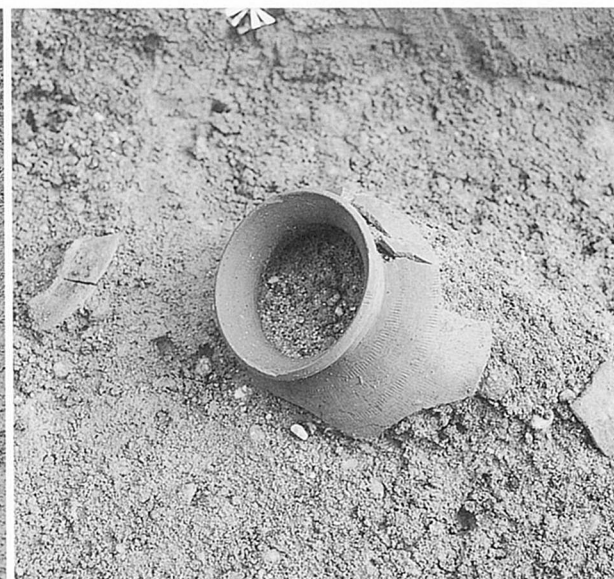
3 1B区 谷横断面（南から）



4 1B区 谷横断面④～⑤層（南東から）

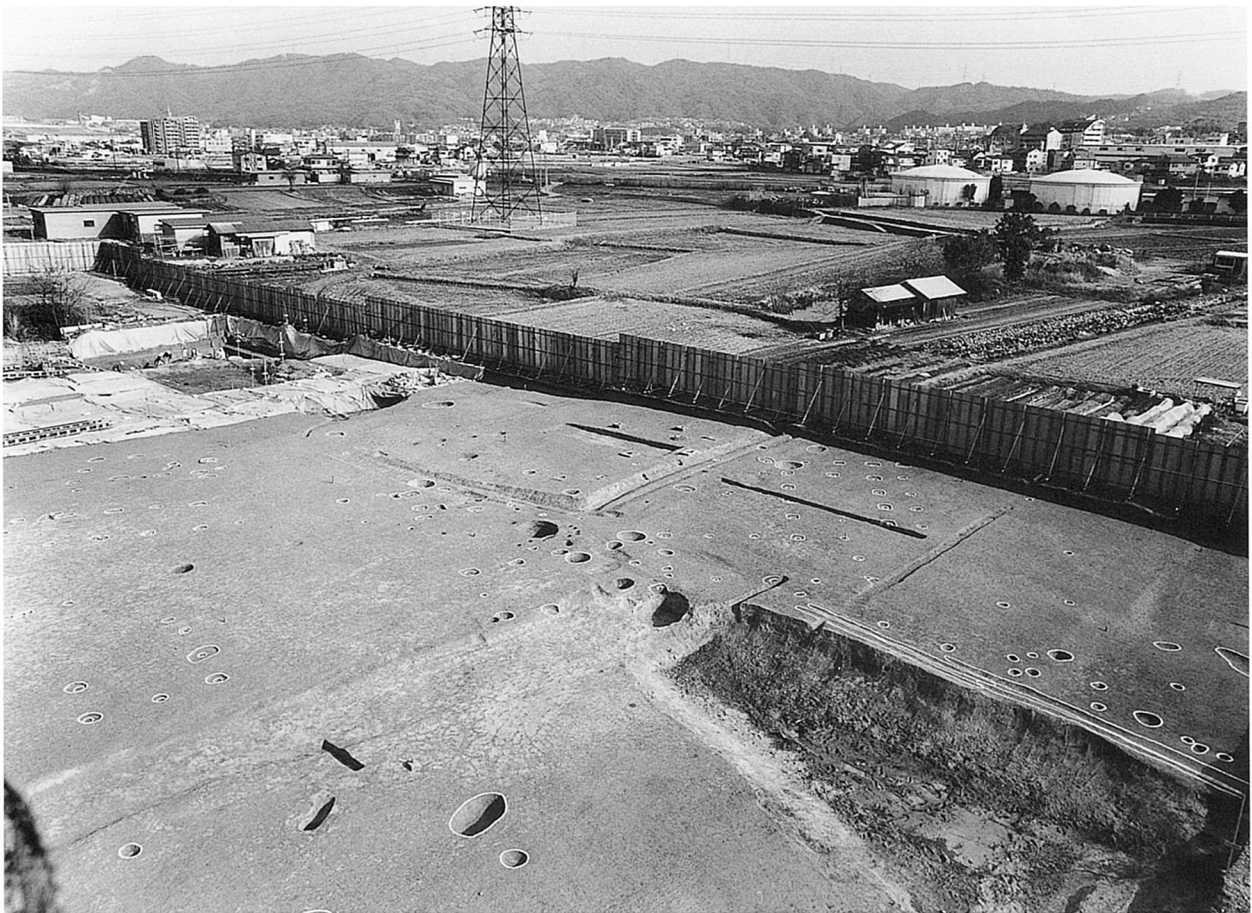


5 1B区 谷遺物検出状況（南から）



6 1A区 谷遺物検出状況（南から）





1

2 A区 全景（北西から）



2

2 A区 全景（北から）



1

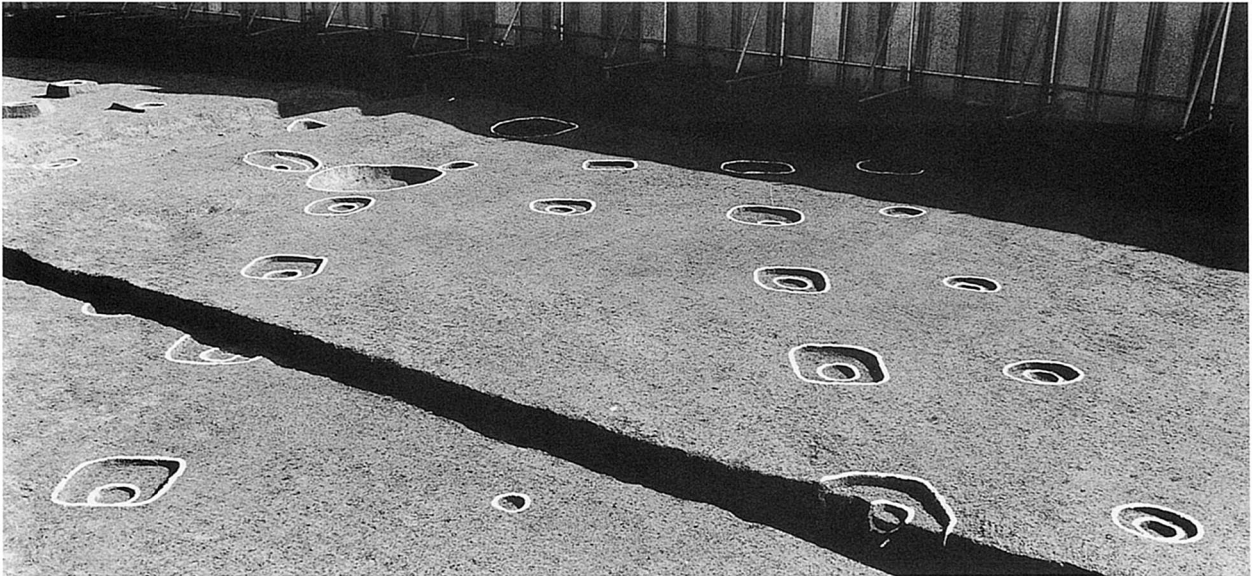
2 B区 全景 (南西から)



2

2 B区 谷 (南から)





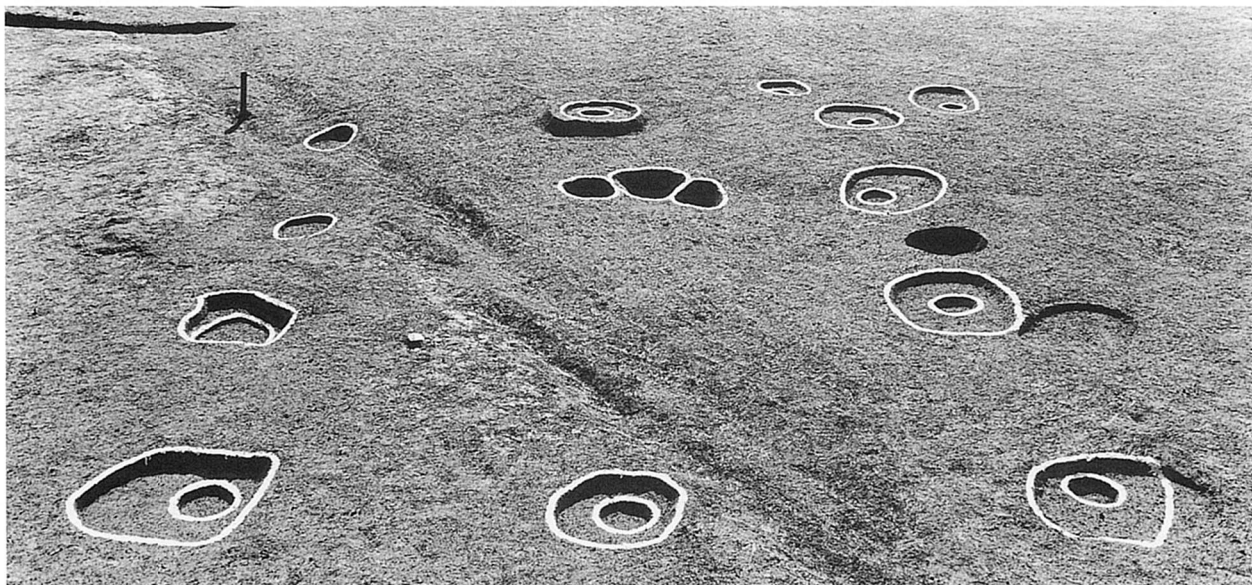
1

2 A区 建物1 (西から)



2

2 A区 建物2 (北から)



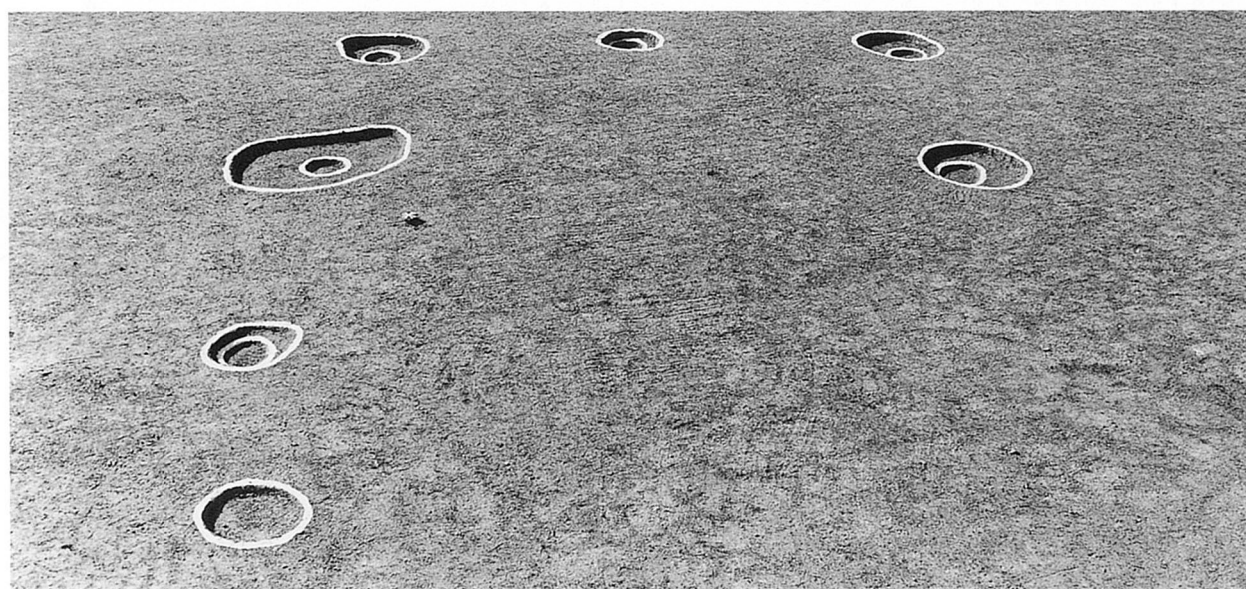
3

2 A区 建物3 (北から)



1

2 A区 建物 4 (北から)



2

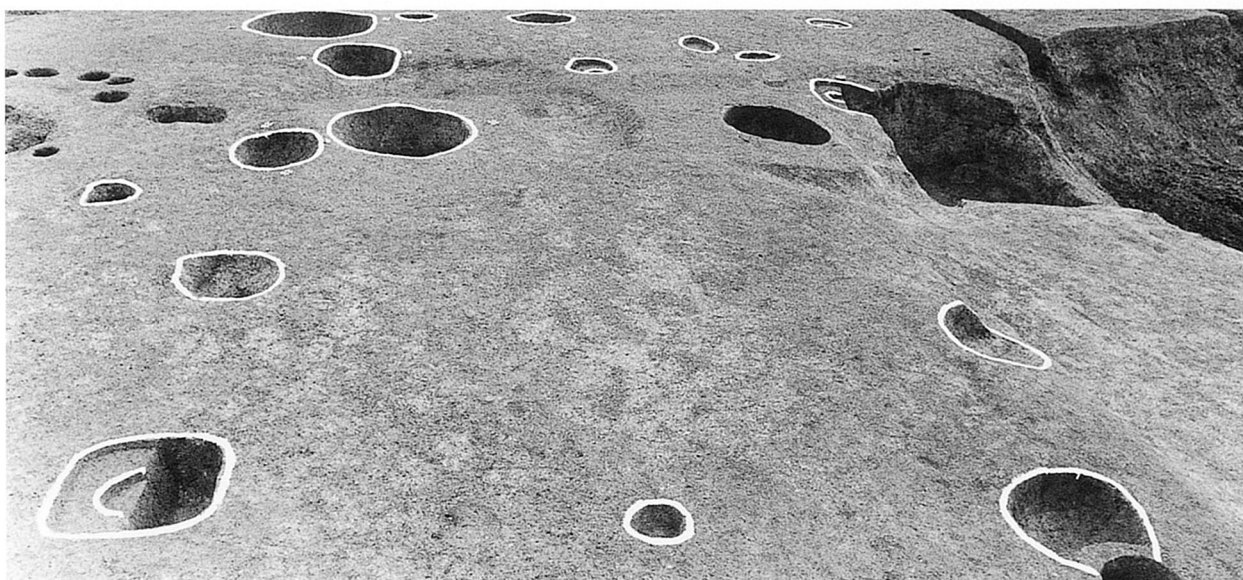
2 A区 建物 5 (北東から)



3

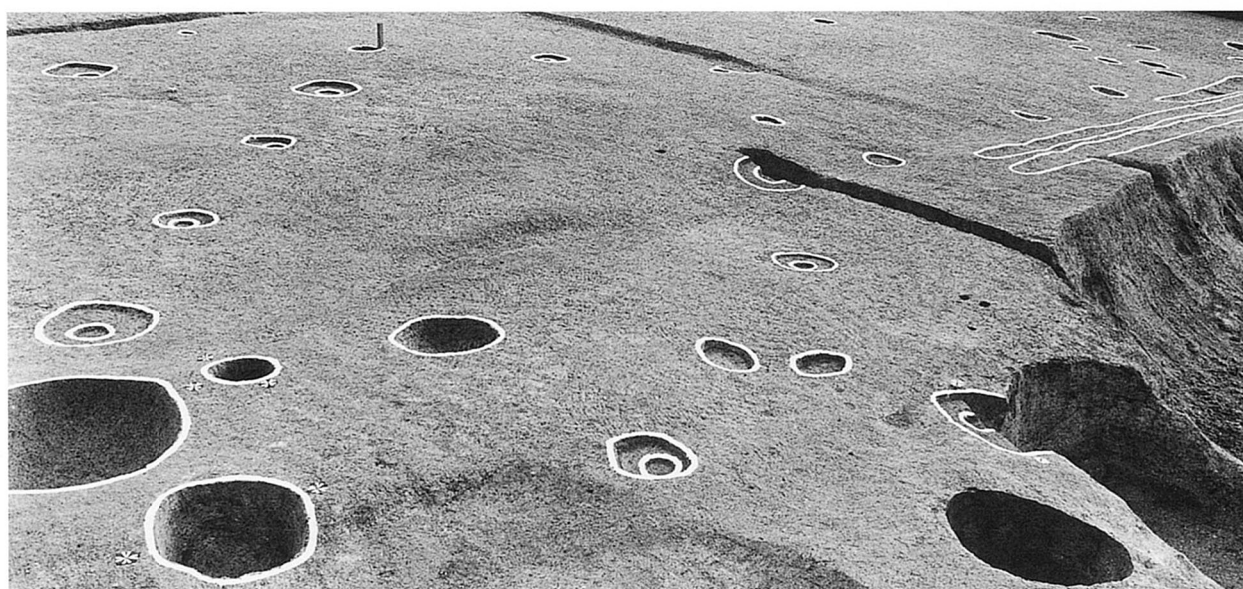
2 A区 建物 6 (北西から)





1

2 A区 建物7（北から）



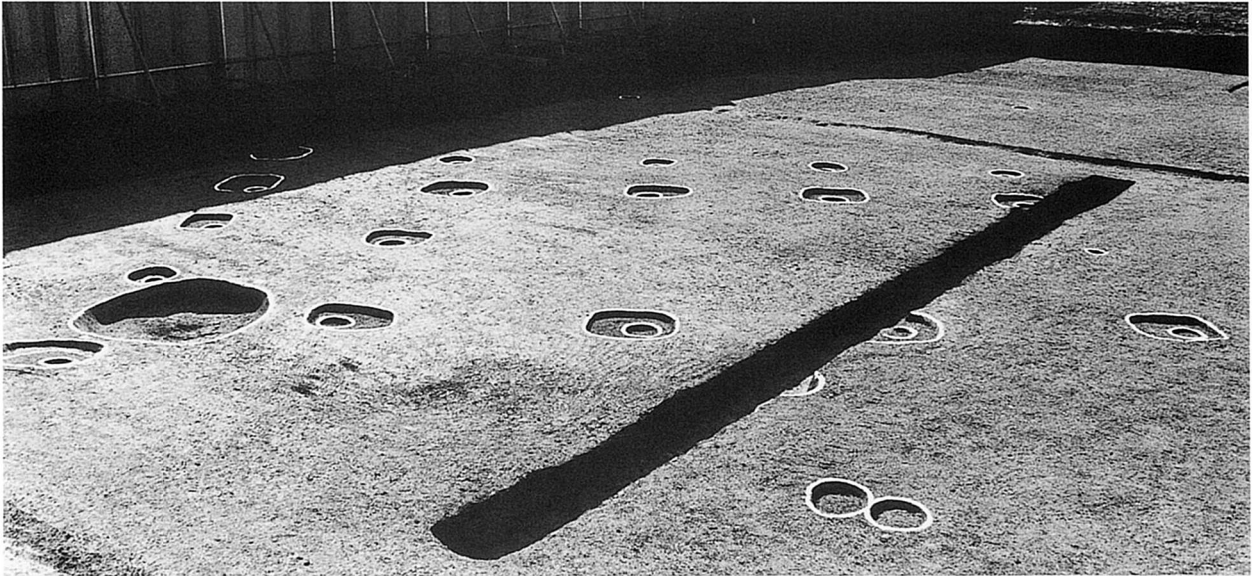
2

2 A区 建物8（北から）



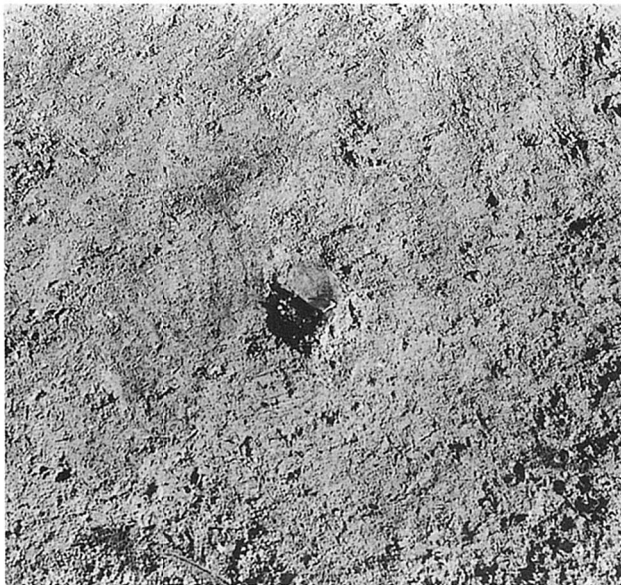
3

2 B区 建物16（南から）



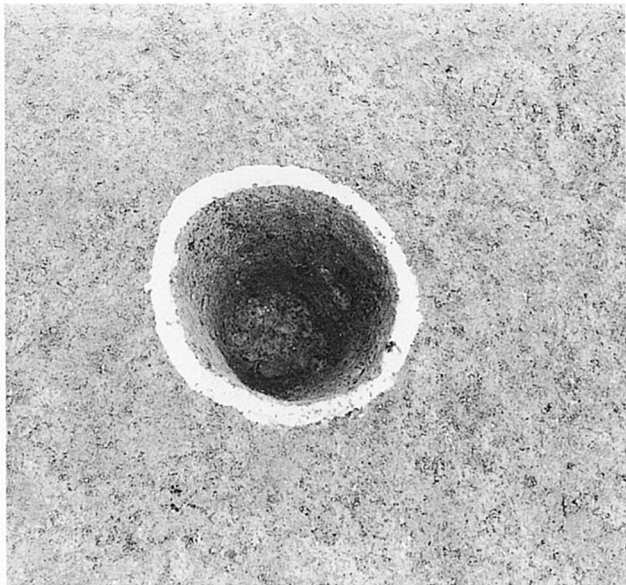
1

2 A区 建物1・柵1 (北から)



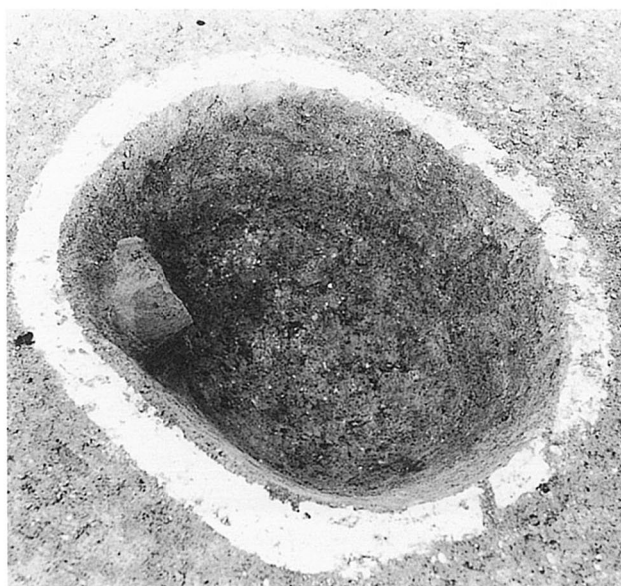
2

2 A区 ピット51遺物出土状況 (北西から)



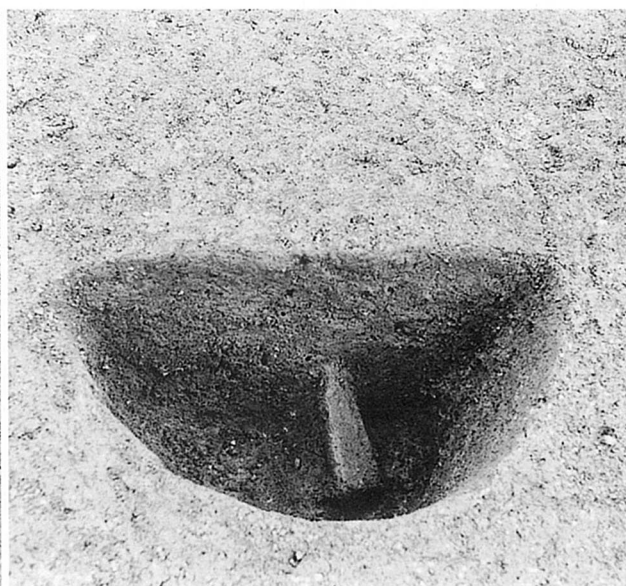
3

2 A区 ピット64遺物出土状況 (北西から)



4

2 A区 ピット57遺物出土状況 (南西から)



5

2 A区 ピット84遺物出土状況 (南西から)





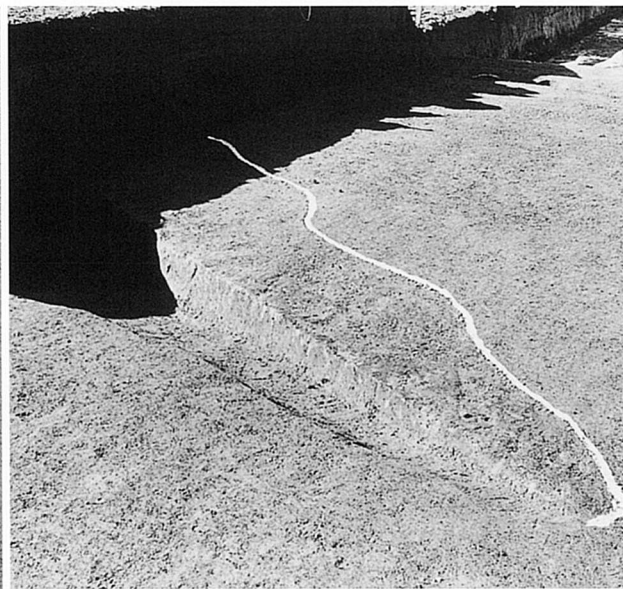
1 2 A区 ピット98遺物出土状況 (北から)



2 2 A区 土坑50遺物出土状況 (南西から)



3 2 B区 溝117 (西から)



4 2 A区 落込み27 (東から)



5 2 B区 谷堆積状況 (北西から)



6 2 A区 土採り穴 (南から)



1

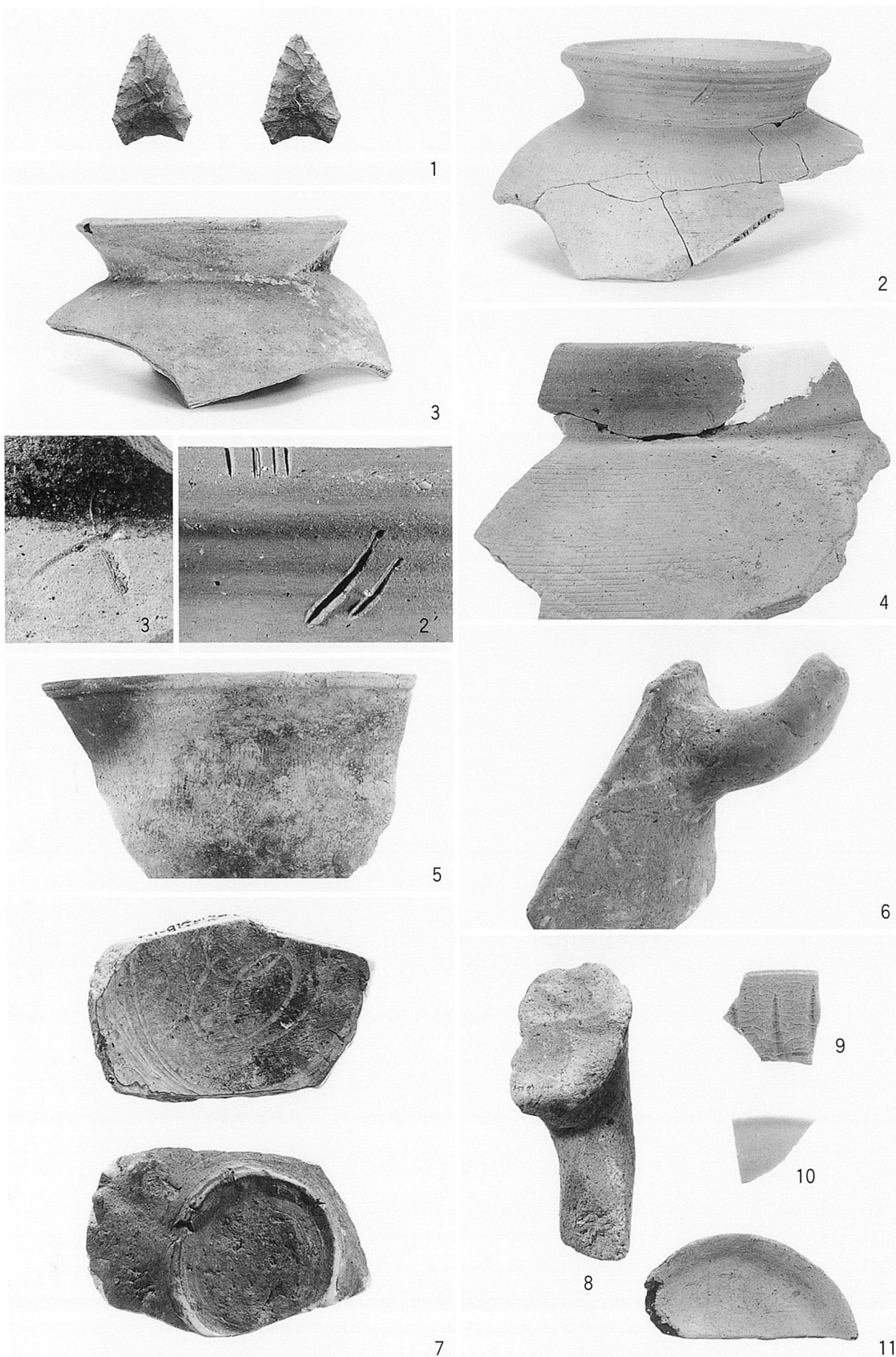
1・2面西半部全景（南西から）



2

1・2面東半部全景（西から）





1：(その2) 包含層出土 2～4：(その1) 谷部出土 5：(その1) 包含層出土 6：(その2) 谷部出土  
7：(その1) 包含層出土 8：(その1) 谷部出土 9：(その1) 谷出土 10：(その3) 第1層出土 11：(その2) 谷出土

寝屋東遺跡(その1～その3) 出土遺物

## 報 告 書 抄 録

ふりがな	ねやひがしいせきいち							
書名	寝屋東遺跡 I							
副書名	一般国道 1 号バイパス (大阪北道路) ・ 第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財調査報告書							
巻次								
シリーズ名	(財) 大阪府文化財センター 調査報告書							
シリーズ番号	第123集							
編著者名	井藤暁子、若林幸子、河端智、中尾智行、松尾洋次郎、							
編集機関	(財) 大阪府文化財センター							
所在地	〒590-0105 大阪府堺市竹城台 3 丁 21 番 4 号 大阪府教育委員会文化財調査事務所 3 階							
発行年月日	2004年12月28日							
しよしゅういせきめい 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ねやひがしいせき 寝屋東遺跡 (その 1)	寝屋川市 寝屋	27215	24	34° 46' 04"	135° 41' 32"	2002 年 10 月 16 日 ) 2003 年 3 月 20 日	2,946㎡	第 2 京 阪 道 路 (大 阪 北 道 路) の 建 設 に 伴 う
ねやひがしいせき 寝屋東遺跡 (その 2)	寝屋川市 寝屋	27215	24	34° 46' 04"	135° 41' 32"	2002 年 10 月 16 日 ) 2003 年 3 月 20 日	3,814㎡	
ねやひがしいせき 寝屋東遺跡 (その 3)	寝屋川市 寝屋	27215	24	34° 46' 04"	135° 41' 32"	2002 年 12 月 3 日 ) 2003 年 2 月 20 日	1,304㎡	
所収遺跡名	種 別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
寝屋東遺跡	集落	飛鳥時代		掘立柱建物跡		須恵器・土師器	比較的独立性の高い緩やかな丘陵上を利用して展開した古代集落を検出。この集落に隣接する谷の埋没状況より、中世～近世にいたる耕地開発の経緯も跡付けることができた。	
	耕作地	中世～近世		溝、段、畦畔		瓦器・土師器・須恵質土器		

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第123集

## 寝屋東遺跡 I

一般国道一号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財調査報告書

発行年月日／2004年12月28日

---

編集・発行／財団法人 大阪府文化財センター

〒590-0105 大阪府堺市竹城台3丁目21番4号

TEL 072-299-8791 FAX 072-299-8905

---

印刷・製本／株式会社 中島弘文堂印刷所

大阪市東成区深江南2丁目6番8号